小説版
零の軌跡　四つの運命

田沢　大典
Illustration 松竜

不良グループの抗争

この世界では、空の女神（エイドス）が、はるか天空から人々を見守っているという。

その神の世界から下界を見下ろせば、大地は緑深く、海は碧い。唯々、美しい世界が広がっているように見える。

だが、実際は違う。

多くの人がその大地に生まれ、暮らし、笑い、泣き、憎しみ、争い、奪い、奪われ、繁栄し、滅びていく。

人々は大地の上に国境線を引き、見えもしないその線をめぐって、駆け引きをし、多くの金と時間と命を浪費していた。

クロスベル自治州。ゼムリア大陸西部に位置し、エレボニア帝国とカルバード共和国というふたつの大きな国家に挟まれた地にあるこの自治州は、国境線の狭間で踊るダンサーのようなものである。

元々大陸有数の貿易都市のひとつだったが、エレボニア帝国とカルバード共和国、そして、小国ながら巧みな外交で両国と拮抗する隣国リベール王国の三カ国間で結ばれた《不戦条約》以降、投資対象として諸外国の資本の流入が加速した。

自治州の中心となるクロスベル市街では、次々とデパートやオフィスビルが建てられ、それに呼応するように人と物と金が集まっている。

建物は、活況を見せつけるかのようにそびえ立ち、店には美しいドレスや宝石、さらには遠い異国の珍しい品々までが並ぶ。そして、それらの繁栄を享受しようと、多くの人々が行き交う。

しかしこの華やかな街の裏には、多くの影が潜み、うごめいていた。

クロスベルというダンサーは、一心不乱に踊り続ける。無事踊りきり、喝采を浴びるのか。それとも踊りの途中で力尽き倒れ、大国に食い散らかされるのか、あるいは足を踏み外し、奈落の底へ落ちるのか——その行く末は、今は誰も知らない。

クロスベル自治州の中心地、行政と商業の要となっているクロスベル市街は、さまざまな色を持った街がモザイクのように集まっている。

多くの人々が行き交い賑わう中央通り。カジノや高級ホテルが立ち並び、不夜城の様相を呈している歓楽街。警察や図書館、美しい芝生の広場がある整然とした印象の行政区。雑然とした中にも生活感と活気を感じられる住宅街。

そして、どこか薄暗く、退廃的な空気を漂わせるダウンタウン。

市街の住人も、用がない限りは近寄らない、むしろ用があっても近寄りたくないと考える場所である。

力をもてあました若者たちがケンカを繰り広げ、街のあちこちにその傷跡が残るダウンタウン。その傷跡がもっとも顕著な広場に、いま三組の集団が対峙していた。

ひとつは、揃って赤色のジャージを羽織っている若者が四人。ジャージの背中には、毒蛇が剣に巻きついている紋章が描かれている。その凶暴な顔つきから、すぐにダウンタウンに巣くう者たちだと分かる。

もうひとつは、同じく揃いの青色の服を着ている若者の集団。こちらも数は四人。彼らの着ている服は、幾何学模様のデザインが施され、一種宗教的とも言える雰囲気を醸し出している。彼らもまた、ダウンタウンに巣くう者たちだ。

赤と青、ふたつの不良グループたちの抗争なら、ここダウンタウンでは日常茶飯事である。現に彼らは身体のあちこちに傷を作り、肩で息をしていた。戦いがあった証拠である。

しかし、今日はもうひとつ、不可思議な集団がいた。どう見てもダウンタウンの住人ではない青年に、年端のいかぬ少女まで混じっている。

しかも彼らは武器を構え、その不良グループ達を威圧していた。この第三の集団が、赤と青の青年たちを叩き伏せたのだ。

と、第三の集団のひとり、先頭に立っていた青年が、声を張りあげた。

「もうやめるんだ！」

凛としたその声は本人の中に眠る意志の強さを垣間見せる。

しかし、その場に、耳を傾けようとする者はいなかった。

「こ、こいつら、ただの素人じゃない……!?」

不良グループたちは、当然ながら腕に覚えのある者たちの集まりである。その自分たちが、体格的には圧倒的に劣る者たちになすすべもなくやられた。そのことが信じられないのだ。

特に、第三の集団の中で、もっとも幼い少女が持つ力に驚愕していた。

「あ、あの杖はなんだ？　ビリビリきたぞ……」

小説版

零の軌跡　四つの運命

田沢　大典
Illustration　松竜

不良グループの抗争

この世界では、空の女神が、はるか天空から人々を見守っているという。
その神の世界から下界を見下ろせば、大地は緑深く、海は碧い。唯々、美しい世界が広がっているように見える。
だが、実際は違う。
多くの人がその大地に生まれ、暮らし、笑い、泣き、憎しみ、争い、奪い、奪われ、繁栄し、滅びていく。
人々は大地の上に国境線を引き、見えもしないその線をめぐって、駆け引きをし、多くの金と時間と命を浪費していた。
クロスベル自治州。ゼムリア大陸西部に位置し、エレボニア帝国とカルバード共和国というふたつの大きな国家に挟まれた地にあるこの自治州は、国境線の狭間で踊るダンサーのようなものである。
元々大陸有数の貿易都市のひとつだったが、エレボニア帝国とカルバード共和国、そして、小国ながら巧みな外交で両国と拮抗する隣国リベール王国の三カ国間で結ばれた《不戦条約》以降、投資対象として諸外国の資本の流入が加速した。
自治州の中心となるクロスベル市街では、次々とデパートやオフィスビルが建てられ、それに呼応するように人と物と金が集まっている。
建物は、活況を見せつけるかのようにそびえ立ち、店には美しいドレスや宝石、さらには遠い異国の珍しい品々までが並ぶ。そして、それらの繁栄を享受しようと、多くの人々が行き交う。

しかしこの華やかな街の裏には、多くの影が潜み、うごめいていた。
クロスベルというダンサーは、一心不乱に踊り続ける。無事踊りきり、喝采を浴びるのか。それとも踊りの途中で力尽き倒れ、大国に食い散らかされるのか、あるいは足を踏み外し、奈落の底へ落ちるのか——その行く末は、今は誰も知らない。
クロスベル自治州の中心地、行政と商業の要となっているクロスベル市街は、さまざまな色を持った街がモザイクのように集まっている。
多くの人々が行き交い賑わう中央通り。カジノや高級ホテルが立ち並び、不夜城の様相を呈している歓楽街。警察や図書館、美しい芝生の広場がある整然とした印象の行政区。雑然とした中にも生活感と活気を感じられる住宅街。
そして、どこか薄暗く、退廃的な空気を漂わせるダウンタウン。
市街の住人も、用がない限りは近寄らない、むしろ用があっても近寄りたくないと考える場所である。
力をもてあました若者たちがケンカを繰り広げ、街のあちこちにその傷跡が残るダウンタウン。その傷跡がもっとも顕著な広場に、いま三組の集団が対峙していた。
ひとつは、揃って赤色のジャージを羽織っている若者が四人。ジャージの背中には、毒蛇が剣に巻きついている紋章が描かれている。その凶暴な顔つきから、すぐにダウンタウンに巣くう者たちだと分かる。
もうひとつは、同じく揃いの青色の服を着ている若者の集団。こちらも数は四人。彼らの着ている服は、幾何学模様のデザインが施され、一種宗教的とも言える雰囲気を醸し出している。彼らもまた、ダウンタウンに巣くう者たちだ。
赤と青、ふたつの不良グループたちの抗争なら、ここダウンタウンでは日常茶飯事である。現に彼らは身体のあちこちに傷を作り、肩で息をしていた。戦いがあった証拠である。
しかし、今日はもうひとつ、不可思議な集団がいた。どう見てもダウンタウンの住人ではない青年に、年端のいかぬ少女まで混じっている。
しかも彼らは武器を構え、その不良グループ達を威圧していた。この第三の集団が、赤と青の青年たちを叩き伏せたのだ。
と、第三の集団のひとり、先頭に立っていた青年が、声を張りあげた。
「もうやめるんだ！」
凜としたその声は本人の中に眠る意志の強さを垣間見せる。
しかし、その場に、耳を傾けようとする者はいなかった。
「こ、こいつら、ただの素人じゃない……!?」
不良グループたちは、当然ながら腕に覚えのある者たちの集まりである。その自分たちが、体格的には圧倒的に劣る者たちになすすべもなくやられた。そのことが信じられないのだ。
特に、第三の集団の中で、もっとも幼い少女が持つ力に驚愕していた。
「あ、あの杖はなんだ!?　ビリビリきたぞ……」

「魔導杖の威力、分かっていただけましたか……？」

少女は、青装束の青年たちをけん制するように杖を突き出す。

彼女の服装は独特で、もっとも目立つのが胸部にある、逆三角形状の装甲である。胸部の装甲は肩当てと繋がっており、肩当てからは短いマントが延びていて、特徴的なシルエットを形作っている。

足元は、丈の短めなプリーツスカートに、腿のあたりまで覆うサイハイソックスを履いている。そのすべてが、ダークブルーを基調にし、オレンジと白のラインで縁取りをしたデザインでまとめられている。サイハイソックスとワンピースのあいだ、チラリと見える素足は白く美しい。

手に持つ杖は、先端に特殊な意匠が施されている。魔導杖（オーバルスタッフ）と呼ばれるこの杖は、詠唱なしで魔法（アーツ）と呼ばれる特殊な力を喚起することができる、最先端技術の固まりだ。

顔立ちはまだ幼さを残している。ライトブルーの髪の毛を、頭の上でふたつに束ねた髪型がその印象を強くしている。さらに頭部には、カチューシャのような頭部装着型感知装置（ヘッドギアセンサー）がつけられており、そのセンサー部分が、まるで猫の耳のような形状をしている。そのせいで、よりかわいらしい雰囲気がある。

しかし、相手を見据える瞳には、不思議と大人びた印象が漂っていた。

第二の集団のひとり、大柄な男が、茶化すように少女に声をかける。

「おー、ティオすけは怖いねぇ」

「私の名前はティオです。すけは余計です、ランディさん」

そう言って、相手をジト目で見る少女の名はティオ・プラトーという。

ランディと呼ばれた相手は、おー怖い怖い、と再び茶化した。

ランディ・オルランド。年は二〇歳前後といったところだろうか。赤茶色の髪に、長身のせいでスマートに見えるものの、よく見るとかなりがっちりとした体軀。顔立ちから優男という印象を受けるが、彼が軽々と持っている戦斧スタンハルバードは、導力を衝撃力に変えるユニットが取りつけられており、その重さは並の男では持ち上げるのにもひと苦労するほどである。

黒のパンツに、グレーのタートルネック、その上に着ているのは、衝撃吸収のためのベスト。その上からオレンジ色のミリタリーコートを着込み、手首を穴あきグローブで保護している。見た目よりも機能性を重視した格好だ。

「クソが……！　やっぱ遊撃士じゃねえか！」

赤ジャージの若者のひとりが、罵声を浴びせかける。

「だから、俺たちは遊撃士じゃねーって。まぁ、やってることは人捜しに、おつかいに、たまに魔物退治だけどな」

「くっ……ふざけたことを。やはり遊撃士ではないか！」

今度は青装束の若者のひとりが怒鳴る。

と、その怒鳴り声をさらりと受け流すかのような、美しい声が響いた。

「まあ、そう思われても仕方ないわよね。やっていることは、あまり変わらないもの」

そう言ったのは、第二の集団のひとり、ティオよりも幾分か年上に見える少女だった。

エリィ・マクダエル。腰まで伸びるパールグレーの髪が印象的である。その表情や物腰から、良家のお嬢様を連想させる。しかし、本来ならば日傘でも持ちそうなその手には、旧式の導力銃が握られている。

健康的な身体を包むのは、白のタイトワンピース。ワインレッド色の長袖のボレロとのツートンカラーになっている。すらりと伸びた脚は、黒いタイツで覆われていて、足元はワンピースと同じ白色のブーツ。腰元に太めのベルトを巻いていて、身体の両側に、ワインレッド色をした大きな『たれ』のようなものを下げている。これは飾りではなく、内側に導力銃をしまうためのホルスターである。

「ふざけたことを……なめんじゃねぇぞ、このアマ！」

もうひとりの赤いジャージを着た男が、かみつかんばかりの勢いでエリィに怒鳴る。エリィが反射的に身を引いたところに、割って入るようにひとりの青年が立つ。先ほど声を上げて、彼らの動きを制止しようとした青年だった。

名をロイド・バニングスという。ラフに切りそろえられた茶髪に、まだ少年の面影を残す顔つき。だが、その瞳には、強い意志が宿っている。

そしてその手には、トンファーが握られていた。東方由来の、防御力と制圧力に優れた武器である。

ところどころ補強を施したアーミーパンツに、丈夫なブーツ。タートルネックのシャツを中に着込み、その上から、白地に袖の部分が青色のジャケットを羽織っている。ジャケットの左肩と背中には、クロスベル警察の所属を表す紋章が入っている。

ここまで分かりやすく警察の格好をしているのに、遊撃士に間違われるとは……と、ロイドは内心でため息をついた。

「さっきも言ったけど、俺たちはクロスベル警察・特務支援課だ。市民の通報で、ここで不良グループのケンカが始まろうとしているという情報を得て……」

「不良グループじゃねえよ！」

「まったくだ。我らは誇り高き集団。そこの下衆な者たちと一緒にしてもらっては困る」

「ンだとおらァ！」

赤ジャージと青装束が勝手にケンカを始めようとしたので、ロイドはあわてて間に入る。

「だから！　そういう風にケンカにならないよう、俺たちがやってきて……」

話し合いで解決しようとしたが、問答無用で襲いかかられたので、実力で退けたところである。

しかし、その程度でめげるなら、市民もわざわざ通報したりはしない。彼らは、このダウンタウンでもてあますほどの〝ワル〟なのだ。

彼らの怒りの矛先は、仲裁に入ろうとしたロイドへと再び向けられた。

「上等だテメェ！　今度こそボコってやるから覚悟しろ！」

「ダウンタウンにはダウンタウンのルールがある。警察ごときに邪魔をされるいわれはない」

痛めつけられてもなお、彼らはやる気である。

ロイドは頭の中で、次の一手を考えていた。

さっきは手加減したが、今度は本気でやるしかないか……？

だが、あまり無駄な血は流したくない。一体どうする？

考えあぐねていたその時、

「——その辺にしときなよ」

あたりに、涼やかな声が響いた。

すると、それまでいきり立っていた赤ジャージと青装束全員が、途端に息を呑んだ。

ロイドが声のした方を見ると、そこには美しい女性の姿があった。

しかし、その隙のない身のこなしを見て、女性と思われたその人物が、どうやら男性らしいとロイドは気づく。つい勘違いしてしまうほど、その人物の顔立ちは整っていた。

彼の服装は特徴的で、上半身こそ青装束の男たちが着ているものと似ているが、胸の下ですっぱりと切れていて、腹部がまる見えである。しかし、そこに見える腹筋は見るからに鍛えられており、彼がただの優男でないことをうかがわせる。

脚は黒のパンツの上に白いブーツを履いており、右足のブーツには青色のアクセントラインで十字が引かれている。

青装束の青年のひとりが、ぽつりとつぶやく。

「ワジ……来てたのか」

ワジと呼ばれた人物は、ただ微笑みを返した。

しかし、その微笑みは美しさもあいまって、青装束の集団を黙らせるだけの凄味があった。

彼の後ろには、やはり同じく青装束を着た、たくましい体躯のスキンヘッドの男が無言で控えている。

何も言葉を発しないが、そのたたずまいを見てランディはすぐに、

——タダ者じゃないな、アレは。

と気づいた。

「おいおい……揃いもそろって何やってやがる」

肉食獣を思わせる、どう猛そうな声が、ワジがやってきた方向とは反対から響いた。

今度は赤ジャージの男たちが色めきだつ番だった。

「ヴァ、ヴァルドさん……！」

ヴァルドと呼ばれた男は、大股でのっしのっしと歩いてくる。その体つきも、声と同じ肉食獣を連想させる、大柄で筋肉質なものだった。

ゆったりとした赤のパンツ。太いベルトには、チェーンがぶら下げられている。上半身は、その強靭な肉体を見せつけるかのように、ところどころに鋲が打たれた赤いベストを羽織っているだけだった。

「どうやら、両方のチームの頭（ヘッド）のお出ましらしいな」

ランディが、ロイドにだけ聞こえるように耳打ちをした。

ヴァルドは、赤ジャージの集団の前に立った。

「人が昼寝をしてる間に、楽しそうな事をしてるじゃねえか。なぁ、お前ら……こいつは一体どういうつもりだ?」
　全員をギロリとにらみまわす。にらまれた方は、さながらヘビと対峙しているカエルのように、脂汗をかいている。
　赤ジャージを着た男のひとりが、なんとかこの場をごまかせないかと口を開いた。
「へへ、なんと言いますか。青坊主どもにお仕置きをしようとしたら、この変な連中がですね……」
　ヴァルドは、なおも口を開こうとする男の胸ぐらをつかみ、苦もなく持ち上げた。
「ひいっ……!」
　身体が浮いてしまい、足をジタバタさせ、おびえる男。ヴァルドは、相手の顔に自分の顔を思いっきり近づけ、地獄の底から聞こえるような低い声ですごむ。
「このタコが……先走るなって言ったろうが、あァ!? てめえら前座がしゃしゃり出て、俺様の顔を潰すつもりかよ……?」
　持ち上げられた男は、必死に首を振って否定した。
「め、め、滅相もない! ヴァルドさんの顔を潰すなんて、これっぽっちも……!」
　フン、とつまらなさそうに言い、ヴァルドは男を放りなげた。ぎゃっ! と声がして、男が尻もちをつく。
　その様子をつまらなそうに見ていたワジだったが、青装束の集団に向けて口を開いた。
「君たちも、一体どういうつもりかな? 僕の言ったことが聞けないっていうわけ?」
　ワジにジロリ、と見つめられ、青装束の男たちはあわててかぶりを振る。
「だが、ワジ……」
「こ、こいつらが絡んでくるから、つい……」
　必死に言い訳をしようとする男たちを冷ややかに見つめるワジ。見かねたように、後ろに立つ大男が言った。
「——言い訳はいい。俺たちはワジの手足。余計な気を回す必要はない」
　そのひと言で、青装束の男たちはしゅん、としてしまった。
「分かった……」
「も、猛省する……」
　そんなふたりを見て、判ってくれればいいよ、とワジは興味なさそうにつぶやいた。
　ワジと青装束たちのやりとりを見て、ヴァルドがニタリと笑う。
「相変わらず気色の悪い連中だぜ。舎弟にそんな格好をさせて、どこぞの宗教家気取りかよ?」
「別に僕がその格好を強制してるわけじゃないけどね」
　今度はワジがニヤリと笑った。
「そっちの方こそ、手下に当り散らしてばかりだと、お里が知れるってもんだよ? お山の大将さん」
　完全な挑発行為である。だが、ヴァルドは怒ることなく、ニタリと笑った口の端をさらに上げ、ただ笑っていた。
「ククク……」

　そんなヴァルドの様子がおかしいのか、ワジもつられて笑う。
「フフフ……」
　ふたりのやりとりを見ていたロイドは、心の中でつぶやいた。
——一体どういうことだ? ふたりは明らかに敵対してる不良グループのリーダーだ。それなのに、この関係は……。
　ロイドがいぶかしんでいると、ワジが話しかけてきた。
「君たち、警察の人って本当? とてもそうは見えないけど」
　続けて、ヴァルドがランディを獲物を狙う目でにらみつけながら言う。
「特にそこの赤毛……いいガタイしてんじゃねえか」
「そりゃどうも……アンタほどじゃないけどな」
　ヴァルドに褒められ、ランディは肩をすくめた。この場合褒められるのは『ガチンコで勝負したい』という意思表示だと知っているからだ。
　ヴァルドの獲物を狙う視線は、エリィとティオに向かった。
「まあ、そっちの姉ちゃんたちは、とても警察には見えねぇけどなァ。なかなかの上玉じゃねえか?」
　舌なめずりでもしそうな表情で見つめられ、エリィはぞわり、とした嫌悪感を感じた。ティオに至っては、魔導杖を握りしめ、今にも振りかぶりそうな勢いだ。その空気を察したロイドが、話を変える。
「新人だが、全員警察の人間だ。『特務支援課』という新部署に所属している」
　ワジの目が、軽く見開かれる。
「《クロスベルタイムズ》に載っていたアレか。へぇ、君たちが」
「なんだァ? コイツら何かやらかしたのかよ?」
　ヴァルドの疑問に、ワジが答える。
「ああ、ジオフロントでは大活躍だったみたいだよ」
　そこまで言ってワジは、クスリと笑った。
「ギルドの噛ませ犬としてね。いや、アリオス・マクレインの噛ませ犬として、と言った方がいいのかな?」
「なっ……」
　ワジが言っているのは、特務支援課最初の任務である、ジオフロントの探索のことだった。
　彼らはその捜索途中で迷子の子供を見つけるも、魔獣に襲われ危機に陥ったのである。そこに助けに入ってきたのが、アリオス・マクレイン。この街の遊撃士ギルドのトップで、《風の剣聖》のふたつ名を持つA級遊撃士である。
　初任務での手柄を遊撃士ギルドに持っていかれ、それを週刊誌《クロスベルタイムズ》にすっぱ抜かれるという、特務支援課にとっては痛い船出だった。
「あぁ、ゴメンゴメン。一応、少しは、役に立ったんだっけ?」
『一応』と『少し』を強調して言うワジ。
「ぐっ……」
　明らかな挑発と判っていても、思わずいらついてしまうロイド。その表情の変化を見て、十分に楽しんだワジが、余裕たっぷりに続ける。
「イジめるのは、このぐらいにしておいて……自己紹介といこう

か。僕はワジ。ワジ・ヘミスフィア。一応、『テスタメンツ』の頭をしてるみたいだよ？」
　ワジの後を受けて、ヴァルドも名乗りをあげた。
「——ヴァルド。ヴァルド・ヴァレスだ。『サーベルバイパー』の頭をやってる」
「ワジにヴァルドか……」
　一見落ち着いた言動に聞こえるワジだが、その実はかなりの凄味を感じさせる。
　むろん、直接威圧的な言動をするヴァルドは言わずもがなだ。
　だが、ふたりの関係は、そこまで悪くなさそうだ。そうロイドは思い、わずかな安堵を感じた。
「改めて、クロスベル警察・特務支援課のロイド・バニングスだ。ふたりとも、どうやらこれ以上事を構えるつもりはなさそうだし……ここは、任せてもいいのかな？」
　不良の軽いもめ事に、あまり警察が首をつっこみすぎては、彼らのメンツを潰すことになる。そこでロイドは、彼ら自身で手打ちにしてもらおうと考えた。
　だが、そのもくろみは、あっさりと崩れ去った。
「ククク……ハハハハハハッ！」
「フフ……ウフフ……あははははっ！」
　ワジとヴァルドは、同時に爆笑した。
　どうしたことかと戸惑うロイドに、涙をぬぐいながらワジが言い放つ。
「いやいや、おめでたいなー」
　獲物を前に舌なめずりをするような表情で、ヴァルドがその後を受けた。
「事を構えるつもりがない？　何を寝ぼけたことを言ってんだ？」
「なに……」
「この場は手を引くよ。でも、それはただ単に準備が済んでいないからさ」
　前髪を指で払いながら、ワジはヴァルドをにらみつける。
「——準備が終わり次第、徹底的にやり合うつもりだよ」
　ワジの視線を真っ正面から受け止めるヴァルド。バン！　と音を立て、自分の手のひらに拳を打ちつける。
「それも今までみたいな、セコイ小競り合いじゃねえ……どちらかを根絶やしにするまでの、ぶっ潰し合いだよ！」
　その声色にうすら寒いものを感じ、ロイドやエリィは息を呑んだ。
「おいおい……殺し合いでもするつもりかよ？」
　あえて脱力するようなトーンでランディが問いかける。それにヴァルドは、肉食獣の笑みで答えた。
「そうなっても不思議じゃねえだろうなァ。ま、どちらが血ヘドを吐くかは分かりきってるけどよォ？」
「言ってなよ」
　ギラギラとしたヴァルドの視線を、冷ややかな視線で受け止めるワジ。こちらは氷のような微笑で返す。
　止めないとマズい。そう思い、口を開きかけるロイド。
　その動きを見透かすように、ワジが振り向き、冷たく言い放っ

た。
「まあ、どっちにしてもお呼びじゃないってことさ」
　スッ、と目が細められ、ロイドたちを何の価値もないと断するような口調で続ける。
「腰抜けの警察の犬――まして、君たちみたいな若造（ガキ）はね」
「っ……！」
　ロイドは何も言えなかった。
　確かに、この街では警察の権威はかなり落ちているし、自分たちはできたばかりの組織、さらに言えば、つい先日辞令を受けたばかりのひよっ子だ。しかも、支援課のほとんどが、捜査官の資格を持たず、警察官という肩書きすら怪しい人物ばかりである。
　反論の余地は、まるでなかった。
　黙ってしまったロイドの様子を見て、己の中の加虐心が満足したのか、ヴァルドが引き上げ命令を出した。
「行くぞ、てめえら！」
　オッス！　という怒号にも似た返答が、サーベルバイパーのメンバーから次々に上がる。
　その様子を見て、ワジもスッと手を上げた。
「フフ……こちらも引き上げるよ」
「了解だ」
　ワジの傍らに立つスキンヘッドの男が答える。テスタメンツのメンバーは返答もなく、無言で姿勢を正し、ワジの後ろへとつき従っていった。
　人々の足音が消え、最後にロイドたち特務支援課のメンバーだけが、ダウンタウンの広場に取り残された。
　ロイドは無言のまま、立ち尽くしていた。その様子を気遣い、エリィが話題を変えようとみんなに声をかける。
「困った人たちね。それにどちらも、かなり本気みたいだったわ」
　ランディが、呆れつつ答えた。
「お嬢の言うとおりだぜ。あの調子だと、準備が整ったらすぐにでもやり合うつもりだな。血を見るぞ、こりゃ」
「でも、課長からの任務は一応終えた形にはなりますし……これ以上は任務外なのでは？」
　ティオの問いかけに、ロイドは首を振った。
「いや、違う」
　ロイドから、強い意志を感じる言葉を聞き、エリィたちは自然と姿勢を正した。
「ここで放置するということは、彼らの抗争を見て見ぬふりをするということだ。それじゃ、本当の意味で任務を終わらせたことにはならない。俺たち特務支援課に課せられてるのは、ただ任務をこなすことだけじゃない。事件の解決を通じて、警察に対する市民の信頼を取り戻すことだ」
　ロイドの言葉に、確かに、とうなずくエリィ。
「でもよ、具体的にはどうするんだ？　『お前ら仲良くやれよ』なんて言って、聞くような連中じゃないだろ」
　軽く茶化しつつ、ランディが言う。
「そこが頭の痛いところなんだけど……」
　そう言いつつ、頭をかくロイド。その手が不意に止まった。軽くうつむいて、考え込む。
「どうした？」
「そういえば……どうしてあの二チームは『潰し合う』つもりなんだ？」
　ロイドの疑問に、今度はエリィやランディが首をかしげる。
「どうしてって……」
「そりゃ、縄張り争いだの、意地の張り合いだのってあたりだろ？」
「いや、それだけじゃ普通、本気の潰し合いにはならない」
　ロイドは顔をあげ、続けた。
「利権が絡んでるならともかく、街の不良同士のいざこざだ。念入りに準備してまで、徹底的に潰し合う必要があるとは思えない」
　縄張り争いや意地の張り合いは、不良グループにとっては日常茶飯事であり、そこまでヒートアップすることにはならない。
　そのロイドの考えにいたったエリィたちは、みな目を見開いた。
「……驚きました」
「ええ、私も」
「ふーん、なるほどねぇ」
　彼らの口ぶりに、それまでの確信が急にしぼんでいくロイド。
「そんなに、変なこと言ったかな？」
「ううん、さすが捜査官の資格を持っているだけはあるなって、そう思ったの」
「いいとこ突いてると思うぜ。それに、見たところ、ヘッド同士、そこまで険悪って雰囲気でもなかったしな」
　エリィとランディが、口々にロイドの視点を褒める。ふたりはロイドとつきあいはじめてまだ日が浅かったが、彼が時折見せる視点の多様さと鋭さは、かなりのものだと感じていた。
　ふたりに自分の考えが認められ、わずかに顔をほころばせるロイド。
「……多分、理由があるのではないかと。当事者以外は知らない、本気で争うだけの、何かが」
　ティオも、発言によってロイドの考えを支持する。
　みなの向いている方向がひとつになった、ロイドはそう確信した。
「だったら……やるべきことはひとつだろう？」
「だな」
　ランディがうなずき、エリィとティオも後に続く。
「これより特務支援課は、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争を止めるべく、捜査を開始する――！」

　その日の夜。
　ロイドたち特務支援課は、行政区にある警察本部ではなく、クロスベル市街の中央広場横にあるビルにその居を構えている。
　これは、依頼や事件で出動する際の即時応答性を高めると同時に、より市民に近いことを印象づけるためのアピールの意味もあった。
　ビルの一階はクロスベル警察分室・特務支援課。二階と三階が、ロイドたちの寮となっている。
　その寮の一室に、ロイドは戻ってきていた。

扉を開け、着の身着のままで、ベッドに倒れ込む。洋服がしわになるのは嫌だったが、それ以上に身体が休息を欲していた。

「うあー……」

声にならないうめき声を出して、ひと息つく。

ロイドは警察学校で鍛えているので、身体にはある程度の自信はあったが、特務課の仕事は問題の調停役や、一筋縄ではいかない事件など、肉体ではなく精神的に疲労するものも多い。しかも本人の性格と若さ故に、それらの問題を真正面から受け止めてしまうので、より疲れてしまうのだった。

「着替えなきゃ……それに、エニグマの結晶回路のメンテナンスもしないと……」

第五世代戦術オーブメント、通称ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）。携帯できるサイズと重量の戦術オーブメントで、通信機能なども搭載している。この街に張り巡らされつつある導力ネットワークと共に、なくてはならないものとなりつつある。

いざという時に使えなくては困るので、日々のメンテナンスを欠かさないようにしていた。

寝たがる身体を無理矢理ベッドから引きはがし、机に向かってのそのそと歩く。ポケットから取り出したエニグマを机の上に置くと、ストラップとしてつけている、兄の形見のネームタグが目に飛び込んできた。

ネームタグには、深い刀傷が一本、斜めに入っている。死の間際につけられたものだろうか。

「………」

そのまま視線を、上に滑らせる。壁に貼りつけたコルクボード、その真ん中に貼られている写真を見つめた。

そこには、兄ガイとその恋人セシル、そして少年の頃のロイドが写っていた。

兄が死んだ。

最初に言われた時は、何を言っているのか理解するのにしばらくかかった。

兄貴が死んだ……？

ロイドの兄ガイは、クロスベル警察の捜査官だった。エリート集団と言われる捜査一課に属し、多くの事件で手柄をあげ、さらなる活躍を期待されていた。

しかし、とある事件の捜査中に、何者かに襲われて、そのまま帰らぬ人となった。

危険な仕事だとは知っていたが、ロイドは兄が死ぬということを、まったく想像だにしていなかった。

ロイドの混乱を余所に、葬儀の手続きは慌ただしく進んでいた。

しかし、ロイドにはそれがどこか現実離れした出来事にしか感じられなかった。

今すぐにでも、

「いやぁ、悪い悪い」

などと言って、兄が帰ってくるのではないか。そう思っていた。

しかし、何度か挨拶したことのある、兄の友人という警察の人がやってきて、涙混じりにおくやみの言葉を述べたとき、これが本当のことなのだと、うっすらと理解した。

セシル姉を守らなきゃ。

次にロイドが考えたことは、それだった。

兄の恋人で、誰よりも兄を好きだった人。

彼女は今、とても悲しんでいるはずだ。現実感の伴わない自分よりも、ずっと。

だとしたら、俺が支えてあげなくちゃ。

兄とセシルと、いつも三人一緒だった。兄がいない今、自分が支えなくては。いや、自分以外に支えられる人間などいない、そう思った。

そこに、セシルへのほのかな憂慕があったことに、少年であったロイドは気づかなかった。

葬儀の日は、今にも降り出しそうな曇天だった。

喪服に身を包んだ大人たちが、うつむいて祈りを捧げている。

ガイが埋葬された墓の前には、あふれんばかりの人が詰めかけていて、生前の交友関係の広さと人柄を物語るようだった。

まだ若く、前途あふれる死を誰もが悼んでいた。

そんな中、ロイドはセシルの姿を探した。

葬儀は朝から執り行われていたが、ずっと姿が見えなかった。どこかで、泣いてるのかな……だとしたら、俺が行ってあげなくちゃ。そう思い、人混みを縫うように探していた時だった。

「ロイド！」

聞き慣れたセシルの声だった。ロイドはとっさに反応し、その方を向いた。

セシルは見慣れぬ喪服に身を包んでいた。

しかしその表情は——笑顔だった。

あっけにとられたロイドの元に、セシルが駆け寄る。

そこではじめて彼は、セシルの表情の意味に気づいた。

「大丈夫、大丈夫だよ」

目尻に涙を浮かべつつ、いつもの笑顔をなんとか作りながら、セシルは言った。

「ガイの代わりに、私がお姉ちゃんになるから」

その言葉を聞いた瞬間、両肩に鉛を乗せられたかのような重みを感じ、肩を落とした

俺が……俺がセシル姉を支えなくちゃいけないのに！

支えられると思っていた。仮にも自分は男で、セシルはかよわい女性で。だからこそ支えなくちゃと思い上がっていた。

だが現実は、ただ一方的に心配されるだけ。

自分はそれほど弱々しく、頼りない存在なのだろうか？

それを認めたくなくて、でも認めるしかなくて、ロイドはぎゅっと拳を握りしめる。

泣くな、泣くな、泣くな。

心でそう思っていても、身体は、瞳は反発するように涙をためる。

そんな様子を見て、セシルは静かにロイドを抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫だよ……」

その声がわずかに震えているのを聴きながら、ロイドは泣いた。ガイを失った喪失感、自分のふがいなさ、身体を通じて伝わるセシルの悲しみ。それらがすべてまぜこぜになり、やがて何故泣いているのかわからなくなっても、泣いた。

それから、数年の時が過ぎた。

クロスベル自治州有数の森林地帯である、ノックス森林地帯。その一画にある窪地に、クロスベル警察学校はある。

このあたりは市街地から離れているため娯楽は少ないが、その分、技能習得のためには最適な場所と言える。

クロスベル警察に勤務するあらゆる警察官は、ここで基礎をたたき込まれる。基礎教養から法律、クロスベルという国家の成り立ち、犯人を捕獲するための格闘術、その他さまざまなものを吸収してはじめて、警察官になる。

クロスベルは急速な経済発展を遂げ、それと比例するように犯罪も凶悪化していく中、警察の役割と負担は日に日に大きくなっている。

しかし、それを担うはずの若者はあまりいないのが現状だった。

警察学校内。『B講義室』と札が下げられた部屋に、明日のクロスベル警察を担う若者たちが集まり、授業を受けていた。

その数は二十名弱。みなクロスベル警察の制服を身につけていたが、階級章にあたる部分に、若葉を模したバッチをつけていた。彼らが警察学校の生徒である証である。

彼らは机を半円状に並べ、ひとりの教官を取り囲むように座っている。

その中に立つのは、同じくクロスベル警察の制服に身を包む、ひとりの初老の男だった。名をジェフという。顔には年相応のしわが刻まれ、頭部はだいぶ寂しくなってきているが、その眼光の力強さは、年齢を感じさせないものがあった。

ジェフはこの警察学校の教官のひとりであり、今は彼の講義による『模擬捜査会議』の真っ最中だった。

模擬捜査会議とは、実際にクロスベル警察で行われているような形式で、情報を提示され、そこからどのような捜査方針をとるべきか判断したり、犯人を推論したりする、実践的な授業である。

それと同時に、この警察学校でも、一、二を争う難解な授業としてその名をとどろかせていた。

ジェフ教官は、手元の捜査資料を読み上げながら、部屋の前面に貼られたボードにある、容疑者や被害者の相関関係図を指し示し、説明している。

生徒たちは必死にメモを取っていて、教室内は筆記具を走らせる音と、ジェフ教官の声だけが響いていた。

そのジェフ教官の声が止まる。

「……以上が、今分かっている情報だ」

生徒たちの間に、とまどう空気が流れる。容疑者を特定するには、あまりにも与えられている情報が少なすぎた。

「ではこの場合の捜査方針、分かる人」

生徒たちが顔を見合わせる。当てずっぽうに答えるしかないが、その後のジェフの理知的な反論、というか問い詰めが恐ろしく、なかなか手を上げられない。

その時、スッと手を上げるひとりの青年がいた。ジェフ教官は彼を指差し、答えを促す。

「ロイド・バニングス」

ロイドは、はい、と答え、イスから立ち上がる。一七歳という年齢らしい、キビキビとした動作だ。

「この場合は、まず被害者の家族の線を洗い直します」

教室内が軽くざわめく。それを無視して、ジェフ教官はロイドに問いかける。

「理由は？」

「犯行当時、家族しか知らない情報が多すぎます。それに、家族には事件が起きた時間のアリバイしか取っていません。容疑者とされる男Aと同じように、事件の直後だけでなく、その前後の時間も調査すべきです」

背筋をぴしっと伸ばし、要点をまとめて伝えるロイド。ジェフの前では怖じ気づき、しどろもどろになる生徒もいる中、まったく物怖じしない様子で答えた。

「大事な家族を失った悲しみにくれる人たちに、疑いをかけるようなことをすると？」

眼光するどくジェフ教官は言い放つ。老いてもなお衰えぬ威圧感は、彼が捜査一課のベテラン刑事だったことを語るに十分だった。

ロイドは、その瞳をまっすぐに見つめ返す。

「その悲しみを生み出した犯人を捜すのが、俺たち警察官の仕事です。そのために嫌な役を引き受けるのは、仕方がないことだと思います」

ジェフの目元がふっと緩む。

「正解だ。我々の仕事は家族と一緒に悲しむことではない。強靭な意志と粘り強さで、犯人を追い詰めることだ」

促されて座ったロイドに、隣の席のフランツが小声ではやし立てる。

「さっすがロイド！」

「おだてても何も出ないぞ」

そう言って苦笑するロイド。実際、褒められたところで、得意になることはなかった。

兄貴なら、きっとそう考えて行動するはずだ——

捜査一課にいたこともある兄のガイ。その思考をトレースすれば、自ずと正解は見えてくる。言わば、アンチョコを持っているようなものだ。

「では、今日はここまでにしよう」

ジェフ教官の声で、生徒たちがみな立ち上がる。

「礼！」

ロイドの号令で、頭を下げる。それを見渡し、ジェフは教室を出て行った。

彼が出て行ったと同時に、生徒たちの緊張がほどける。

「はー終わった終わったー！」

「相変わらずジェー様はキッツい課題出すよなぁ」

生徒たちの間でも、ジェフ教官の講義は厳しくて有名だった。しかし、人間として魅力的なジェフ教官を慕う生徒は多く、『師様』とひっかけた『ジェー様』というあだ名がついていた。

「それにしても、毎回毎回よく答えられるよなぁロイドは」

「しかもだいたいあってるし」

「そうかな？　問題点を指摘されることも結構あるけど」

「いやいや、普通はまず当たらないって」

ジェフの講義では、極端に情報が少ないケースや、逆に情報が多すぎて容疑者を絞りきれないケースが多く、プロの捜査官でも頭を悩ませるような設問で有名だった。警察学校に通っているとはいえど、素人に毛が生えた程度の生徒たちでは、到底太刀打ちできないのも当然である。

「ところでロイド、捜査官試験、受けたんだって？」

フランツの言葉に驚き、どうしてそれを、と口を開きかけたところで、他の生徒たちに取り囲まれてしまった。

「おいマジかよ!?」

「あれって実務経験ないと受けられないんじゃないのか？」

「推薦状があればなんとかなるらしいぜ」

「それなら俺もダメもとで受ければよかったなー」

「お前じゃ空が落っこちて来ても受かんねーよ」

「それよりロイド、どんな感じだったんだよ？　イケそうなのか？」

「いやいやー、さすがのロイドでも無理だろ」

「なぁ、面接とかあったのか？　現役の捜査官が面接するってホントか？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、みんな」

矢継ぎ早に質問を出されて、頭が混乱しそうだった。ロイドはみんなをなだめると、かみ砕くように言った。

「まず、試験を受けたのは本当だ。推薦状を書いてくださった教官がいて」

ひとりが歓声を上げる。他の生徒たちが、静かに、とたしなめ、ロイドに続きをと促した。

「面接はあったけど、現役の捜査官じゃなかった。それはそうだよな、捜査で忙しいんだし」

「なんだよー、それはちょっと肩すかしだたな」

「とはいえ、本物の捜査官と面接なんて、それはそれで緊張するしな」

「で、肝心の手応えの方はどうなんだよ？」

フランツに言われ、ロイドは曖昧な笑みを浮かべた。

「正直なところ、分からないよ。やれることはやったけど……それと結果は別さ」

「でも『まるでダメだった』ってワケじゃないんだろ？　なら可能性はあるぜ」

ありがとう、と答えるものの、正直なところロイドは、結果にはまったく期待していなかった。何もかもがトントン拍子に上手く進むとは思っていない。

ただ、今回ダメでも、合格するまで粘り強く受け、絶対に捜査官になる、と堅く心に決めていた。

「ひょっとして……いきなり捜査一課に配属、なんてこともあるんじゃないか？」

捜査一課。クロスベル警察捜査課のひとつで、重要犯罪を専門に扱う、エリート中のエリートである。捜査官を目指す者にとって、一課の名前は特別な響きと重みがあった。

ロイドは、それはないよ、と即答した。

捜査官になるのすら困難なのに、その捜査官の中でも、エリートしかなれない捜査一課に配属されることは、夢のまた夢のように思われた。

だけど、いつかは捜査一課の一員になりたい。そうロイドが考えるのは、兄ガイが殉職するまで所属していた課だからでもあった。

その時、開けっ放しの教室のドアをノックする音が響いた。皆が振り向くと、そこには女性教官のケイトがいた。ロイドのまわりにたむろしていた生徒たちの何人かが歓声を上げる。警察学校では女性教官は少なく、一部の生徒たちからはマドンナ的存在として扱われているのだ。

ちなみに彼女は普段、巡査としてクロスベル市街で働いているのだが、定期的に警察学校にやってきては、臨時教官としてロイドたち生徒を教えている。クロスベル警察と同じく、警察学校もまた人手不足なのだ。

「ロイド君、いる？」

「あ、はい」

ロイドはイスから立ち上がって、ケイトの元へ駆け寄る。

はいこれ、と言って、ケイトは封筒を差し出した。封筒には、クロスベル警察の紋章が印刷されている。公式な文書を入れる際に使うものだった。

「あの……これは？」

「心当たりあるんじゃない？」

なおも首をかしげるロイド。開けてみなさい、と促され、封筒を開けるとそこには、『捜査官認定試験の結果のお知らせ』と書かれた一枚の書類が出てきた。

さらに視線を下にずらしていくと、

『合格』

そう言って扉を開けた。
座っていたイスを回し、ジェフ教官が、おう、と答える。
教官室は学校で言うところの職員室にあたる場所で、各教官はそれぞれ机を割り当てられている。
ジェフは、並べられた机の奥、窓際の日当たりのよい場所に陣取っていた。
そこまで歩き、彼の前で止まる。
ジェフはイスに座ったまま、教え子の晴れ姿を上から下までゆっくりと見た後、言った。
「ロイド・バニングス。卒業おめでとう」
「ありがとうございます、ジェフ教官。教官には、いろいろお世話になりっぱなしで、なんとお礼を言っていいものか」
ロイドの言葉に嘘はなかった。兄のような立派な捜査官になりたい、というロイドにとって、捜査一課たたき上げの捜査官であったジェフの言葉・考え方は、まさに生きた教科書だったからだ。
「捜査官試験の推薦状を書いてくださったのもジェフ教官でした。教官の推薦をいただけなければ、試験を受けることすら許されなかったとお聞きしています」
「買いかぶりすぎだ」
軽く手を振って否定するジェフ。しかし、ロイドの言うことは事実だった。
捜査官試験を受けるためには、捜査官資格を持つ上司の推薦状が必要となる。
本来なら、警察官となった後で現場で働き、その活躍や能力が認められて、はじめて推薦状を書いてもらえるものだ。
いわばロイドは、特例で受けることが許された。それは、ジェフの昔の肩書きと、その時に培った警察内部のコネクションが無ければ不可能だっただろう。
「それから……退任されるとのことで、残念です」
「定年だからな。これからは、のんびりと余生を過ごすさ」
ロイドたちと時を同じくして、ジェフもこの警察学校を去ることになっていた。
「息子夫婦が、一緒に暮らさないかと言ってくれてな。クロスベルを去るのは少し寂しいが、孫と過ごせるのならそれも悪くない」
そう言って目を細める。
数多くの犯罪者と、出来の悪い生徒たちを震え上がらせてきたジェフも、孫には勝てないということか、とロイドは内心で微笑んだ。
「いいおじいちゃんになりそうだ、とか思っていたのか？」
「い、いえ、そんな」
ズバリ言い当てられて、ヒヤリとする。このまま話を続けるのはまずいと判断し、話題を変えることにした。
「ところで教官、今日は何の用事でしょう？」
ロイドはここに、別れの挨拶をしに来たわけではない。もちろん、式の後にちゃんと挨拶をするつもりでいたが、先に声をかけたのは、ジェフの方だったのだ。
彼はロイドを見つめ、軽くお茶でも誘うかのような口調で切り出した。

「最後に一問、君に解いてもらいたい問題があってな」
「え……」
「模擬捜査会議だ」
ジェフのひと言で、空気が変わったようにロイドは感じた。ただ別れを言うために呼んだのではなく、最後の講義を受けさせるために自分は呼ばれた、そう理解した。
「どうかね？」
「ぜひ、お願いします」
ロイドは間髪入れず答える。ジェフからは多くのことを学んだが、まだまだ学び足りないと思っていた。最後に自分にだけ、講義をしてくれる。しかも、彼の最後の生徒として。その好意を断る理由はどこにもなかった。
「よろしい。では、最後の模擬捜査会議をはじめる」
ジェフ教官は言い、目を閉じた。講義をするときの、彼の癖だった。この癖を見るのも最後か、という感傷が一瞬ロイドの心をよぎったが、すぐに集中し直した。ジェフ教官の最後の難題を、絶対に解いてやろう、という思いからだった。
しかし、その意気込みは、肩すかしを食らった。
「この事件では、容疑者の目星は既についている」
それでは捜査をする意味がない。そう思った矢先に、ロイドが思いもしなかった言葉が飛んできた。
「しかしその犯人は、帝国の有力者であることが分かっている」
ジェフ教官は事件の概要を述べた。中身はよくある詐欺事件だったが、被害者はクロスベルの小さな商店の店主、容疑者は帝国から派遣されている駐在武官、というものだった。
「複数人の証言もあり、立件は容易だ。だが、もし立件した場合、帝国派の議員から捜査への横やりが入る可能性は非常に高い。さらに、駐在武官というのも問題だ。帝国軍そのものへの敵対行動と取られ、ベルガード門のあたりに緊張が走ることは避けられないだろう」
「ですが……もしここで立件しなくては、その……」
ロイドの歯切れの悪い言葉を、ジェフはぴしゃりと叱る。
「ロイド・バニングス、言うべきことは、ちゃんと言いたまえ」
「はい。ここで立件しなくては、警察は弱腰、と市民に取られます。クロスベル市内では、警察に対する不信感が根強くあります。最悪、遊撃士協会に駆け込まれ、彼らが調停に乗り出してくることでしょう。そうなれば、ますます信用が無くなり、今後の捜査にも支障を来すと思われます」
警察学校で、警察に対する批判をする。ロイドにとっては冷や汗ものの状況だったが、ジェフは意に介さず続けた。
「その通りだ。……で、君ならどうする？」
それは、と口に出して、ロイドは固まってしまった。
容疑者がほぼ確定している状況なら、立件して捕まえるのは当然だ。……だが、これは多分に政治的な問題をはらんでいる。一捜査官が判断すべき問題ではないのでは……いや、そうじゃない。現に犯罪の被害に遭い、困っている人がいるんだ。それを助けないで、なんのための警察だ。
ロイドは頭の中で議論を続ける。しかし、答えは出そうにない。

という文字が目に飛び込んできた。
「おめでとう、ロイド君」
顔を上げると、ケイト教官の笑顔が目に入った。
「実務経験がないままの合格は、数例しかないわ。教官たちも皆、あなたを誇りに思ってる」
ありがとうございます、というロイドの言葉は、フランツをはじめとする友人たちの歓声にかき消されてしまった。

夜の帳が下り、皆が寝静まる頃。
ロイドは部屋で、机の灯りひとつを頼りに法令書を読みふけっていた。
警察学校は全寮制で、寮の建物は講義をする建物から徒歩数分のところにある。みっちりと訓練にはげめる環境は理想的ではあるが、生徒たちからは嫌われてもいた。
寮の部屋はふたりで一部屋を使うのだが、同室であるフランツは、既にベッドに潜り込んでいる。
「ロイド～、まだ起きてるのかよ」
「すまない、眠れないか？」
「もう慣れっこだよ……」
そう言って大きなあくびをするフランツ。勉強家のロイドと同室になったのは彼の不幸だが、フランツは大家族で育っていたため、多少明るかったり騒がしくても眠ることができた。
「でもさぁ、なんで来なかったんだよ。お祝いなんだから、おごるって言ったのに」

フランツはとろんとした声で続ける。彼が言っているのは、ロイドの捜査官試験合格にかこつけた祝宴のことだった。
ケイトから合格発表を告げられた後、生徒たちは大騒ぎとなり、さっそくクロスベル市街へ祝杯をあげにくりだそう、ということになった。
だが、当事者であるロイドが市街へ行くことを頑なに拒んだため、一部有志のみで行くこととなったのだ。
「ま、ロイドのお祝いとか言って、ただ単に俺たちが騒ぎたいだけなんだけどさ」
そう言って、ベッドから身を乗り出して笑うフランツ。ロイドはその裏側に、つきあいの悪い自分をフォローしてくれる気遣いを感じ取っていた。
「悪い」
「だからいーって。でもさ、ここにずっといたら、息が詰まらないか？　ロイド、学校入ってから一度もクロスベルに行ってないだろ？」
それは本当のことだった。正確に言うと、兄の死後、叔父の家に引き取られてからは一度も行っていない。
ロイドはあいまいな笑みを浮かべた。
「買い物とかは困っていないし、それに今は勉強が忙しいから」
フランツは、ふーん、と気のない返事をし、そのままあくびをすると、もぞもぞとベッドに潜り込んでしまった。
再び静かになった部屋の中で、ロイドは法令書を見つめる。だが、その目は文字を追っていなかった。

クロスベル、か……。

兄ガイの死後、兄の恋人であったセシル一家の誘いを断り、国外にある叔父の家を頼った。そして十七歳になるのを待ち、すぐに警察学校に入校した。
市街までは、小一時間ほどの距離だ。行こうと思えばいつでも行けた。しかしそれをしなかった。
兄と同じように捜査官になり、一人前になるまでクロスベルには帰らない——そう心に誓っていたからだ。
まったく、子供じゃあるまいし。
そう思い、思わずふっと顔を緩めた。が、その表情にすぐに影が落ちる。
——子供なのかもしれないな、俺はまだ。
ロイドは机の引き出しを開け、今日もらった合格通知を取りだした。『合格』の文字をじっと見つめる。
捜査官試験に合格すれば、一人前になれると思ってた。けど……今の自分は、果たして一人前と言えるのだろうか？
自問しても、答えは出ない。
机の前の壁に貼りつけてある、写真を見た。そこには、三年前に撮った写真が貼ってあった。セシルと、ロイドと、ガイの姿がある。
「……兄貴」
灯りひとつの薄暗い部屋の中で、ロイドは写真に声をかけた。

「追いかければ追いかけるほど、兄貴の背中が遠くなっていく気がするよ」
ロイドの声に答えるものは、誰もいなかった。

月日が過ぎ去るのはあっという間だった。
捜査官試験合格の報に喜ぶ間もないまま、ロイドは警察学校のカリキュラムをこなしていった。
そして気づけば、すべての訓練課程は修了し、警察学校を卒業する日となった。
正確に言うと『警察官となるための訓練課程の修了』なのだが、みな『卒業』という言葉が通りがよいのでそちらを使っていた。
体育館兼講堂で、簡単な式が執り行われた。いわゆる卒業式である。
教官たちが並び、自分が指導し、しごいてきた生徒たちを見守る。入ってきた当初は幼さを残した顔つきも、今ではきりりと引き締まっていて、成長を感じさせた。
教官の何人かは、うっすらと目に光るものをためていた。
式が終わった後。大半の生徒が寮に戻り、学校は静けさに満ちていた。
そんな中、ロイドは歩き、教官室の扉の前に立った。
軽く息を吸い込み、ノックをする。
「失礼します」

兄貴ならどう考える？　自然と、いつもの思考パターンに行き着く。しかし今回は、すぐに答えは出てこなかった。
　兄貴なら、確実に犯人を追いかける……いや、捕まえたところで、外交官特権などを使われて確実に逃げられる相手を捕まえるだろうか？　他の容疑で立件する？　……いや、それも無理だし、この場合は逃げられる点に変わりはない。ロイドの思考は、堂々巡りに陥っていた。
　いつもなら、イメージの中で活き活きと動き、事件解決への糸口を見つけるガイの姿。しかし、今のロイドには、まるでイメージができなかった。
　目の前には、ロイドをじっと見つめるジェフ教官の姿があった。急くことをせず、じっと待つ。捜査官時代の凄まじい忍耐力が垣間見えるようだった。
　どれほどの時間が経っただろう。あるいは数十秒だったかもしれないし、数分だったかもしれない。しかし、ロイドにとっては長い長い時間だった。
「――分かりません」
　あきらめたように、かぶりを振って答えるロイド。口にすると、みじめな気持ちが胸に広がった。
　最後の難題を解き、晴れやかな気持ちで卒業したかったが、そのもくろみは見事に打ち砕かれた。
　敬愛する教官にして、偉大なる捜査官の先輩。その彼に見込まれ、捜査官のスタートラインに立った気でいた。
　とんだ思い上がりだ。
　そう思い、拳をぎゅっと握りしめる。
　そんなロイドの表情をじっと見つめ、ジェフは言った。
「それでいい」
「え……」
　驚いて、ジェフの顔を見るロイド。
「それでいい」
　同じ言葉を繰り返してから、ジェフは窓の外を見やった。
「クロスベルは、難しい街だ」
　ロイドに語りかけていながら、ひとりごとのようにも聞こえる調子で、ジェフは続けた。
「急速に経済的繁栄は遂げたが、それと比するように犯罪数も増加の一途をたどっている。しかも、帝国と共和国に挟まれた立地から、双方の国の干渉も多い。政治・経済の両方で、だ」
　ジェフは、卓上に置かれているエニグマに目をやった。それには、クロスベル警察の紋章が描かれている。
「警察は、捜査官は常に、難しい選択肢を迫られる。容疑者は悪で、それを捕まえればすべて丸く収まる……という事件ばかりではない」
　そこまで言うと、イスをまわし、ロイドを見つめる。そこには、答えを出せなかったことに対する怒りも、出来の悪い生徒への哀れみもなかった。
「君は性急に答えを出さなかったな」
　そこにはただ、自分の意志を託す後輩へ向けた、真摯なまなざしだけがあった。

「申し訳ありません」
「責めているわけではない。それが君の選択なのだろう？」
「いえ……優柔不断なだけです。捜査官としては、恥ずべき事だと思っています」
　ジェフは眼を細め、そうか、とだけ言った。
　内心で彼は、ロイドは優柔不断なのではなく、思慮深いのだと捉えていた。早急な答えは、事態を悪化させることも多い。特に若さは、分かりやすく手っ取り早い答えを求めがちだ。
　若くしてそれだけ多くの見方、視点を持つのは希有なことで、それは兄であるガイの影響がとても大きいのだろう、とジェフは考えていた。
　行動力と大胆さがガイの持ち味だとすると、ロイドは慎重さと視点の多様さが持ち味になる。それは、兄にはない、彼にしか持ち得ない長所なのだが、今は兄の背中ばかりに目が向いていて、自分の良さに気づけていない。
　とはいえ、自信を持つためには、多くの経験が不可欠である。いま言っても、仕方ないことだろう。
　内心でそう結論づけたジェフは、話題を変えることにした。
「ちなみに、だ。私はこの事件……いや、問題を、ある人物に問うたことがある。君の兄だ」
　ロイドの目が軽く見開かれる。
「どんな答えだか、聞きたいかね？」
「ぜひに」
　いつも以上に力を込めて、ロイドはうなずいた。
　自分が想像もつかないようなすごい答えが出てくるに違いない。ロイドはそう考えた。
　その期待に満ちた顔を見て、ジェフは顔をほころばせて言った。
「君と同じ『分かりません』だったよ」
「え……」
「といっても、その後に続けて『その時になったら、身体が勝手に動くと思います。それに任せます』と言ったがね」
　そう言って、クックック、と笑った。
「それは……」
　肩の力ががっくりと抜けたロイドを見て、微笑むジェフ。
「がっかりしたかね？」
「いえ――なんとも、兄らしいと思いました」
　教官室に、珍しくジェフの大きな笑い声が響き渡った。
　それから、少し雑談をし、お茶を出そうとするジェフを制して、ロイドは帰る旨を告げた。
「それでは、そろそろ失礼します。改めて、お礼を言わせてください。本当に、ありがとうございました」
　ジェフはイスから立ち上がりながら言った。
「礼などいいと言っただろう。だが……もしお礼をしてくれる気があるなら、一日でも早く立派な捜査官となり、ひとりでも多くの人を助けてあげてくれ」
「はい！」
　自然と背筋が伸び、声が大きくなった。

ジェフが差し出した手を、しっかりと握り返す。
「さっきの答えを、いつか聞かせてくれ。今のクロスベルで仕事をした君が、どんな答えを出すのか、興味がある」
　必ず、とロイドはうなずく。
　こんなすばらしい師に巡り会えた自分は幸せだ。
　ロイドは心の底からそう思った。

　教官室を出て行くロイドを見送ってしばらく後。
　ジェフは卓上にあるエニグマを取り上げ、手早く番号を入力した。
　クロスベル市内に張り巡らされつつある導力ネットワークが、ここにも試験的に導入されているのだ。
　何度かのコールの後、相手が出た。
「……あぁ、私だ。例の彼だが『分からない』と答えた。……そうか、お前のお眼鏡にかなったか」
　イスの背もたれに身体を預け、天井を見やるジェフ。
「で、どうする？　……そうか、うむ、そうしよう。いやいや、一課の方にはダドリーを以前推薦した。しばらくは送り込まなくてもいいだろう。……それに、かわいい教え子の頼みとあれば、聞かないわけにはいかないからな」
　電話口で相手が何か反論をしたようだが、ジェフは鷹揚に遮って続ける。
「伝説の脱走と無断外泊で、ここを追放処分になりかかった頃が懐かしいな、えぇ？」
　相手が沈黙し、ジェフは愉快そうに微笑む。
「ま、切れ者すぎて冷や飯食らいの警部殿も、私にとっては、かわいい教え子ということだ」
　はぁ、と向こうからのため息を聞いて、またもくっくっとノドを鳴らして笑った。
「では、ロイド君は特務支援課配属ということで。私からの最後の餞別だ。……次はお前が、みっちり鍛えてやってくれ。頼むぞ、セルゲイ・ロウ」
　導力通信を切り、エニグマを置く。そのままジェフは、窓の外を見やった。
　薄曇りの空からわずかに晴れ間が差し、陽光が若木に降り注ぐ。
　寒さの中にも、萌芽を感じさせる光景だった。

　導力列車がベルを鳴らし、レールの上を駆け抜けて行く。
　共和国からクロスベルへと向かうその車中に、ロイドはいた。
　先ほどホームで、世話になった叔父夫婦に別れを告げ、列車に乗り込んだところである。
　レールのつなぎ目が作り出す、ガタンゴトンという定期的な音に眠気を誘われる。そんな頭を振り、胸元から一通の封筒を取り出し、その中にある辞令に再び目を通した。
『ロイド・バニングス捜査官
　クロスベル警察・特務支援課への配属を命ずる。』

『捜査官』のところに何度も目を通して、ようやく辞令を封筒にしまった。

　ようやく、ここまで来た。

　車窓を流れる景色を見つめながら、ロイドは感慨に浸っていた。
　一人前になるまで、クロスベルには戻らないと誓っていた。そして今日、兄と同じ捜査官として、クロスベルへ赴任する。ロイドにとって、ひとつの大きな区切りであった。
　でも、これはまだはじまりに過ぎない。ようやくスタートラインに立てたんだ。

　我知らず、ぎゅっと拳を握る。そのことに自分で気づき、苦笑して、その拳をほどいた。
　堅くなりすぎるのもいけない。少し眠っておこう。そう考えた瞬間、急に眠気が襲ってきた。あくびをひとつかみ殺す。
　昨日はさすがに興奮して、ほとんど眠れなかったのだ。
　瞼を閉じ、背もたれに身を預けると、次の瞬間には眠りに落ちていた。

　ひとりの青年の希望と不安を乗せ、列車はひた走る。
　彼はまだ知らない。このレールの行き着いた先、クロスベルで待ち受ける運命を。
　それは彼だけでなく、多くの仲間と敵を巻き込み、クロスベルの歴史に名を残すような大事件であった。

小説版 零の軌跡 四つの運命

田沢 大典
Illustration 松竜

エリィの章

自室のテーブルの前でたたずんでいたロイドは、エニグマをポケットにしまった。それから、ひとつ大きな伸びをする。

外の空気でも吸って、気分転換をしよう。そう考えた。

部屋の灯りを消し、廊下に出て、扉を閉める。夜なのであたりは静まっており、扉を閉める音がやけに響いた。

みんな、もう寝ているかもしれないから、あまり大きな音を立てないようにしないとな、などと考えつつ、廊下を歩き、階段を上る。

一階に下りて外に出ることも考えたが、なんとなく気分的に、遠くが見渡せるところに行きたいと思ったので、屋上を選ぶことにした。

屋上へのドアを開け、振り向いて閉める。

鉄の扉が重々しい音を立てて閉まるのと同時に、少し離れたところから声が聞こえた。

「あら？　ロイドじゃない」

「エリィ」

先客のエリィが、ロイドを出迎える。彼女も、普段の仕事着のままだった。

「どうしたの？」

「それはこっちのセリフだよ。休まなくていいのか？」

そう言いながら、ロイドはエリィの隣へ歩いていき、屋上の柵にもたれかかった。エリィもそれにならうように、柵に手をのせる。

しばらくふたりは、無言で夜景を眺めた。クロスベルの街は夜になり、より活況を呈しているように見えた。行き交う

人々のざわめき、導力車や導力バスの走る音、導力灯のきらめき。特務支援課のビルは表通りからは少し外れたところにあるが、遠くの喧噪からも、その熱気は伝わってきた。

「難しいわよね」

ぽつりとエリィがつぶやく。何が、と聞くまでもなかった。昼間の、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争の一件のことだった。

「ああ」

ロイドは相づちを打ち、エリィの次の言葉を待つ。

「単純に、仲良くすればいいのに、なんて思ってはいないわ。お互いがお互いの権利を主張し、お互いの威信、プライドのために対立を深めて争う……」

不良グループのケンカのひとつ、と笑う人間はいるだろう。だが、ロイドは笑うことはできなかった。事件に首をつっこみ、当事者となった今は、なおさらだ。

「考え方が違うふたつのグループが相争うなんて、当たり前のことよ。街の不良グループのケンカも、政治家の議会での足の引っ張り合いも、根っこは同じ。相手を許容できない、自分たちが勝者になりたい。そんな単純なこと」

エリィはそう言って、手すりに乗せている腕を組み、そこに顔を埋めた。

「単純なことだから、簡単には解決できないのよね……」

「そうだな」

ロイドはただ、うなずいた。

エリィは悩んでいる。頭の良い彼女が考えに考えても答えが出てこないのだろう。そうだとすると、自分が励ますなんてとてもできない。ロイドはそう考えていた。

だからただ、話を聞くだけにした。それだけでも、ずいぶんと楽になることはある。そういう経験が、自分にもあった。

エリィは埋めていた顔を上げて、ロイドの方を向いた。

「ね、こういう時どうすればいいって、警察学校では教わらなかったの？」

「えっ？」

いきなり言われて面食らうロイド。記憶を探るように、頭上を見上げる。

「えっ、と……さすがに、対立する不良グループの仲裁方法、なんてのは習わなかったかな」

確かそうだよな、と模擬捜査会議の授業を思い出しながら答える。エリィは残念そうな顔をした。

「ケンカの仲裁とか、警察官なら仕事としてありそうだから、対処法も聞いてるのかなって思ってたんだけど。警察学校って、実践的な訓練が多いって聞いていたから」

「さすがにそれは……って、警察学校のこと、よく知ってるんだな」

ロイドは軽く驚いた。警察学校は、警察官を目指す者ぐらいしか興味を持たず、また知っていたとしても、具体的なカリキュラムまで把握している人間は少ないからだ。

「ま、いろいろと調べたから。私、いろんな学校やら研究機関に行ってたし」

「へぇ……」

今夜は驚かされっぱなしだ、とロイドは思った。

エリィの過去については、あまり詳しいことは聞いていない。必要になったら、本人から話してくれるだろうし、話したくないことなら、無理に聞くまでも無いと思っているからだ。

ロイドのこの姿勢は、さまざまな過去を持つ人間が集まる特務支援課という組織においては、とても重要な意味を持っていた。

リーダーが詮索しないから、他のメンバーもお互いに詮索するような事はしない。

だからこそ、特務支援課という寄り合い所帯は、組織として機能しているのだ。

「エリィは頭がいいなって思っていたけど、なるほど、納得したよ」

ロイドは本心からそう言ったのだが、エリィの表情はあまり晴れなかった。

「勉強は得意な方だし、たくさんしてきたつもり。……でも、こうして実際に仕事をしてみると、自分のふがいなさを感じてばかりだわ」

「エリィ……」

エリィは視線をそらし、夜の街を見る。光に包まれた美しい街を見ても、エリィの表情は変わらないままだった。

覚えているのは、すべてを拒絶するような父の背中と、すすり泣く母の声。

私が小さい頃、母とふたりで、玄関で仕事に行く父を見送るのが日課だった。

大きな扉が開き、父がまぶしい光の中に消えていく。

私はそれをいつも、笑顔で見送っていた。

でもそれは、父が必ず帰ってくると分かっていたから。

父と母が言い争いを繰り返し、家の中に怒号が飛び交うようになってしばらくしたある日。

父は、いつも仕事には持っていかないような、大きな大きな荷物をたくさん抱えて出て行き、そのまま帰って来なかっ

た。
顔を覆って泣く母の隣で、私は両の眼を見開き、しっかりとその様子を見ていた。
玄関の大きな扉が閉じられ、父の姿が見えなくなってしまう、その瞬間までを目に焼きつけた。

クロスベル市街の中でも、閑静な空気に包まれた住宅街。その奥まったところに、クロスベル市長、マクダエル氏の邸宅がある。
その建物は市長という要職にある人間が住むにふさわしい風格を持ち、歴史を感じさせる。知識がある者が見れば、その屋敷がいかに長い年月を経てきたか分かるだろう。それと同時に、年月を経てもなお、くたびれることなく偉容を保ち続けている建築技術に驚くはずだ。
その豪奢な建物の二階部分に、この家の主マクダエル氏と共に住む、孫娘エリィの部屋がある。
風格漂う部屋の中には、執務用のデスクとチェア、さまざまな種類の学術書が収められた重厚な本棚が置かれている。
しかし、ただ重厚なだけではなく、年頃の女性らしいかわいさが感じられるインテリアもちりばめられている。
部屋の窓を飾るのは、職人の手による繊細な手編みのレースで作られたカーテン。リベール王国から取り寄せられた、優雅な曲線が印象的なオーダーメイドのテーブルとイスのセット。そして、そのテーブルの上には、共和国で作られた有名ブランドの茶器が置かれ、遠く東方の地で作られた香り豊かな紅茶が注がれている。ある種、貿易都市クロスベルそのものを象徴するような部屋となっていた。
しかし、整った部屋の中にひとつ、少々場違いなものがあった。部屋の片隅にある、大きな旅行用バッグである。バッグの口は開いており、今まさに旅行から帰ってきたばかりだと主張をしているようだ。
事実、バッグの持ち主は旅から帰宅したばかりだった。だが、その目的は旅行ではなく、留学である。よく見ると、バッグの一角を分厚い本とレポート用紙が占拠していた。
そんな部屋の中でエリィは、執務用のチェアに腰掛けて軽く足を組み、読書に没頭していた。
服装は、落ち着いたベージュのカットソーに、七分丈のパンツ。足元はヒールのないパンプス。彼女が家の中で好んで着る、リラックスできる格好だ。
その手の中にある本は、『王立制政治論』と表紙に書かれている。
旅からの帰路、飛行船内で読み切れなかった本を読んでいるのだ。
エリィの視線が、右から左に動き、また右に戻る。それを何度も繰り返していた。
と、その瞳が閉じられる。
「ふぅ……」
パタリ、と音を立てて本を閉じ、酷使した目をいたわるように、目頭を指でもみほぐした。
「原理としては、まったく問題ない内容なのだけど……」
そうつぶやき、その後に続けようとした言葉を飲み込む。
エリィにとっては、いつものことだった。
目を開けて、壁へと視線を移す。そこにはいくつかの写真と、賞状が飾られていた。写真は、リベール王国・カルバード共和国・エレボニア帝国、そしてアルテリア法国など、各留学先で友人や教授たちと撮ったもの。賞状は、彼女が書いた論文やレポートなどが認められてもらったものである。
エリィは短期留学を繰り返し、各地の学校や研究機関で勉学に励んだ。その主なものは政治学であったが、クロスベルという街の特殊性から、経済も学んでいた。
彼女は優秀で、留学先で「このまま本格的に学ばないか」「学者の道を志しては」などと勧誘を受けることも一度ではなかった。
しかし、多くの学者・教授から学び、知識を蓄えれば蓄えるほど、クロスベル自治州という、カルバード共和国とエレボニア帝国の二大大国に挟まれた特殊なこの地域を治めることがいかに困難か、痛感するようになった。
クロスベルは自治州ではあるが、完全に独立を保っているわけではない。むしろ、議会は常に帝国派と共和国派の駆け引きが繰り返されている。どちらか片方の勢力が圧倒しようとすれば、もう片方の勢力が、合法・非合法を問わず力を行使し、勢力を押し戻す。ここは、二大大国がつばぜり合いをする舞台でもあるのだ。しかも名目上は無関係の第三国なので、非合法活動は野放しにされやすい。大国は、余所の庭だからと遠慮無く暴れ回るが、土足で庭を踏み荒らされる立場にあるクロスベルとしては、たまったものではない。
これに加え、経済的にも他国との関係に依存している。クロスベルは古くから貿易で栄えた都市である。ゼムリア大陸の十字路、などと呼ぶ者もいるぐらいだ。二大大国はいうに及ばず、リベール王国や、遠く東方の地とも交易がある。
ミラは人を、物を、財を運ぶのと同時に、闇も運んでくる。盗品や密輸品などもかなり扱われているという噂だ。取り締まろうにも、流入してくる量が多すぎてチェックすらままならないのが現状である。
では、他国との交流を一切閉じ、自治州の中だけで自給自足をすれば平和に暮らせるのかといえば、それもまたありえない。
万が一そんなことになれば時を置かずに、帝国か共和国か

のどちらか、あるいは両方が、己が国の領土にするために侵攻して来るだろう。あっという間に併呑されるか、両軍が全力でぶつかる戦場になり、クロスベル全土が火の海と化す。
　幸か不幸か、政治の舞台としてのクロスベルの有用性は年々上がってきている。アクセスしやすい立地。経済的な繁栄により、高級ホテルなどが立ち並んでいる。諜報活動がやりやすい。これらのファクターが重なり、各国の秘密裏な会談が何度も執り行われているのだ。
　少し前には、帝国の実質的な権力者である《鉄拳宰相》オズボーンが、共和国側との会談のために非公式にクロスベルを訪れた、という噂もある。
　このように便利に使える場所は、帝国も共和国も、飼い殺しの状況で保持し続けたいと考えるだろう。
　クロスベル自治州は、その地理的要因によって完全な独立を得ることはできない代わりに、大国に踏みつぶされない特異性を持ち得ている。その微妙なバランス取りを、今は続けて行かなくてはいけないのだ。
　エリィは、手にした本の表紙をもう一度眺めた。これは、以前リベール王国のジェニス王立学園で教鞭を執っていた人物によって書かれた本である。
　今回の留学先でレポートを書くことになり、エリィは王立制や共和制などの制度による政治の違いをまとめた。その流れで改めて読み返していたのだ。
　クロスベルと同じく、帝国と共和国という二大大国と距離が近いにも関わらず、独自の外交路線を取ることで、小国ながら独立を保ち続けているリベール王国。その政治手法は、なんらかの参考になるのではないかと思い、以前学びに出向いたことがある。
　しかし、留学して分かったことは、リベール王国もまた特異な国家である、ということだった。国民に支持されている王室という存在があり、導力という他国に対抗しうる産業技術を持っている。国内基盤が安定し、対外的に武器となるものがある。それらがあってはじめて、独立のためのスタートラインに立てるのだ。
　翻ってクロスベルは……と考えようとして、ノックの音に思考を遮られた。
「いいかな？」
　扉越しの声を聞いて、あわてて扉を開ける。
　そこに立っていたのは、エリィの祖父にして、クロスベル市市長のヘンリー・マクダエルだった。
　髪はほとんど白髪だが、わずかに残った色味が、かつてはエリィと同じパールグレーだったことをうかがわせる。その頭髪はやや後退し、少しこけた頬と共に年齢を感じさせるが、その目には力が満ちている。髪と同じ色の口ひげが、威厳と

共に、どこか親しみを感じさせる雰囲気を醸し出していた。
　ヘンリーもまた、普段締めているネクタイを外し、シャツのみのラフな格好である。
「おじいさま、いつお戻りに？」
「ついさっきだよ。それに、そのセリフは私が言おうと思っていたのだがね」
　茶目っ気混じりの言葉に、思わずエリィの頬が緩んだ。
「おかえり、エリィ」
「ただいま戻りました、おじいさま」
　そう言って、軽く頭を下げる。
「ところでだ。アーネスト君が気をきかせて、おやつを買ってきてくれてね。留学先での話も聞きたい。一緒にどうかね？」
　アーネストとはヘンリーの秘書だ。男性ながら、細やかな気遣いでヘンリーを助ける、いわば懐刀である。情報にも聡く、クロスベルで話題になる商品を、いち早く入手し、こうしてマクダエル家に持ってきてくれるのだ。
「ええ、喜んで」
「ではリビングで待っているよ。できれば、紅茶が冷めないうちに来てくれるとありがたいね」
　マクダエル家のリビングは、十人程度が入れば少々手狭になってしまうほどの大きさで、家の大きさからすると幾分慎ましやかだ。
　このリビングは、普段家族が使うものだが、ホームパーティーの時などでも、ヘンリーがゲストである要人と会談をする際にも使われる。そのような時は、あまり広すぎる部屋より、ほどよい狭さの方が都合がよい。距離が近い方が、親密さも増す、というわけである。
　そのリビングに置かれたソファーセットの上には、ポットとカップと皿が置かれ、カップからは紅茶がよい香りと共に湯気を立てている。皿にはお茶請けとして、話題の新商品であるお菓子のマカロンが置かれていた。アーネストが買ってきたものである。
　エリィはマカロンをひとつ口に含み、かみしめる。
「ふわっと溶けていく……ずいぶんと軽い食感ですね」
「私などは、食べた気がしないがね」
　ちょっと困り顔のヘンリーを見て、思わずクスリとするエリィ。そのエリィの笑顔を見て、今度はヘンリーが微笑んだ。
「勉学の方は、はかどっているかい？」
　エリィの脳裏に一瞬、先の問題が蘇る。しかし、リラックスした祖父の前で、難しい話をすることもないと、その思考を振り払った。
「はい。今読んでいるのは、リベールのジェニス王立学園で

教師をされていた方からいただいたものです」

エリィの笑顔を、ヘンリーはじっと見つめる。その瞳の奥に、少し悲しみの色が混じった。

「悩んでいるようだね」

エリィは思わず息を呑んでしまった。表情には出なかったはずだ。わずかな間の後、エリィは答えた。

「やはり、おじいさまは何でもお見通しなんですね」

「この街で市長などをやっていると、人の顔色をうかがうのが得意になってしまってね」

帝国と共和国の板挟みの間で市政の舵取りをするヘンリーにとって、わずかな表情の変化から相手の心情をくみ取るのは、生きるための処世術のひとつである。

ヘンリーは苦笑いを浮かべた。

「年を取ると、愚痴っぽくなってしまっていけないな。すまない」

「いえ……」

ヘンリーはひと口紅茶を飲み、その芳香を楽しむ。彼のお気に入りのブレンドで、少しスモーキーな香りが特徴的な銘柄のものだ。

そんな祖父の様子を見ながら、エリィは改めて感嘆していた。

祖父の血を受け継いだエリィも、人の表情の変化には敏感な方である。留学するということは、学校や学術機関という共同体に、自分という異分子が混ざることであり、その異分子を受け入れてもらうために、相手の心情をくみ取る、という能力を遺憾なく発揮してきた。

しかし、祖父のそれは自分のとは格が違う、とエリィは感じていた。しゃべるテンポ、声の調子、視線、それらを注意深く観察し、わずかな変化も見逃さない。

政治という、駆け引きによって成り立つ世界で生きてきたからこそできることなのだ。

ヘンリーはカップを置き、エリィを見つめた。言葉にはしないが、自分の考えを話せ、と促されているのだと認識し、エリィは口を開いた。

「いろんなところに留学させてもらって、改めて感じました。それぞれの国、地域には、それぞれ異なる事情や問題があり、あらゆる問題を解決できる万能な考え方などないのだと」

クロスベルをなんとかよりよい方向に持っていきたいと政治に情熱を持っていた父。その背中を見て育ったエリィもまた、幼い頃から政治に興味を持った。

しかし､父は政略によって追い落とされた。それと同時に、母とも関係が悪化し、家を出ていくことになってしまった。

幼かったエリィは、クロスベルを悪い方向に導き、父をいじめる悪の政治家がいて、その政治家を追い出せば、すべてが丸く収まると信じた。

そのためには政治の知識が必要だと考えたエリィは、勉学に励んだ。

しかし、それで分かったことは、政治においては真の悪者などおらず、また正解も存在しない、ということだった。Aという人たちを助ける政策をすることは、Bという人たちを無視する政策になる。あちらを立てればこちらが立たず。政治の世界とは、永遠に終わらないバランスゲームを続けることなのだ。

それなら、クロスベル自治州の外はどうなのだろう？　多くの人を治めている帝国や共和国は？　リベール王国は？

そう考えたエリィは、積極的に留学をし、いろいろな考え方を吸収しようとした。

そこで待ち受けていた現実は『どこの国にも問題はあり、その解決方法を永遠に模索し続けている』ということだった。そしてその解決方法は、クロスベルに簡単に応用できるものではなかった。

こうして学べば学ぶほど、エリィの中には徒労感とわだかまりが増えていった。

「……お父さまが疲れてしまったのも、よく分かります」

そう言って顔を伏せた。

ただ勉学として学んだだけの自分ですらこうなのだ。現場で戦い、そして敗れた父の絶望とは、どれほどのものだったのだろう。それを考えると、自分を置いて家を出ていったとはいえ､父をいたずらになじることは､エリィにはできなかった。

「お茶のお代わりはどうかね？」

優しい声に顔を上げる。ポットを持った祖父が、おだやかな笑みを浮かべていた。

では、とカップを差し出すと、暖かい紅茶が注がれる。それをひと口飲むと、胸の中にあった冷たいわだかまりが、少しほどけたような気がした。

「よかった」

「え？」

ヘンリーは、自分の眉と眉との間をトントン、と指で叩いた。ずっと眉をひそめていた、と言っているのだ。

「私、そんなに難しい顔をしていましたか？」

「孫娘のかわいい顔に、シワが増えるのは好ましくないのでね」

そう言って少し微笑んだヘンリーだったが、すぐに沈痛な面持ちになった。

「おまえには、辛い思いばかりをさせているな」

何が、とは言わなかったが、両親のことだとエリィは察した。そして祖父が､政治家の一家に生まれたエリィのことを、

気に病んでいることも。
「おじいさま」
　エリィは祖父の目を見つめ、微笑みながら言った。
「私は、マクダエル家に生を受けたことを、感謝しています」
　本心からだった。
　確かに自分には、両親の離婚という悲しい出来事があった。その家の名で不自由することもあった。
　でも、それらすべてを含めて、エリィ・マクダエルという人間が形成されたのだ。家を否定することは、今の自分を否定することになってしまう。
　ヘンリーは孫娘をまぶしそうに見つめ、そうか、とだけ言った。
　エリィは以前、祖父に言われたことがある。『心を込めて言えば、その思いはきっと伝わる』。
　多くのことを学び、世の中がそううまくいかないことも知る年齢になっても、エリィは祖父のこの言葉だけは、信じ続けていた。
　だからきっと、自分の言葉も、祖父に届いたはずだ。そうエリィは信じた。
　少し心が軽くなったエリィは、もうひとつマカロンを口へ運んだ。
「エリィ。このマカロンというお菓子は、商業区に新しく建ったばかりのデパートの中にお店があるんだよ」
「そうなんですか」
　返事をしながら、エリィは、なぜ今マカロンの話をするのだろう、と思った。
「実はアーネスト君と一緒に、私も買いに行ってね」
　思わず目を見開いた。今日は夕方以降の公式行事はないとはいえ、書類仕事はいつものように山積している。それほどの時間的余裕はないはずだ。
「あのデパートは活気があって、エリィと同じぐらいの年の女の子たちもいた。子連れで来ている母親もいた。これから消費の主力は、女性に移行するのかもしれないな」
「ええ」
「もちろん、統計資料から、女性の消費が活発化してきているのは知っていた。だが、自分が見聞きすると、数字以上に実感できる」
　ここまで言われて、祖父が自分に何かを伝えようとしていると、エリィはようやく気づいた。マカロンで補給した糖分を使って、頭をフル回転させる。
「……卓上で学べることには、限界があると？」
「そんなに難しいことではない。ただ、政治とは誰のためにあるのか？　という話だ」
「それは……」

　その国、その地域に住まう人々のためである。口に出そうとして、今までずっと自分が考えてきたことの中に、彼らに対する配慮がなかったことにエリィは気づいた。
　ハッとするエリィの表情を見つめ、ヘンリーは満足そうに頷いた。
「そろそろ、より多くの人と出会い、触れあう時ではないかな」
　そう言ってヘンリーは、カップに残っていた紅茶を飲み干した。

　クロスベル市の商業区は、平日の昼間だというのに、行き交う人々でごった返していた。
　平日なので数は少ないが、通りにはいくつか食べ物を売る露店が並んでいる。立ち並んだビルの多くは商業施設で、一階部分のショーウィンドウには、きらびやかな洋服や宝石が飾られていた。
　多くの人々が思い思いに動き、時に急に立ち止まる。この街の混雑に慣れていない者は、歩くだけでひと苦労である。
　そんな中をエリィは、器用に人の間を縫いながら歩いていく。
　しかし、その頭の中にあるのは、洋服や宝石などではなく、祖父に言われた言葉だった。
　より多くの人と出会い、触れあう。
　言葉にすれば短く簡単だが、現実にはなかなか難しい。
　不特定多数の人々と触れあうということで、まずエリィはアルバイトを考えてみた。しかし、露店でアイスクリームを売ることや、街角でビラを配ることが、祖父の言う〝多くの人と触れあう〟ことに繋がるとは思えなかった。
　もっと深く、この街のいろいろな人たちを見る。明るい面だけでなく、影の部分も目をそらさずに見つめる。
　そんな仕事があれば、今すぐにでも飛びつきたいところだった。いや、正確にいうと、たったひとつだけある。
　――遊撃士。
　人々から依頼を受け、解決する。依頼の中には、この街ならではの問題も多くあるだろう。中には、犯罪が絡むような危険なものもあるが、それこそこの街の暗部をえぐり出してくれる。
　特にここクロスベルでは、遊撃士に対する市民の信頼は厚く、依頼が持ち込まれる件数も多いと聞く。御用聞きをするまでもなく、お客さんが来てくれるのだ。
　だが、遊撃士になるためには、試験を通り、準遊撃士となるところから始めなくてはいけない。軽く調べたところでは、準遊撃士が正遊撃士となるためには、数年の経験を積み、なおかつ各協会支部からの推薦がなくてはなれないのだという。
　重大事件を解決すれば、準遊撃士からいきなり正遊撃士に

なることも可能だというが、そんな幸運をつかめる人間は、ごくごく一握りだろう。
さすがに数年という時間は、エリィにとっては長すぎるものだった。しかし、多少人生の回り道をしても、やるべきなのではないか？　そうも考えた。
しかしエリィにはもうひとつ、遊撃士の道を選ぶのにひっかかっていることがあった。それは遊撃士は依頼を選べる……ことである。
遊撃士協会には、さまざまな依頼が持ち込まれるが、その依頼を受けるか否かは遊撃士個人の裁量に任されている。仕事内容の難易度と、受け取る報酬、そして自分の力量を天秤にかけ、依頼を受けていく。聞けば、遊撃士協会の重鎮といえど、遊撃士に依頼を強制することはできないのだという。
自分の身は自分で守る。遊撃士らしい考え方だ。
だがそれでは、取りこぼしてしまうものもあるのではないか？
例えば、遊撃士の誰もが受けたがらない困難な依頼があったとする。どうしても困っている時には、金額をつり上げて受けてもらうことは可能かもしれない。だが、それは金銭的に恵まれている人間にしか許されないのだ。
もし、日々の暮らしで精一杯の人間が、大金を積まなければ遊撃士も受けてくれないような困難な事件に直面したら？
その依頼は永遠に受けられないだろう。遊撃士という仕事にもまた、限界はあるのだ。
そんなことを考えながら街を歩いていると、通りの向こうの喧噪の中にひと組、ひと目で旅行者と分かる老夫婦がいることに気づいた。
ガイドブックについた地図を片手に、あちこち見回す。いま自分たちがどこにいるか、分からない様子だった。
建設ラッシュに沸くクロスベル市では、ちょっと古い地図でもまったく役に立たない。おそらく、あの地図はその類だろう。
声をかけようか、と思ったその時、老夫婦は通りかかった警察官に声をかけた。地図を指さし、場所を聞いているようだった。
だが、警察官は鷹揚に手を振り、さっさと歩き出してしまった。老夫婦は困り顔で、その警察官を視線で追う。
エリィは小走りに通りを渡り、老夫婦に声をかけた。
「何かお困りですか？」
ほとほと困り果てた、という顔のおばあさんは、すがるような目で言った。
「あの、このお店に行きたいのですけど……」
おばあさんは、ガイドブックに載っている宝石店を指差して言った。

「あぁ、それなら、辻ひとつ向こうですよ。ほら、あそこの背の高い建物、あれが《タイムズ》という百貨店で、その中にお店があります」
「ほら見ろ、やっぱり向こうだったじゃないか」
「何を言うんですか、さっきまで分からないとか言ってたのに」
老夫婦が口論を始めそうだったので、あわててエリィは話題を変える。
「ご旅行ですか？」
「ええ、そうなの。息子夫婦が、旅券をくれてね」
パッと顔が明るくなるおばあさん。しかし、怒りが収まらないといった様子のおじいさんの方は、トゲトゲしい口調で言った。
「クロスベルの人間っちゅーのは、みんな無愛想じゃのう。警察官に尋ねても、道ひとつ教えてくれんとは」
それは、と言おうとしてエリィは口をつぐんだ。
クロスベル警察は、多くの問題を抱えている。増加の一途をたどる犯罪、他国の干渉による犯罪者の取り逃がし、検挙率の低下、人員不足……彼らに言わせれば『道案内なんぞは警察の仕事ではない』ということなのだろう。
彼らの中には、真剣に職務をまっとうしようと奮戦している者もいるが、多くは日々の業務をこなすことで精一杯。やる気を無くし、ただ機械的にこなしているだけの者さえいる。先程通りかかった警察官も、おそらくその類だろう。
だが、それを口で説明したところで、なんの解決にもならない。この人たちは苦い思いをし、それに憤っているのだ。
「ごめんなさい」
エリィが頭を下げると、おばあさんがたしなめるように、あなた、と言う。おじいさんはそこではじめて、自分の物言いのキツさに気づいたようだった。
「いや、ワシも言い過ぎた。お嬢さんを困らせるつもりはなかったんじゃ」
「息子夫婦からも言われてたのよ。『クロスベルに行ったら、警察官ではなくて遊撃士を頼れ』って」
思わずエリィは苦笑した。クロスベル市民の間では常識だったが、まさか他の街にまで知れ渡っているとは。
「じゃが、たかが道案内で依頼をするのもどうかと思っての。この街の遊撃士に依頼する相場もわからんし、だいいち遊撃士協会がどこにあるのかもわからん」
おじいさんはそう言って、肩をすくめた。
その冗談にクスリ、と笑ったその時。
ふとエリィの中で、何かが繋がりそうな気がした。
遊撃士。警察。クロスベルの抱える問題。
老夫婦はなぜ遊撃士協会を探さず、まず警察官に尋ねたの

か？
　ひとつは、すぐ側にいたからである。遊撃士も街を見回ることはあるが、それが本来の仕事ではないので確実にいるとは限らない。だが、警察官なら確実にいる。
　そしてもうひとつは、〝警察官だから〟である。
　道に迷っていて、警察官がいたら、道を聞くのはある意味当然のことだ。
　警察官は遊撃士と違い、依頼を選ぶことはできない。事件に直面すれば、これを解決しなければならない。
　クロスベル警察の抱える一番大きな問題は、その前提条件が崩れていることなのだ。先のぞんざいな警察官が、その例である。
　もしその問題が解決できたらどうだろう？　さまざまな事件を、内容に問わず解決する。自分は多くの経験を積むことができる。警察へ向けられる不信も、少しは解消できるかもしれない。そうなれば、クロスベルという社会全体が、良くなる方向に向かうのではないか。
　これだ、とエリィは思った。
「それじゃ、私たちはこれで。ありがとう、親切なお嬢さん」
　老夫婦は会釈をし、それにエリィも答える。
「こちらこそ。大切なことに気づかせてもらいました。どうかよい旅を」
　老夫婦を見送った後、エリィは踵を返し、歩き出した。
　ある目的に向かって。

　エリィが老夫婦とあってから、数週間後。
　クロスベル市街の行政区の一角に、威風堂々といったたたずまいをみせ、クロスベル警察は存在する。
　入口は3階部分までがガラス張りとなっており、外の光をふんだんに取り入れることができる、開放感あふれる作りになっている。
　その建物の1階部分、受付を抜けた奥に、会議室がある。
　普段は捜査官たちが捜査会議を行う場所であり、何の事件を担当しているかが、表にあるボードに貼られる決まりだ。
　だが、今日はそのボードには、事件の名前ではなく『警察官採用試験面接会場』と書かれている。
　クロスベルにおける警察の仕事量は増加し続けている。警察官の採用試験も、一年に一度ではなく、数度行われている。人手はいくらあっても足りない状況なのだ。
　だが、経済活動が活況を呈しているクロスベル市において、警察官の仕事はあまり金銭的に高くはなく、そもそもの警察の不人気と相まって、募集をかけてもなかなか集まらないのが常である。
　そんな中、今回は優秀な人材が入ってきた。筆記試験は

100点満点、特技と称し受けた射撃の訓練でも同じく満点を出し、若く見た目も麗しい。本来ならば諸手を挙げて歓迎するところである。
　しかし、その人物にはある事情があり、会議室にいる面接官たちをなんともいえない表情にさせていた。
　広い会議室の中には、彼ら四人の面接官と、その問題の人物がひとりいるのみである。
　その人物を前にし、面接官のひとりが声をかける。
「それでは、面接を行います。エリィ・マクダエルさん」
「はい」
　面接官たちの座る長机の向かい、ひとつだけ置かれた簡素なイスに座っていたのは、エリィだった。
　紺色のスーツに、ぱりっとノリの利いたブラウス。面接ということで華美にならないよう落ち着いた服装を着ているが、それでもなお彼女の美しいパールグレーの髪と整った顔立ちが、清潔感あふれる華やかさを醸し出していた。その姿に見とれる面接官もいたほどだ。
　しかし、エリィは心の中で臨戦態勢を整えていた。
　筆記、実技共に、自分なりにベストは尽くした。あとは面接だ。ここを通らなくては、自分の当初の目標である、警察官にはなれないのだ。
　幸い、面接の類は得意な方である。だが、慢心はミスを誘発する。エリィは改めて気を引き締めた。
　エリィから見て左端にいる面接官が、話を続ける。
「えー、では、今回の警察官への募集をした動機をお聞かせください」
「はい。犯罪に対し、我々市民のために日々戦いを続けているクロスベル警察に、一市民として何か協力ができないかと考え、今回の応募に募集しました」
　エリィは、『市民のために』というところを強調してしゃべった。クロスベル警察に対する市民の目は、彼ら自身が一番知っている。その彼らのプライドを刺激する方策だ。
　案の定、質問をした面接官の隣に座っている男が、いい心がけだ、といった様子でうなずいた。
　今度は右端にいる面接官が話を振る。
「筆記、実技共に、優秀な成績でしたね。特に射撃。立ち会った試験官も、あなたほどの名手はなかなかいないと言っていましたよ」
「ありがとうございます。ですが、試験はあくまで試験です。現場に出れば、警察官のみなさんの方が、私よりよほどうまく銃を使えると思います」
　面接官としては、おだてて反応を見たかったところなのだろう。だとすれば、ここはあくまで謙虚に行く方が正解だとエリィは判断した。

「確かに、競技会などと違い、現場はさまざまな邪魔が入って、そう易々と狙いを定められないからな」
先程うなずいていた男がしゃべる。他の面接官が、やや遅れて相づちを打った。
エリィは彼を、典型的なプライドが高いタイプの警察官だと認識した。それと同時に、他の面接官とは明らかに役職が異なり、相応の地位にあるのだと判断する。少しの時間見ていただけだが、他の面接官たちが彼に気を使っているのは一目瞭然だった。
次に、右から二番目に座る、今まで黙っていた面接官がエリィに尋ねる。
「配属場所の希望などはありますか？」
来た。ここでエリィは、簡潔に自分の要望を伝えることにした。
「できることなら、多くの人と触れあうことができる部署がよいと考えています」
面接官たちが軽く目配せをしあう。その表情は「困ったことになった」というものだった。
やはりそうか、とエリィは思った。ここまでは、予想の範囲内だった。
配属希望を尋ねた面接官が、手元の書類に目を落としながら言う。あきらかに視線を合わせたくないというサインだった。
「マクダエルさん、その……非常に申し上げにくいのですが」
「わかっています。私の家の問題がある、ということですね」
「いえ、まぁ、問題といいますか、我々としてはさほど困らないのですが、マクダエルさんの方がご迷惑ではないかと思いまして、その」
面接官は、歯切れの悪い様子で続ける。
責任回避のためによく使われる常套句だ。『我々ではなく、そちらの都合で断った』とすれば、自分たちに責任も被害も及ばない。組織の保身としては分かるが、こちらにもこちらの都合がある。エリィは頭の中に用意していた原稿を読み上げ、答えた。
「存じております。ですが、そこをあえて、伏してお願いしたいのです」
そして、たたみかけるように言葉を重ねる。
「自分は祖父と違い、顔が知られていません。新聞や雑誌などに取り上げられることもないでしょうから、みなさんにご迷惑をおかけすることはないかと」
「ふぅむ……それはそうですが」
右端の面接官が相づちを打つ。
「しかし、わざわざ目立つ仕事を選ぶこともないですよね？」
「はい、それはあくまで私の希望です。ですが、事務仕事ではなく人々に接する方が、より社会勉強ができるかと思いまして」

「いやいや、その判断はなかなか正しいんじゃないですかね？　これだけの美人だ、市民の態度も柔軟になるでしょう」
右から二番目の面接官がそう言いつつ、エリィを再度見る。その身体をなめ回すような視線にぞっとしたが、表情は変えなかった。エリィにとって、無遠慮な男性の視線は嫌悪感をもよおすものの、慣れたものだった。
「どうですかな？　私としては、判断をお任せしますが」
男はそう言って、さっきエリィが『相応の地位にある』と判断した面接官に話を振る。振られた方は、煮え切らない態度で腕を組んだ。
ここが正念場だ、とエリィは判断した。その面接官の方を向き、視線を固定する。
「よろしいでしょうか」
その声の調子に、思わず男が顔をあげる。
「こうして応募すること自体、私のわがままに警察の方々を巻き込むようなことになってしまうことは分かっていました。申し訳ありません」
そう言ってエリィは頭を下げる。
面接官たちが一瞬動揺し、息を呑む。このタイミングでまさか謝られるとは思っていなかったからだ。
まず、揺さぶりは成功した。エリィは判断し、顔を上げる。
「ですが、この街で社会勉強をしようとした時に、ここクロスベル警察が一番良いと思ったのです。日々困難な犯罪や事件と対峙し戦う、本当に尊敬すべき人間がたくさんいると」
『尊敬すべき人間』のところを強調し、面接官に向かって言葉を投げ『それはあなたのことです』と言外に含む。相手の口元が、わずかに緩んだ。
ここでさらに、相手にとって有利なカードを出す。
「実は、社会勉強を勧めたのは、他ならぬ祖父なのです」
「あのマクダエル市長が!?」
「はい。この街を深く知りたければ、現場に出なさいと。それがなにより大事だと」
彼等にとっては『マクダエル市長の孫』がネックになっていたが、市長本人からのお墨つきが出ているなら、問題はかなり減る。
「さすが市長。立派なお言葉ですな」
「はい。私もそう思います」
エリィの微笑みに、面接官はわずかに頬を緩ませた。が、すぐに隣に座る面接官に耳打ちをする。
「おい、どうする？」
「どうするもなにも……」
答えた面接官も困り顔だ。

「ちょっと失礼」
　作り笑いをしてエリィに会釈をしてから、面接官たちは肩を寄せ合い、ひそひそと密談をはじめた。
「とりあえず警察官として採用しておくというのはどうでしょう?」
「確かに、本人が希望してきたわけだから、断る理由はない」
「市長とのコネクションもできそうだしな」
「そうは言っても、どこに配属させる? さすがにPさせるわけにはいかないだろう」
「かといってガサなどもっての他ですし……」
　ちなみに〝P〟とはパトロールのことであり、エリィが希望している外での警ら任務である。〝ガサ〟は捜査任務のことで、両方とも警察官の一部の中でしか通用しない隠語だ。
「どうしましょう、人事部長?」
　ひとりの男がそう言い、エリィが『相応の地位にある』と目星をつけた男に話を振る。残るふたりも、人事部長の方を見た。
　人事部長は、しばらく腕を組み唸っていたが、何かひらめいたらしく、ニヤリと笑った。
「あの厄介者のセルゲイが新設しようとしてる、特務……ええと、特務なんとか課というのがあっただろう?」
「特務支援課ですか」
「そう、それだ。その特務支援課に配属というのがいいんじゃないか?」
　残る三人の顔色がぱあっと明るくなる。
「おお、確かに名案ですな!」
「あれは市民の人気取りのための部署。危険な仕事もないでしょうし」
「名前もそれっぽくて、箔もついていいんじゃないですかね」
「やっかい事は、厄介者に任せるということで」
「おいおい、聞きずてならないな。私は人事部長として、適切な人材配置を行ったまでだよ」
　ニヤリと笑う人事部長。他の面接官たちも同意の愛想笑いを浮かべる。
　エリィは、声こそ聞こえなかったものの、どうやら自分の処遇が決まりそうだということを察知した。そして、その配属先に多少の問題点がありそうなことも。
　構うものか。まずは入ること。そうしなければ、話は始まらないのだ。彼女は心の中で自分を奮い立たせた。
　人事部長は、緩みきった頬を隠すように咳払いをひとつすると、無理矢理威厳を保とうとして、低い声で告げた。
「では、面接はここまでとします。結果は追ってご連絡しますので」
　ありがとうございます、と言って頭を下げるエリィ。そこ

に、面接官が声をかける。
「結果、期待して待っていてください」
　エリィは小さくガッツポーズをした。無論、心の中でであるが。
　それでは失礼します、と言い、席を立ち、部屋を出る。
　廊下に出ると、ひんやりとした空気が心地よい。少し熱くなった頬を冷ましながら、エリィは思った。
　ここはゴールじゃない、スタートなんだ、と。

　ここ、『パティスリー・クリノン』は、繁華街に新しくできた、おいしいスイーツと紅茶を出すパティスリーである。
　レミフェリア公国のとある有名料理店で修行をしたというパティシエの作るスイーツはどれも美味しいと高い評判を得て、先日はついにデパート内に支店を出した。ヘンリーがアーネストと共に買いに行ったお店である。
　お店は白を基調とした内装で清潔感にあふれており、所々にアクセントとして使われている金色の模様が、嫌らしすぎない程度にゴージャス感を演出している。
　この店の売りは、オープンテラスだ。お店に面した通りの一部を柵で囲い、イスとテーブルを並べてテラスとしている。
　今日のように天気の良い日には、晴れ渡る青空の下でスイーツが食べられるお店となる。しかもそのスイーツが絶品ならば、行列も絶えないというものだ。
　現に、今もテラスは満席で、多くの女性客で賑わっていた。若き女性たちがうわさ話に華を咲かせているテーブルがあり、別のテーブルでは親子連れが美味しそうにケーキをほおばっている。
　そんな幸せいっぱいといった光景に、場違いな悲鳴が響き渡った。
「納得いきませんわ!」
　ドンッ! という音と共に、テーブルの上に置かれたカップとソーサーが揺れる。ちなみにこのカップとソーサーもレミフェリア公国からの直輸入品で、万が一割ってしまうとお店としてはかなりの損失となる。
　テラスにいる客のほとんどが、何事かあったのか、という表情で席を見る。
　お騒がせしてすみません、という表情で、エリィはあちこちに頭を下げた。今日は、シンプルだが上等な生地の淡いピンクのワンピースに身を包んでいる。
「ちょっと、ベル」
　そう言って、騒動の原因である友人に声をかける。
　美しい金髪は、後頭部でふたつに束ねられ、それぞれが大きくロールを巻き、肩にかかっている。セットには、相応の時間がかかるだろう髪型である。

整った顔立ちからは気品を、赤みがかった瞳と目元からは意志の強さを、それぞれ感じる。着ている服は、大きな白い襟が特徴的なサーモンピンクのジャケットで、胸元が少し開いていて、年相応の色香をほんのりと漂わせている。タイトスカートは短めで、健康的な美脚を惜しげもなく披露しているが、活動的な印象こそ受け、下世話な感じがしないのは、彼女がまとう雰囲気が、良家のお嬢様そのものだからだろう。

　クロスベルの社交界に関わるものなら、彼女の顔を見てピンと来るはずだ。彼女こそ、クロスベル市きっての大企業、IBC（クロスベル国際銀行）の総裁ディーター・クロイスのひとり娘、マリアベル・クロイスである。

　彼女はその美貌もさることながら、エプスタイン財団で導力工学を学んでいるという変わり種でもあり、社交界でもちょっとした有名人だった。

　金髪のマリアベルとパールグレーのエリィが並ぶと、金と銀の髪の美少女がふたり並ぶことになり、自ずと、人々の衆目を集める。しかし、今彼女たちは、別の理由で衆目を集めていた。

　おしとやかにしていればさぞ絵になるだろう金髪の少女は、怒りに肩を振るわせ、今にも爆発しかねないような表情だ。

「とにかく、落ち着いて、ね」

「落ち着いてなどいられませんわっ！」

　今度はテーブルを叩きこそしなかったが、怒りはいっこうに収まりそうもない。エリィは、心の中で天を仰いだ。

　マリアベルを呼び出したのは、他ならぬエリィ自身だった。

　親友であるマリアベルと近況報告をしあい、さらにこれから警察で働くので、しばらく忙しくて会えないという話をするためだった。

　近況報告まではよかった。留学先での出来事をあれこれと聞かれ、入手を頼まれていた導力工学の本を渡したあたりまでは、いつもの和やかな雰囲気だったのだ。

　だが、これからどうするのか、という話題になり、警察で働くことが決まったと話し出した途端、ごらんの有様である。

「だいたいどうして、他ならぬあなたが、あんな無能者どもの下について働かなくてはいけないんですの!?　ろくに企業スパイすら取り締まれないような連中が！」

　マリアベルの怒りは、エリィを採用した警察に向けられはじめた。この街の住人として、そしてIBC総裁の娘として、警察の能力には懸念がいろいろとあるのだろうが、今は明らかに『エリィを取られた嫉妬』でしかない。

「まったくもって、お話になりませんわ！　署長として指導するならともかく！」

　言っていることがめちゃくちゃなのに、まったく気づいていない。エリィは、マリアベルが落ち着くまで、黙って待つことにした。

　それから5分ほど、マリアベルは警察への罵詈雑言を繰り返した。世間を騒がせた重大事件での対応の不手際からはじまり、自分が街で見かけた警官の制服の乱れまで、ノンストップでまくし立て、コップに入っていた水を一気に飲み干してようやく治まった。

　どん！　と力強くコップを置き、エリィの方をキッと睨む。整った顔立ちのマリアベルにすごまれると、友人であるエリィさえ思わず身をのけぞるほどの迫力がある。

「……それで、理由はなんですの？」

「ベル……」

「聡明なあなたが、ただ物見遊山で警察などに入るわけがありませんものね」

　拗ねて視線を外しながら言うマリアベルの横顔を見て、エリィは思わず頬を緩めた。

　聡明な、と言ってくれたが、頭の回転の速さでは、自分はマリアベルには到底かなわないと思っている。彼女は時に感情的にも理不尽にもなるが、最後は必ず理知的になって、人の話をちゃんと聞いてくれる。彼女のそんなまっすぐさを、エリィは友人として、とても好ましいと感じていた。

　だから、ちゃんと話したい。自分の気持ちを伝えたい。今日呼び出したのは、そのためだったのだ。

「ちゃんと知らなくちゃ、と思って」

「知る？　何をですの？」

「人間というものを」

「それはまた……ずいぶんと哲学的な問いですわね。そういうものは、ヒマな学者にでも任せておけばよろしいのではなくて？」

　科学を好むマリアベルは、あまり哲学などに興味はない。実生活では役に立たない、とでも思っているのだろう。

「そういうのではないのよ。おじいさまに言われたの。『もっと多くの人と触れあう時ではないか』って」

「マクダエル市長が……」

　マリアベルの表情が、少し真面目なものになる。エリィの友人ということで、マリアベルは何度かヘンリーと会って話したことがある。短い時間だったが、その知性と人柄を感じ取るには、充分だった。そして、親友が（本人は否定するが）おじいちゃん子である理由を理解するのにも。

「私は将来、このクロスベルをよりよくするために、政治の世界に進みたいと思ってる。でもそのためには、私はまだまだ知らないことが多すぎるの。それは、机の上で学べることではなくて、多くの人の中で揉まれ、時にぶつかり合って、はじめて分かることなんじゃないかって」

こりと微笑み続けた。
「今度、新規事業を立ち上げますの。ぜひ、私のサポートをしていただけないかしら？」
「新規事業……って、ＩＢＣの？　そんな、私にはとても……」
「何をおっしゃいますの。あなたが経済の勉強もしていることを私が知らないとでも思って？」
　そうだった、その話もしてしまっていた。エリィが天を仰ぐ。
「それにお父様だって、どこの誰とも分からない人間より、あなたに来て欲しいに決まってますわ」
　確かに、マリアベルの父親であるディーター総裁とも面識がある。というより『おじさま』と呼ばせてもらえる程度には親しい間柄だ。おそらく、一も二もなく賛同してくれるだろう。
　市民から好印象を持たれていない警察の下働きと、クロスベルを代表する企業ＩＢＣの新規事業の立ち上げ。誰に問いたところで、後者を選ばないわけがない。
　だが、それは自分の道とは違う。
「私のサポートをするとなれば、政治経済をはじめとする各界の著名人とも会う機会が増えますわ。あなたの希望である『多くの人と触れあう』こともできるのではなくて？　いえ、あなたはこの提案を受け入れるべきですわ！」
　マリアベルが熱っぽく語り、エリィと繋いだ手をぎゅっと握る。だが、エリィはかぶりを振った。
「違うのよ、ベル」
「何も違いませんわ」
「違うの。私が会いたいのは、あなたの言うような、選ばれた人々、著名人ではないの。もちろん、そういう人たちも、このクロスベルという街を構成している、大事な人たちよ。でも、この街の主役はまだ、たくさんいる」
　そう言ってエリィは、通りを見回した。
　青空の下、多くの人が行き交う。スーツを着た男性が慌ただしくかけていき、その横を親子連れが子どもの歩幅に合わせ、ゆっくりと歩いていく。若いカップルと老夫婦が、十字路ですれ違う。物売りの子が声を張り上げ、クロスベル・タイムズを売り込む後ろには、みすぼらしい格好の労働者風の男が、せわしなくホットドッグをほおばっている。派手な衣装を着た男性が、アルカンシエルの次回公演のチラシを配り、その横を東方風の服を着た男が通り過ぎていく。
　みな、この街の市民で、エリィの言う『主役』だった。
「私は、この街の良いところも悪いところも知っているつもり。でも、知っているつもりでも、まだまだ知らないことがたくさんあると思うの。そして、私にそれを教えてくれるの

は、この街に生きる人、すべてなのよ」
　マリアベルに話しながら、エリィは自分でも改めて確信した。おじいさまのアドバイスは、やはり正しかったのだと。
「納得は、できませんわ」
　マリアベルのつまらなさそうな声に、顔を曇らせるエリィ。
「ベル……」
「ですが、理解はできます」
　マリアベルはそう言って、はぁ～っ、とひとつ大きなため息をついた。
「納得できないのは、私の問題であって、あなたの問題ではありませんものね。エリィ、あなたには、あなたの道を選ぶ権利がある」
　そう言いながらも、ジト目でエリィを睨むマリアベルに、思わずエリィは吹き出した。
「な、何がおかしいんですの？」
「ごめんなさい……ふふふ、だって……」
「こっちは泣きたいぐらいですわ。まったく、あなたは一度こうと決めたら、テコでも動かないんですから」
「ごめんなさい」
　そう言って、軽く頭を下げる。
　マリアベルは意地悪をして言っているのではない。自分を心から心配して言ってくれているのだ。警察に行くなという話も、自分のところで働かないかという誘いも、すべて。
　その好意に答えられない申し訳なさが、自然と頭を下げさせた。
「そうやって素直に謝るところも、ずるいですわ。何も言えなくなってしまいますもの」
　口調は拗ねているが、マリアベルの顔は、すっきりとしていた。
　そんな彼女に答えるように、エリィは繋いだ手を、ぎゅっと握りしめた。
「で・す・が」
　マリアベルの目がキランと光った、ような気がした。
「もし無能な警官どもが、あなたの美しいすべすべなお肌に傷ひとつつけさせたのなら！　ＩＢＣの総力を持って、あなたを奪還いたしますわ！」
　そう言ってマリアベルは、繋いでいない方の手でエリィの腕をさわさわと触りはじめた。今日は半袖のワンピースなので、二の腕まで無防備である。
「ちょ、ちょっと、ベル！」
　エリィとマリアベルとの会話に、何事かと再度注目が集まる。マリアベルに手をさすられながら、エリィは顔を赤くし、うつむいて思ったのだった。
　今度マリアベルと会うときは、絶対に長袖を着てこよう、と。

エリィは、マリアベルの目を見つめて言った。

面接の時のように、しゃべるときにどこを強調するか、ということは考えない。ただ、自分のありのままの気持ちをぶつけた。マリアベルは、それができる数少ない友人のひとりだった。

それで？　と続きを促すマリアベル。

「確かに、警察の中には、一部に問題があるのも事実よ。でも、問題意識を持って、改善しようとしている人もいるんじゃないかと、そう思っているの。クロスベル警察が組織として少しでも良くなれば、クロスベルも良くなると思うし」

話しながらエリィは、以前出会った老夫婦を思い出してた。あのような目にあう人がひとりでも減ることが、まずこの街をよくしていく一歩だと感じていた。

マリアベルは、エリィの目を見つめ、ふっと目をつむった。

「なるほど、分かりました」

エリィはホッとひと息つきかけたその時。

「で・す・が！」

マリアベルはもの凄い勢いで、テーブルの上に置いていたエリィの手を取って、両手でなでさすった。

「ちょ、ちょっと⁉」

「やっぱり納得がいきませんわ～！　警察で働くとなれば、危ない目にも会うのでしょう⁉　この細くて美しい指先、万が一ケガでもしたらどうなさるおつもりですの！　ぁぁ、このなめらかですべすべの肌も……！」

そう言いながらマリアベルは、つーっとエリィの手の甲を指でなぞる。エリィは思わずビクッとなってしまった。

「いや、あの、だからね……」

「はぁぁ、いけませんわ……」

そう言いながら、エリィの肌触りを確かめるように撫でる。その頬は心なしか紅潮しているようにさえ見えた。

マリアベルはこうして、時々スキンシップをしてくる。親密な女の子同士なら当然の行為だ、と彼女は主張するが、エリィからするとちょっと過剰すぎやしないか、と思う事も度々だった。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか自分の左手はマリアベルの右手によってしっかりと握られている。指の間一本一本に手が絡む、いわゆる『恋人つなぎ』というやつだ。さすがにちょっと、と手を引こうとするが、この細腕のどこからそんな力が、と思うほどの力で握られ、動かすことができない。

周りの視線が気になり、キョロキョロとし出したエリィに、マリアベルが声をかける。

「でしたら、私から提案があります」

提案？　とマリアベルの方を向いて尋ねると、彼女はにっ

小説版 零の軌跡 四つの運命

田沢 大典
Illustration 松竜

ティオの章

ビルの屋上で、柵にもたれかかり、夜景を見つめていたロイドとエリィ。ふたりの間を、夜風が吹き抜ける。その冷たさに、エリィは自分の身体を抱きしめた。

「少し寒くなってきたな。下に降りて、暖かいものでも飲まないか?」

そう言ってロイドは、柵から離れた。その言葉に思わず笑みがこぼれるエリィ。

「それは素敵な提案ね」

エリィも柵から離れ、ロイドの元へと歩き出す。ふたりはそのまま、屋上の入口へと向かって歩き出した。

特務支援課のビルは街中にあるが、面しているのは裏通りだ。夜もだいぶ遅くなり、あたりはしんとしている。

ロイドとエリィは階段をあまり音を立てないように静かに歩き、一階へと降りる。廊下にいくつか灯りがついているだけで、かなり暗い。

台所に向かおうとしたロイドとエリィは、ひと部屋、灯りがついていることに気づいた。導力ネットワーク端末がある部屋だ。

ふたりは顔を見合わせ、その部屋の中に入っていく。するとそこには、端末に向かってキーを叩いているティオの姿があった。彼女の姿もまた、エリィやロイドと同じように、外出時のままである。

「ティオ?」

ロイドの声に気づき、振り向くティオ。

「ロイドさん、エリィさん」

ティオの元に歩きながら、エリィが言う。

「こんな時間に、どうしたの?」

「それはこちらのセリフです」

「はは、それもそうか」

ロイドは苦笑しながら答える。

「俺たちは、ちょっと夜風に当たってただけだよ。ティオは?」

「クロスベル警察にある、最新の事件データを調べていました」

いま、クロスベル警察では、事件に関するデータを導力ネットワーク上のサーバーに保存するようにしている。こうすることで、情報の共有化を図り、さまざまな事件に関与している組織や人物を特定しやすくしようという考え方だ。

「今回の捜査に、何か役立つかもしれないと思ったので」

ロイドとエリィは顔を見合わせた。

「ティオ、それはありがたいことなんだけど……」

「今は勤務時間外だし、調べ物なら明日の勤務時間内にやったらいいんじゃないかしら」

はあ、と気のない返事をするティオ。どうしてそんなことを言うのだろう、といった顔だ。

「今は自由に使える時間なんだから、ティオの好きなことをすればいいんだよ」

ロイドの優しい言葉はしかし、ティオを困り顔にさせるだけだった。

「……特にしたいこともないですし……」

ティオの言葉に、今度はロイドとエリィが困り顔をする番だった。

まだ幼かったわたしの小さな手のひら。その上に、猫のマスコットストラップが乗せられた。丸々としたデザインの猫は、ちょっぴり困り顔でこちらを見ていた。しっぽは長く、ふわふわとした毛並みで、指でなぞると少しくすぐったい。

そのマスコットをくれた人はしゃがんで、わたしの目線にあわせてくれた。

「気に入ったか?」

わたしは、力をこめてうなずく。ほんとうに、ほんとうに気に入ったからだ。

「そっか、よかった!」

そう言って、ニカッと笑う。その笑顔は太陽みたいで、不思議と気持ちがふわっとした。

大きな手のひらが、わたしの頭をわしゃわしゃとなでる。髪の毛がぼさぼさになってしまうけど、嫌な感じはしなかった。最後に、頭をぽんぽんとしてくれる。そして、わたしの

目を見つめて、こう言った。
「――安心しろ」
その時のことを、今でも覚えている。
「きっとお前は、幸せになれる」
深く澄んだ瞳。どこまでも優しい言葉。
ああ、わたしは生きていても良いんだと、その時初めて知った。

レマン自治州。その名の通り独立した自治権を獲得している、クロスベルと同じ自治州である。
ここに、導力器を広く世に普及させた立役者である『エプスタイン財団』の本拠地がある。名前の由来となっている、C・エプスタイン博士の故郷がここレマン自治州だったため、ゆかりある地ということで本拠地に選ばれた。そのため、レマン自治州を『導力技術誕生の地』と呼ぶ者もいる。
エプスタイン財団は、リベール王国にあるツァイス中央工房（ZCF）と並び、ゼムリア大陸でトップの導力器開発メーカーとして名を馳せている。先進的な技術開発も多く、遊撃士などが使う『戦術オーブメント』を開発する唯一のメーカーでもある。
彼らの間で今一番の話題は、ツァイス中央工房と共同で開発を進めている『導力ネットワーク』構想である。
大陸全土を導力通信のネットワークで繋ぎ、あらゆる情報を瞬時にやりとりしようという壮大な計画だ。
莫大な研究費用がかかることから、当初はその実現どころか実験すら困難ではないかと言われていた。しかし、クロスベルを代表する企業、IBC＝クロスベル国際銀行社が資金面および運用実験としてのバックアップを名乗り出て、計画は一気に加速した。
レマン自治州にあるエプスタイン財団研究所内にも導力ネットワークが敷かれ、さまざまな実験が日々行われるようになった。
いま研究所の一室で行われている実験も、そのひとつである。
部屋には導力ネットワーク専用に開発された端末が雑然と並び、それらが多数のケーブルによって繋げられている。ケーブルは床を這いまわり、まるでヘビのようにのたくっていた。
しかし、部屋の中央はそれらのケーブルが一切なく、無機的で冷たい床がその姿をあらわにしている。床の広さは、大人が両手を広げたよりも少し大きいぐらいだろうか。
その中央に、ひとりの少女が立っていた。
ダークブルーを基調とした服に身を包み、ライトブルーの髪の毛の上には、猫の耳を模したヘッドギアセンサーが取りつけられている。その手には、魔導杖（オーバルスタッフ）があった。
少し汚れた白衣を着た研究者のひとりが、端末の前に座り、少女に向かって声をかける。
「それじゃティオ君、頼むよ」
「はい」
ティオは簡潔に返事をし、目を閉じる。
「アクセス。魔導杖補助機関《エイオンシステム》起動」
その声に呼応するように、ヘッドギアセンサーが発光し、不規則に点滅する。その点滅にあわせ、彼女のまわりを取り囲んでいる端末が、それぞれ違う画面を表示した。それぞれの画面は滝のようにスクロールし、めまぐるしく変わる。
端末を覗き込んでいた研究者のひとりが、先程ティオに向かって声をかけた研究者に近づいて言った。
「ロバーツ主任、成功です」
その言葉を聞き、満足そうにうなずいた。
「多次元解析によるリアルタイム制御、ここまで早くモノにできるなんて……やっぱりティオ君はすごいよぉ～！」
制御をしているティオを見やり、目を細めるロバーツ。
ティオは目を閉じ、制御に集中していた。
彼女は頭の中に《海》をイメージし、その中でたゆたっていた。
普通の人間なら処理するどころか、目の前に出されただけでパンクしてしまうほどの情報量である。文字通り、情報に『溺れて』しまう。
ティオはそこで、『溺れる』前に『潜る』というイメージを作り出し、情報と接触していた。
情報に飲み込まれるのでなく、自分から情報の中に飛び込んで行く。
水をかきわけるように、情報を探していく。
海にあるすべての水を飲み干せないのと同じよう、導力ネットワーク上にあるすべての情報を見ることはできない。だとしたら、必要な情報は『潜って』探しに行けばいいのだ。
こうしてティオは情報と接する。この彼女のイメージこそが、膨大な情報を的確にコントロールできる重要な要素であり、エプスタイン財団が彼女を高く買っている理由のひとつなのだ。
情報の海の中をたゆたうティオは、いつものように手を伸ばし、かきわけた。
研究者同士の他愛もない雑談のメール、分厚いばかりで中身のない報告書、誰かの雑多なアイデアメモ。それらを認知し、次の瞬間には忘れている。海で泳ぐときに、かきわけた水のことをいつまでも覚えているなどありえない。そういう

風にティオは考えていた。

時々、ロックのかかった情報も紛れ込む。セキュリティレベルの高さに応じて「重たくなる」とティオは認識している。そういう時はするりと方向転換する。「重たい」情報の中に分け入ることもできるが、疲れるのであまりやりたくないことだった。

たゆたいながらティオは、世界はなんと情報にあふれているのだろう、と思った。

しかし彼女は感動しているのではなく、どちらかというと諦念していた。

これだけ情報がやりとりされ、そこに無数のコミュニケーションがあるのに、自分にはほとんど関係がない。

結局世界は、自分とは縁遠いところで勝手に動いているだけのものなのだ。

そんなことを考えながら潜っていたら、ずいぶんと深いところまで来てしまった。

テストとしては十分な結果が残せたはずだ。もう上がろう。

そう思った時だった。

キラリ、と何かが光った気がした。

もちろん、本当はデータが光ったりはしない。実際には、ティオが処理していた情報の中に、彼女が気になるキーワードがあったのだ。

やや重さを感じる情報の海をかきわけ、その何かに手を伸ばす。それは、とりたてて特徴のない、文書のひとつのようだった。

「特務支援課（仮）設立についての意見書

クロスベル警察　警部　セルゲイ・ロウ」

ティオの胸が、とくん、と高鳴る。

クロスベル警察。あの人がいた場所だ。

「昨今のクロスベル市街における犯罪件数の増加。それに対して初動段階で遊撃士に遅れを取っている現状は、憂慮すべき事態と考える。

これは、多くの市民が事件発生時、警察ではなく遊撃士協会に事件解決依頼を要請することが、大きな原因のひとつと考える。

よって、市民の信頼を回復し、同時に事件捜査に可及的速やかに当たることのできる新しい組織の設立をここに提案するものである」

情報を読み取ると、特務支援課という新しい組織を作り、いままでの警察にはできなかったことをしていくらしい。

ふと、あの人の言葉が頭をよぎる。
「楽しいこと、どうしても見つからなかったら、クロスベルに遊びに来い。いやというほど、楽しい目に遭わせてやる」
そう言いながら笑う顔は、年々記憶があやふやになっていく。
自分の記憶もデータ化して、画像を鮮明にできたらいいのに。
そんなことをティオは考えていた。

ロバーツ主任はクロスベル支部の責任者なので、普段はそちらに詰めている。ここレマン自治州の研究所にも自分専用の部屋はあるものの、ほとんど使われず半分物置と化していた。
こちらにいることが少ないため、割り当てられている部屋は広くはない。灰色の壁に囲まれ、通常より大きめのデスクがひとつに、形ばかりの応接セット。特徴的なものと言えば、壁一面を埋める研究用資料が詰まった本棚。それと、導力ネットワーク用の大きめな端末ぐらいである。
エイオンシステムの実験を終え、主任室に戻ったロバーツ。そこに、ティオが尋ねてきていた。
ロバーツは導力ネットワークの技術者であり、本来ティオとはそれほど接点がない。ある時導力ネットワークの負荷実験を行うことになり、彼女の持つ導力杖に搭載されたエイオンシステムを利用し、導力ネットワークのデータ処理限界値を測定することとなった。
当初ロバーツは、ティオが年端もいかぬ子供であることに驚き、次に彼女のポテンシャルの高さに驚いた。結果、ロバーツはかなりティオに入れ込むようになったのだが、ティオにとってはあまりありがたくないことだったらしく、微妙に避けられているように感じていた。そして実際、ティオはロバーツのことを避けていた。
その彼女が、わざわざ部屋を尋ねてきてくれたということでロバーツはとても喜んでいたが、ティオはただ茶飲み話をしに来たのではなかった。
応接セットで向かい合ったティオは、ロバーツにとある提案を切り出していた。
「出向……？」
テーブルの上にあったポットでお茶を入れようとして、茶葉が入っている容器を持ったまま、ロバーツはぽかんと口を開けた。
「はい。クロスベル警察へ」
「け、警察ぅ!?」
ロバーツはあわてて、茶葉をテーブルの上にぶちまけてしまう。

「あああ、ええと、どうしようか……」
その様子をジト目で見ていたティオは、落ち着いた調子で言った。
「まず茶葉を片付けることが先かと。これでは落ち着いて話ができません」
「あ、あぁ……そうだね、うん」
手でテーブルの上に散らばった茶葉を集め、ゴミ箱へと捨てる。パンパン、とゴミ箱の上で手を叩き、手についた茶葉を払いおとした。
「主任、お疲れさまです」
「うん、ありがとう。……って、ティオ君、そうじゃなくて！」
あわてふためくロバーツを見て、忙しい人だな、とティオは思った。
「い、いったいどういうことだい？　クロスベル警察に出向したいだなんて……」
「先程言った通りです。魔導杖の実戦テストとしてむいているのではないかと。クロスベルなら、導力ネットワークも整備されつつあります。財団の支部もあるので、この研究所とのやりとりも比較的容易かと」
「いや、しかし、上の許可は取ったのかい？」
「これから取ります。主任が」
「ぼ、僕がかい!?」
思わぬ言葉に身をのけぞらせんばかりに驚くロバーツ。対してティオは、まったく動揺することなく言葉を続ける。
「クロスベル支部の責任者である主任が『ぜひ来てくれ』と言えば、上も納得するのでは？」
「いや、それはそうかもしれないけど……うむむ……」
こめかみに親指をあてて考え込む。ロバーツが困った時にやるクセのひとつだ。しかしティオは無視して言葉を続ける。
「魔導杖の性能をさらに高めるためには、実戦テストが欠かせないと思います」
「うん、それはそうなんだけど……」
「実戦テストは、できれば多くのシチュエーションと接することができる場所の方がよいかと」
「で、でもティオ君？　テストなら遊撃士協会にお願いするというのもありなんじゃないかな？　ほら、その方が何かと安心だし……」
「依頼のためにミラ（お金）が必要です。魔導杖開発チームは、そこまで資金に余裕があるわけではありませんし」
「うっ……そ、それは」
最先端の導力技術が生み出されているエプスタイン財団と言えど、ミラは無尽蔵にあるわけではない。さらに、ティオが関わっている魔導杖は新しい技術なので、試行錯誤の繰り返しとなる。その分、ムダにしてしまう素材も多く、必然的

にミラはいつも不足しがちである。

「そ、そうだ！　依頼料は僕のお給料から出す、というのは……」

「結構です」

「はうっ！」

考えた上での提案をひと言で却下され、悶えるロバーツ。

そのリアクションを見て、これではキリがないな、とティオは考えた。

「もし提案を飲んでいただけないのなら、わたしにも考えがあります」

「か、考え……？」

ぎくりとし、ロバーツがおそるおそるティオを見る。

「クロスベル警察にハッキングをかけて、警察官の採用名簿にわたしの名前を載せます」

ハッキングとは、導力ネットワークを通じてデータの改ざんや破壊などを行う不正行為のことである。それをティオはこともあろうか警察に対してする、と言っているのだ。

とはいえ、これはブラフである。ハッキングを取り締まる法律はまだ明確には制定されていない。しかし、不正が発覚した場合、何らかの罰を受けることは必至だ。ティオはそこまでのリスクを冒すつもりはなかった。ただ、ロバーツがその気になってくれさえすればよかったのだ。

そして、彼女の作戦は見事に功を奏した。ロバーツは顔面蒼白になって、ティオにまくし立てた。

「だ、ダメダメダメ！　それはダメだよティオ君！　導力ネットワークを経由したハッキングだと知れたら……」

「ですから、最後の手段です。財団からの出向という形にすれば、なんら問題はないかと」

「うぅ……」

ロバーツは頭を抱えた。これは『お手上げ』というサインである。しばらくうめいた後に、がっくりと肩を落とし、疲れ切った顔で言った。

「……分かった、手配しよう。魔導杖開発チームの方にも、僕の方から話しておくから」

「ありがとうございます」

ティオは頭を下げる。半ば脅しのような形だったが、ロバーツが動いてくれたことには、素直に感謝していたようだ。

そんなティオの姿を見て、少し微笑むロバーツ。

「でも、ちょっと意外だよ。ティオ君は、クロスベルみたいな人が多くいる場所は好まないのかと思ってた」

それは、と言いかけてティオは黙り込んだ。

ロバーツの言うとおり、ティオは人が多くいる場所を苦手としている。

ティオは通常の人間より感覚が鋭敏である。それは『感応

力』と呼ばれるものだ。今でこそ感覚をある程度遮断することに慣れたが、制御できなかった頃は、数人の人がいる場所すら避けていた。

感応力が高い者は、時に人の思念のようなものまで読み取ってしまうことがある。多くの人が入り交じる場所で、その人たちの思念が聞こえたとしたら、たぶん精神を病んでしまうだろう。

だからティオは、あまり多くの人と接する必要のない、この研究所の暮らしにある種の安心感を得ていた。

いや、得ていたはずだった。

――なのに何故、わたしはここまでクロスベルにこだわるのだろう？

ふと、ティオが思考の海に沈みかけていると、ロバーツが不安そうに顔を覗き込んだ。

「ティオ君、大丈夫かい？」

「え……あ、はい」

「やっぱり不安だよ……ねぇ、この話はもう一度考え直してみないかい？　遊撃士協会に頼んだ方が……」

「主任、ハッキングしますよ」

ぐうっ！　という謎の言葉を発して、ロバーツがうなだれる。

「はぁ……この前はヨナ君が飛び出していって、今度はティオ君がクロスベル行きか……ここのみんなも、寂しがるだろうなぁ」

ヨナ・セイクリッド。少し前までこの研究所にいた少年で、導力ネットワークのスペシャリストである。さらに細かく言うと、ハッキングの専門家だ。

ティオはムッとした表情で答える。

「わたしは彼のように、怒られるのが嫌で飛び出していくわけではありません。一緒にされるのは不愉快です」

ヨナはエンジニアとしてこの研究所で研究をしていたが、とある研究開発の過程で、生来のいたずら心がうずいてしまい、プログラムのソースにとある細工をした。それは、特定の時間に特定の操作をすると、サイケデリックな画面が表示され、プログラムがデータベースに保存されている情報をぐちゃぐちゃに書き換える――ように見せる――というものだった。

だが、彼は詰めが甘かった。ただ書き換えるように見せるはずの情報は、実際に書き換わるようにプログラムされていたのだ。そして、結果としてデータベース内の情報はぐちゃぐちゃに書き換わってしまい、数年来に渡り研究を続けていたとある研究はお蔵入りとなってしまったのだ。

これによる損害は甚大で、それを知っていたヨナは研究所を逃げ出してしまった。弁償したくなかったからではない。

もちろん一個人に弁償できるような金額ではなかったのは確かだが、ただ『怒られるのが嫌だった』からである。
そんな人物と自分を一緒にされて、ティオが気分を害していた。それが分かったロバーツは、愛想笑いを浮かべる。
「ハハ、わ、分かったよ。ゴメンねティオ君、機嫌なおして?」
その愛想笑いをジト目で見ながら、ティオは言った。
「主任のそういう所が嫌いです」
がっくりと肩を落とすロバーツを横目に見ながら、ティオは主任室を後にした。

その日の夜。
研究所に併設された職員用の宿舎に、ティオの私室がある。簡単な料理ぐらいはできるキッチン、簡素なリビング、そして寝室と、さほど広くはない作りだが、少女のひとり暮らしと考えれば必要十分な広さである。
普段は夕食を食べた後、リビングにある導力ネットワークに繋がった端末をいじり、他の街の情報を見たり、導力技術関連のデータを漁ったりする。
しかし、今日はそんな気分にはなれず、夕食を取ったら早々にパジャマに着替えてしまった。
寝室は簡素な作りで、調度品はベッドの他にはタンスと、照明や小物などがのっているベッドサイドテーブルぐらいだ。
室内には、レマン自治州で古くから親しまれている民族音楽が流れている。それは、サイドテーブルに置かれた、小ぶりなスピーカーから流れていた。これは、研究所の試作品作成班の人間が趣味で作った、導力式の蓄音機である。導力ネットワークでも使われるデータ保存技術を使い、手のひらに載る程度の記録結晶=メモリークオーツ中に音楽のデータを詰め込んでいるのだ。
流れている曲は開発者がテストで入れたものだったが、ティオはその素朴な音色が気に入って、たまにこうして流していた。
ティオはベッドに腰掛け、サイドテーブルに置いてあった、親指の先ほどの大きさの、小さなマスコットのストラップを手に取った。困った顔が印象的な猫のマスコットだ。少しくたびれてはいるが、大事に使っているので壊れたり欠けたりはしていない。
その困り顔をティオはじっと見つめる。そのまま、彼女の記憶は流れる曲にのって過去へとさかのぼっていった。

のどかな田園風景の中を、列車がひた走る。車内は、陽気の良さもあって、けだるい午後の空気に包まれていた。
そんな中、ひときわ賑やかな席がある。

ひとりは生気に満ちあふれた青年が座っていた。まるで炎が揺らめいているかのような髪型に、意志の強さを感じさせる太い眉。やや大柄でがっちりとした身体つきである。彼は、青と白のツートンカラーのジャケットを羽織っていた。ジャケットの背中には、クロスベル警察の紋様が描かれたワッペンがある。
その青年と向かい合わせに座っているのは、儚げな印象を持つ少女だった。ライトブルーの髪は背中まで伸びている。ライムグリーンのワンピースは、彼女を幾分か幼く見せていた。肌は透き通るような白で、腕も細い。見る人が見れば、何か病気でもしていたのではないか、と不安にさせるような細さだった。
青年は身振り手振りを交え、陽気に話をしているが、少女の方はほとんど反応を示さない。かといって、その青年を拒絶しているのかと言えばそうではない。そもそも、外界からの刺激に対して反応が鈍い、といった風だった。
列車がゆるいカーブにさしかかり、車窓から入ってくる日光が、少女の顔に当たる。その様子に気づき、青年が話を中断する。
「ティオ、お日様まぶしくないか?」
少女は、幼い日のティオだった。ティオは、こくりとうなずく。青年は立ち上がり、車窓に備えつけのカーテンをかけた。
「これでよし」
そう言って、どっかと座る。と、その拍子に青年の胸元から、手帳が落ちた。おおっと、と言いながらあわてて拾おうとする。
「なくしたりしたら、シャレにならないからな」
そう言っておどける青年。
手帳は落ちた拍子に開いていた。その1ページ目には、ちょっとかしこまった青年の顔写真があり、その下に、
「この者、ガイ・バニングスをクロスベル警察の捜査官であることをここに証明する。
クロスベル警察署長」
と書かれていた。
この青年こそ、ロイドの兄であるガイ・バニングスである。
ガイとティオは、ティオの故郷であるレミフェリア公国へと向かっていた。ティオを両親の元へ送り届けるために、ガイが護衛をしていたのだ。
ティオがただの少女なら、クロスベル警察の捜査官を護衛につけて行動する必要はない。そこにはとある理由があった。

いまから約3年半前、幼かったティオは、とある狂信的な宗教団体によって拉致された。その教団の目的は不明だったが、彼女はある『儀式』の対象として、さまざまな実験を施されたのだった。薬物投与、電極によるショック、暗示、極度のストレス――ありとあらゆる方法で五感を高められた。

彼女と同じようにして拉致された少年少女は多くいたが、最後まで耐えられたのは、彼女ただひとりだった。

その実験に耐え抜いた彼女は、超人的な感応力――遠くのものを見たり、遠く離れた音を聞いたり、人の感情まで読み取る――を身につけた。いや、身につけさせられた。

そして、3年の月日が過ぎたある日。ガイをはじめとするクロスベル警察の捜査官や遊撃士たちが、教団の施設に乗り込み、瀕死のティオを助けたのだ。

ティオは自治州内にあるウルスラ病院に搬送され、そこで半年ほど治療を受けた。ティオの体調が安定するのを見計らい、すぐにレミフェリア公国に住む両親の元へと送り届けられることとなった。いまふたりが乗っているのは、レミフェリア公国にある、ティオの故郷へと向かう列車だ。

ガイは落としてしまった手帳を胸元にしまった。

「さて、さっきの話の続きだな」

そう言ってガイは、いきなり眉根を寄せて、深刻ぶった顔を作った。

「ついに俺は犯人を追い詰めた！　さあ観念して出てこい！　そう叫んだ俺の前に出てきたのは……誰だと思う？」

ティオは、わからない、と言った顔でガイを見る。深刻ぶった表情をしていたガイの顔が、パッと笑顔に変わった。

「なんと、猫だったんだぜ！」

「……ネコ……？」

「そう、黒猫！　盗まれた宝石も、置かれてた謎の仮面も、全部その猫の仕業だったんだ。これにはもう、俺たちみんなで脱力さ」

そう言って豪快に笑う。しかし、ティオはじっとガイのことを見つめていた。

「あれ……おもしろくなかったか？　おかしいな、この話は滑らないからいつもネタに使ってるんだが」

「……ネコは？」

え、と声をあげたガイに向かって、ティオはもう一度尋ねた。

「そのネコ……どうなったの……？」

「なるほど、俺たちのドタバタよりも、ネコが気になるか。ホントに形無しだな」

そう言って今度は苦笑するガイ。

「大丈夫。その頃、署の受付をやっていた女の子が引き取っていったんだ」

そう、とだけ言って、ティオは座り直した。

「猫、好きなのか？」

ガイの言葉に、こくりと無言でうなずくティオ。ガイはにまーっと満面の笑みを浮かべた。

「そうか、猫が好きか……よしよし」

ガイはひとりで納得し、うなずいていた。ティオは訳が分からず、小首をかしげる。ガイはそんなティオには答えず、話を続けた。

「ま、好きだってことはよく分かった。今ちょっと笑ってたもんな」

え、と声をあげずに驚くティオに、ガイは続けた。

「笑ってた。ほんの少しだけどな」

自分でも気づかないうちに笑っていたのかもしれない、とティオは小さな手のひらを、ほっぺにあてた。

「俺の相棒も、なかなか表情が変わらないやつでね。でも分かるんだ、ほんのちょこっとの変化も、見逃しはしないぜ？」

そう言いながらガイはティオを指差す。ティオがガイを見ると、にっこりと微笑んだ。

「俺の相棒は、とにかく仕事大好きな奴でさ。朝は誰よりも早く来て捜査の準備をして、夜は誰よりも遅くまで残って書類を片付けてる」

ガイは、手を思い切り上下に広げて、目をまん丸に見開いた。

「こーんな山みたいな書類を、奴ひとりで黙々と片付けてるんだ。班長がやるようなやつまで。あ、班長ってのは、俺の上司でセルゲイさんって言ってな、これがまた飛んだくせ者！　なにせ、俺と相棒を組ませようとしたのは、そのセルゲイさんなんだぜ」

話がめまぐるしく変わり、ティオは軽く混乱していた。そんなティオの様子に気づかないのか、ガイが続ける。

「俺と相棒は、特別仲が良かったわけじゃあない。むしろ最初のうちは『なんだあの無愛想なやつは』と思ってたよ。向こうは向こうで『言葉多くして中は虚ろなり』なんてことを思ってたらしい。なにが虚ろだよ、まったく」

途中で落ち着いた声色に変わったのは、その《相棒》という人の声マネだろうか。さらにガイは話を続けた。

「でも、セルゲイさんが『お前たちは、最高のコンビになるか、最低のコンビになるかのどっちかだ』って言ってな。おもしろそうだから、その賭けに乗ってみたわけさ。ま、今のところはぶつかりながらも、うまくやってるけどな」

ティオはガイの言葉を聞きながら、別のことを感じていた。

この人は、《相棒》という人とセルゲイという人に対して、暖かい思いを抱いている。

幼い頃のティオは、その感情をなんと言うのか分からなかった。今のティオに尋ねれば〝信頼〟と答えるだろう。だが、彼女はまだその言葉を知らなかったので、自分の知っている言葉に置き換えて言った。

「〝好き〟……なの……？」

唐突な言葉に、またも驚くガイ。

「そのふたりのことが……〝好き〟っていうこと……？」

「うーん……なんてストレートな質問だ」

そう言いながら、頬を指でひっかく。

「まぁ、好きか嫌いかで言うと……嫌いじゃないな」

言ってから、今度は頭をポリポリとかいた。

ガイは内心で、感応力のあるティオに隠し事はできないな、とひとりごちた。ただ、それを彼女の前で口に出すことはしなかった。それを言うことは、彼女に悪い影響を与えると分かっていたからだ。しかし、ふとあることに思い立って口をついた。

「……いやまて、ロイドにも前にこんなこと言われたな。子供ってやつは、みんなこんなだった気もしてきたぞ……」

また知らない単語が出てきた。ロイド、とは何だろう？

ティオのそんな疑問は顔に出ていたらしい。ガイが説明をしてくれた。

「ロイドってのは、俺の弟だ。ティオの５つ……いや、４つか？とにかくそんぐらい上でな」

「やっぱりおしゃべりなの……？」

弟も同じようにいっぱいしゃべるのだろうか、と思ったティオの素朴な疑問に、ガイは苦笑しながら答える。

「俺、そんなにおしゃべりか？」

こくりとうなずくティオ。

「楽しませようと思っただけなんだがなぁ……」

ガイは考え込むように腕を組む。

「俺の弟は、そこまでおしゃべりじゃない。どちらかというと、言葉は選んで話すタイプだな。セルゲイさんは、お前とは正反対だな、なんて笑ってたけど」

こんなに陽気な、そしてちょっとさわがしい人の弟なのに、おしゃべりしないんだ、とティオは思った。

「真面目で良い奴だって周りからも言われてるんだが……俺からすると、ちょいと真面目すぎて心配でな。もうちょっとハメをはずしてもいいと思うんだがなぁ。この前もな、日曜学校でシスターに呼び出されて『おお、あいつもついにケンカして呼び出されるようなやんちゃ小僧になったか！』って喜んで飛んで行ったんだ」

ティオは、ケンカをするというのは悪いことだと聞いていたが、どうやらガイの家では違うらしい。

「そしたらロイドのやつ、ケンカをしかけたんじゃなくて、

仲裁しようとしてケガしたんだと。『さすが警察官のお兄さんを持つと違うわね』なんてシスターは感心してたけど、損な性格すぎて心配だぜ俺は。あいつは優しすぎるんだよな。セシルも同じこと言ってたし」

セシル。また知らない人の名前が出てきた。そして、その名前を言う時だけ、ガイから感じる感情の流れに、別のものを感じた。それは、ロイドの名前を言う時とはまた違う、不思議と熱いものがあった。

「ん？ あぁ、悪い。弟の話はおもしろくなかったか？」

ティオは首を横に振った。ガイの話は分からないことも多かったが、彼から感じる感情の流れはとても暖かく、心地よかった。

そしてなにより、ガイの笑顔が、ティオにはまぶしかった。

「おもしろかったか。そりゃよかった！」

そう言ってニカッと笑う。このガイの笑顔を見ているだけで、彼がどれだけ日々を楽しんでいるか、そして周りの人々が〝好き〟かが、ティオには分かった。

「……いいな」

ポツリ、とつぶやいて、思わず口に手をあてた。今のは、意図せずに口からこぼれた言葉だったからだ。

そんなティオの様子を見て、ガイの目元が一瞬険しくなる。教団の施設でティオが置かれていた境遇を思い出したのだろう。

ガイは座っていた椅子から腰を浮かし、床に膝をついて、ティオと目線を合わせた。

「ティオにも、これからいっぱい楽しいことが起きる。それこそ、話しきれないぐらいにな」

「そう……なの……？」

ティオには信じられなかった。

あの施設にいて、自分だけが生き残った。それはただの偶然で、自分に何か特別な理由があったからとは思えなかった。いま生きているのが不思議なぐらいだ。そんな自分に、これから楽しいことが起きるなんて、思えなかった。

だが、ガイはティオの目を見て、断言した。

「そうだ！ 毎日楽しすぎて、目が回るぐらいだ。想像してみろ、楽しいことを」

そう言われて、ティオは楽しく走り回る自分を想像しようとしてみた。

だが、何が〝楽しい〟のかが分からないティオには、難しいことだった。

「……わからない……」

うつむいて視線をそらす。

その肩に、ガイが優しく手を置いた。ティオが顔を上げると、目の前にガイの笑顔があった。

「どうしても見つからなかったら、クロスベルに遊びに来い。いやというほど、楽しい目に遭わせてやる」
肩に置かれた手から、ガイのクロスベルへの印象がティオの心に流れ込んでくる。
雑然としていて、活力に満ちあふれていて、大好きな人たちがいる暖かい場所。
その印象は、今まで感じたどの感情よりも鮮烈だった。
思わず興奮し、かすかに頬を紅潮させるティオ。
「おっ、元気になったな。そうだ、子供は元気が一番だ！」
はははっ、と快活な笑い声に、車内アナウンスが重なる。
もうまもなく、ティオの故郷の駅に着くというアナウンスだった。
駅には、遊撃士協会の人間と共に、ティオの両親が来ていた。
ティオの姿を見つけ、かけより、抱きしめる両親。泣いて彼女の無事の帰還を喜んでいた。
しかしティオは泣かなかった。というより、どう接してよいのか分からず戸惑っていた。
両親と会うのはおよそ4年ぶりである。物心がついてからすぐに拉致されてしまったので、あまり明確な記憶がない。いや、記憶はあったのかもしれないが、施設で心をすり減らしてしまい、忘れてしまったのかもしれない。だから、他人とあまり変わらなかった。
唯一良かったなと思ったのは、彼らから感じる感情の流れは、自分を拒絶するものではなかったということだった。少なくとも自分をモノとも化け物とも思っていない。逆に、施設にいた大人たちはそういう感情しか持っていなかった。
「本当に、本当にありがとうございました」
ガイに向かって何度も頭を下げる両親、それに対して、自分だけの力じゃないですと恐縮するガイ。そんな彼らのやりとりを、ティオはぼんやりと見つめていた。
やがて両親が、それでは、と言ってティオを連れて行こうとした。
もう少し、ガイと一緒にいたかったな。ティオがそう思ったその時。
「あ、ちょっと待った！」
ガイがティオを呼び止めた。
彼は、バッグからポーチを取り出す。ポーチは濃い緑色をしていて、かなり使い込まれたものだ。
ティオはこの旅の途中で、ガイが何度かそのポーチからモノを取り出すのを見た。ポーチからは、あめ玉や、かわいい絵柄の絆創膏、それにトランプと、楽しいものがいくつも飛び出してきた。

雑然としていて、活力に満ちあふれている街、クロスベルに。

だが、そこにもわたしの未来はなかった。

クロスベル警察の受付であの人の名前を出した時、受付の婦人警官はとても悲しそうな目をして言った。

ガイさんは、亡くなられました――、と。

彼女から伝わる悲しみの大きさから、それが本当のことだと知ったわたしは、その場に立ち尽くした。まるで、迷子になった子供のように。

空っぽになった頭の中に、周りの喧噪がやけに響いていたのを覚えている。

いきなり割れんばかりの拍手が鳴り響き、ティオはハッと意識を戻した。過去の記憶に戻っていた意識が、現実に戻っていくのを感じる。

拍手は、例の蓄音機から鳴っていた。どうやら曲が終わり、観客の拍手の部分が再生されたらしい。蓄音機を操作しようと身体を起こしそうとし、困り顔のみっしぃストラップと目が逢う。

今のわたしも、こんな顔をしているのだろうか。

ふいに、身体に寒気が走った。毛布もかけずに長いことベッドの上にいたせいか、身体が冷えている。自分が思っていたよりも長く、物思いにふけっていたようだ。

ティオはもぞもぞと身体を動かし、蓄音機の電源を切り、ベッドサイドの灯りを消して、ベッドの中に潜り込んだ。

毛布をかぶるが、その中もまだ寒かった。自然と、身をちぢこませる。猫の様に背中を丸めた。

暗闇の中にいると、自分がその中に飲まれてしまいそうな気分になった。だが、それを怖いとは感じない。このまま消えてしまっても仕方ないか、と思えてしまうのだ。

こうして闇の中にいると、ティオはいつも考える。

なぜ自分は生きているのだろう？

なぜ自分は死なないでいるのだろう？

教団の施設で同じように生きていて、そしていなくなってしまった子供たち。

なぜ自分は、その子たちと違って、いまここに存在しているのだろう？

ある人は、施設でのことはもう忘れなさい、と言った。

またある人は、亡くなった子供たちの分まで一所懸命に生きなさい、と言った。

どちらも、自分にはできなかった。3年間もいた施設の記憶は、消せるはずもない。それにそもそも、一所懸命に生きるとは、どうすればいいのか？

ティオには、すべてが分からなかった。ただ分かっていることは、眠れば、そんな考えから解放されるということだけだった。

だから彼女は、まぶたを閉じた。一時の安らぎを得るために。

クロスベル駅は、多くの人でごった返していた。

その駅にまた新しい列車が滑り込んでくる。ブレーキ音を響かせて、車体がゆっくりと停止する。

開いた扉からは、人々が一気に吐き出され、ホームは大きな荷物を持った人であふれかえった。

そんな旅行者の中に、ティオの姿もあった。ダークブルーの服に身を包み、髪型も、いつものツーサイドアップだ。ただ、カチューシャタイプのヘッドギアセンサーは必要がないのでつけていない。

クロスベル駅に降り立ったのは、ひとりであの人を尋ねて来た時以来だな、と思いながら、駅の構内を見回す。たった数年だったが、駅の構内も拡張工事などが行われて、だいぶ様変わりしていた。

と、ティオの後ろから、旅行カバンを持ったひとりの男が近づいて来た。

「ティ、ティオく～ん、待っておくれよぉ～」

息を切らせてやってきたのは、ロバーツ主任である。格好は、いつものよれよれのYシャツに、履き古したスラックスだ。研究所と違うのは、白衣の代わりにグレーのコートを着ていることぐらいである。ようやく追いついた彼をジト目で見つめるティオ。

「主任は、いつもこの駅を使っているんですよね。それなのに、なぜ迷子に？」

エプスタイン財団クロスベル支部の責任者として、レマン自治州とクロスベルを何度も往復しているロバーツは、いつもこの駅から旅立ち、この駅に戻ってくる。だが、ロバーツはまるではじめて来たおのぼりさんのように、旅慣れない様子だった。

「いやいや、人混みはどうも苦手で。何度来ても慣れないよ……」

いつも以上によれよれのロバーツを見て、ティオが言う。

「主任は長旅で疲れているようですし、やはりクロスベル警察にはわたしひとりで行きます」

「いやいやいや！　これからティオ君がお世話になる人なんだし、クロスベル支部の責任者として、ちゃんと挨拶をしなくちゃ！」

ティオはひとりでクロスベル警察に行くと言ったのだが、ロバーツは自分も同行すると譲らなかったのだ。

ティオはロバーツに隠しもせず、盛大にため息をついた。

「えーっと、どこにやったかな……あ、あった！」

ガイはポーチの中から、何かを取りだした。そして、ティオの前にひざまづく。

「ティオ、手を出して」

わけが分からないまま、言われた通りに手を差し出す。ガイはその小さな手のひらの上に、何かをのせた。

「これ……」

「かわいいだろー？　『みっしぃ』って言うんだ」

それは、困り顔が印象的な、丸々とした猫型のマスコットストラップだった。

「ティオにプレゼントだ」

ガイは、病床のティオに何かプレゼントを持っていこうとしたものの、何を買ったらよいのか皆目見当も付かなかった。『小さな女の子が喜びそうなものを自分の足で探して買ってくる』というミッションは、ガイにとっては凶悪犯を追い詰める捜査より難しく、プレゼント選びは難航した。警察の受付の女の子などへの聞き取り調査まで行い、ようやく見つけたのが、このみっしぃストラップである。いわゆるご当地キャラクターである『みっしぃ』は知名度が低く、人気もほとんどなかったのだが、ティオならきっと気に入るはずだ、とガイは直感し購入した。

次のお見舞いの時に渡そう、と思っていたところに、彼女が故郷へと帰る際の護衛任務を任された。なら、旅の最後に渡して、驚かせてやろうと考えたのだ。

「どうだ？　その妙に人をイラっとさせる……じゃなくて、印象的な表情！　ティオなら気に入るんじゃないかと思ってな」

しかし、ガイのその言葉は、ティオには届いていなかった。ティオは、手のひらの上にあるみっしぃマスコットを食い入る様に見つめていたからだ。

ずっと興味津々といった様子でみっしぃと顔を合わせていたが、しっぽをおそるおそるなでた。その毛並みは柔らかく、気に入ったのか二度三度となでる。

「気に入ったか？」

そう言ってガイはニカッと笑う。ティオは頬を紅潮させ、こくんとうなずいた。

「そっか、よかった！」

ガイは手を伸ばし、ティオの頭をわしゃわしゃと撫でた。ティオのライトブルーの髪の毛が、少し乱れる。しかし、ティオは嫌がりもせず、受け入れていた。

最後に優しく、しかしきっぱりとガイは言った。

「――安心しろ。きっとお前は、幸せになれる」

まるで、おまじないをかけるように。

「人はいつだって、やり直せるんだ。それまでどんなに辛いことがあっても、それは昨日までのことだ。それはもう、終わったこと」

ティオの辛い過去を断ち切るように断言して、そして笑った。

「これからは未来が待ってる。キラキラした、まぶしい未来がな」

その笑顔を見て、ティオはしっかりとうなずいた。

よし、と満足そうにうなずいて、ガイは立ち上がる。

「もし、そうならなかったらいつでも俺を呼んでくれ。お前を不幸にする原因を一緒にぶっ飛ばしてやるからよ！」

そう言ってガッツポーズをするガイ。

やけにかっこつけているガイが、何故だかおかしくて。

「ふふっ」

ティオは、声をあげて笑った。笑ってから、こうやって声に出して笑うことを、ずっとずっとしてこなかったことに気づいた。

あの人は、キラキラとしたまぶしい未来が待っていると言っていた。だが、それは結果として、嘘になってしまった。

両親も、はじめは暖かく迎えてくれた。愛情を持って接してくれて、日曜学校にも通わせてくれた。

だが、あの施設で感応力を高められたわたしは、一般人と一緒に暮らすにはいろいろと無理がありすぎた。

本来は聞こえないはずの音、見えないはずのもの、感じられないはずの感情。

幼かった頃のわたしは、それを口に出さないようにしなくてはいけない、という自制心も持っていなかった。

結果待っていたのは、施設での待遇とあまり変わらないものだった。周りの人たちはわたしを、自分たちとは違う異質なモノ、気味が悪いものとして見るようになった。

両親だけは変わらずに優しく接してくれていたが、その感情は愛情だけでなく、不安もないまぜだったことを感応力で感じ取っていた。

そしてある夜、ベッドで寝ていたわたしは、何枚もの壁を隔てた先で話していた両親の言葉を聞いてしまう。

――あの子とこれから、どう接していけばいいのだろう？

その言葉を聞いた時、自分の居場所は既にここにないのだ、ということを知った。

わたしは怒るでも悲しむでもなく、ただ途方にくれてしまった。ここに来れば幸せになれる、と聞かされていたものがひっくり返ってしまった。なら、次はどこに行けばいいのか？

答えが欲しかったわたしは、ある日こっそりと家を抜け出し、導力列車に乗って向かった。

クロスベル警察の会議室に、ティオとロバーツが通されてからしばらく後。
そわそわと落ち着かないロバーツをたしなめようか、とティオが思っていると、扉が開いた。
「お待たせしました」
そう言いながら、ひとりの男が入ってきた。顔つきからして、年の頃は三十代後半だろうか。目元などは幾分かクマができていて、彼の年齢がそこまで若くないことが分かる。その目は細く、眼光の鋭さが印象的だ。あごの下に蓄えられたヒゲもまた、彼の年齢を年相応に見せていた。
大柄な身体を包むのは、いくぶんくたびれたワイシャツ。二の腕までまくっている。がっちりとした首回りは、格闘技をやっていたのではと連想させる。その首元には、きっちりとえんじ色のネクタイがしめられている。そして、黒いズボンをサスペンダーで吊していた。
彼が、今度設立される予定の特務支援課、その考案者にして課長候補のセルゲイ・ロウである。
しかしセルゲイは入ってきてティオの顔を見るなり、目を細め、黙りこくってしまった。
ティオを見て、セルゲイは内心で驚いていた。それと同時に、この案件が自分のところへ来たのは、ある種の運命のようなものなのだと理解した。
エプスタイン財団から、魔導杖のテストに協力して欲しいという要請が来た時、クロスベル警察内部では困惑の声が上がった。
導力技術の最先端を担うエプスタイン財団と、クロスベル警察の繋がりはほとんどないと言っていい。
クロスベル警察にも導力ネットワークが導入されているが、それはクロスベル市全体が導力ネットワークの施設実験に参加しているからであって、特別エプスタイン財団との関係が深いからではない。
逆に、エプスタイン財団と言えば、昔から遊撃士協会との繋がりが深い組織でもある。導力技術が広く普及した背景には、遊撃士協会の協力で、遠い辺境の地まで導力技術を〝伝導〟してきた経緯があるのだ。
つまりエプスタイン財団は、新しい技術のテストに遊撃士協会に頼む筋こそあれ、クロスベル警察に頼む筋はない、はずだった。
だからこそ警察側は困惑し、この問題を組織内で微妙な立場にあるセルゲイに一任したのだ。
しかしセルゲイは、偶然にも繋がりを持っていたのだ。エプスタイン財団ではなく、ティオ・プラトーという少女と。

彼がかつて担当した事件で、彼女は被害者として保護された。事件の重要参考人ではあったが、幼かったことと、その身に受けていた実験、それによる精神的ショックを考慮し、彼女は親元に帰された。
その少女が、成長した姿で今、自分の目の前に立っている。
この場にガイの奴がいたら、どんな顔をするだろう。
そう考えて、セルゲイは内心で苦笑した。奴のことだ。何にも考えず再会を喜び、彼女を抱きしめただろう。

セルゲイが黙ってしまったので、ティオは先に自己紹介をすることにした。
「はじめまして、ティオ・プラトーと言います」
「セルゲイ・ロウだ。ちなみに、初めましてではないのだが……まあ、君が覚えていなくても無理はない」
ティオは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに納得した様子でうなずいた。
「思い出しました。ガイさんが言っていた『セルゲイさん』とは、あなたのことだったのですね」
セルゲイは頭をポリポリとかき、改めてティオに向き合った。
「元気そうでなによりだ」
「どうも」
ティオは軽く会釈するが、それ以上は何も言わなかった。
ここに来たのは思い出話をするためではなく、魔導杖のテストに関する話をするためだ。
ティオのそんな心情を汲んだのか、セルゲイもそれ以上は言わなかった。ただひとり、ふたりの関係が分からないロバーツが困惑している。そんなロバーツに向かって、ティオは言った。
「主任。今回のテストの趣旨説明をお願いします」
「え？ あ、あぁ、そうだね」
ティオに促され、ロバーツが魔導杖のテストに関する概要を話し始める。
「エプスタイン財団から来ました、ロバーツと申します。すでに、導力メールで資料等はお送りしたと思いますが……」
「目は通してあります。ですので、簡潔な説明で結構です」
セルゲイに言われて、ロバーツはホッとした。実は、人前で説明をするのがあまり得意ではないので、しゃべることが減るのは大歓迎だった。
「では、魔導杖に関する具体的な説明は省かせてもらいます。当方としては、魔導杖を多くのシチュエーションで使用し、データを蓄積したいと考えています。そこで、さまざまな事件解決にあたるクロスベル警察に協力をお願いしたいと考えた次第です」

そんなティオの様子を見て、ロバーツが慌てて声をかける。
「ティオ君、だ、大丈夫？　気分でも悪いのかい？」
「いえ……」
ロバーツの問いかけに返事をしたものの、ティオはまだ思考を続けているようだった。
その様子を見て、セルゲイは、やはり、と思った。
「おかしな質問をしてしまったようだ。すまない」
セルゲイはわざと大きな声を出し、ティオの意識を現実に戻した。
ティオはハッとした様子で気づき、いえ、とだけ言って目線をそらす。
気まずい沈黙が流れ、ロバーツがなんとかこの場を取り繕ろうと、声をあげた。
「あのう……先程からお話を聞いていると、そちら側も受け入れ体制が整っていないようですし、この話はやはり一度白紙に戻した方がいいのではないかと……」
ロバーツの言葉に驚くティオ。今さらこの人は何を言っているのだろう。
とにかく反論をしなくては、と思ったその時。
「いえいえ、我々は是非ティオ君を受け入れたいと思っていますよ」
今度はセルゲイの言葉に驚いた。同じように驚き、口をパクパクとさせているロバーツに向かって、セルゲイは言った。
「エプスタイン財団には導力ネットワークの件で我々もお世話になっています。ぜひ協力させてください。それに今度立ち上げる予定の組織では、導力関係に詳しい人材も欲しかったところでしてな。渡りに船とはこのことですよ」
「しかし、先程の質問にティオ君は……」
「いやいや、あれは私のちょっとしたイタズラでして」
「い、イタズラ？」
「『悪人をバンバン捕まえたいです』などと言われたらおもしろいかなと思った次第です。いや、少々不謹慎でしたな」
そう言ってセルゲイは、頭をかいた。
「はぁ……」
「とにかく、我々としてはエプスタイン財団とティオ君にご協力いただきたい」
「ですが……」
ロバーツは反論をしようとしたが、口をつぐんだ。最初に魔導杖のテストに協力して欲しいと頼んだのはこちらなのだ。それをまたこちらの都合で引っ込める、というのはおかしな話ではある。
先方が乗り気でないのならともかく、是非にと言われている状況では、なおさら引っ込めづらい。
ロバーツはしばらくうんうんと唸ってから、最後に肩を落

として言った。
「……ティオ君を、よろしくお願いします」
「分かりました」
ティオは、ジト目でロバーツを見ながらつぶやいた。
「主任が余計なことを言うから、一時はどうなるかと思いました」
「ううっ……面目ない」
ティオのそんな様子を見ながら、セルゲイは思った。
彼女は、本当の望みに気づいてはいない。
親元に帰したはずの彼女が、どういう経緯でエプスタイン財団にいるか、それは分からない。
だが、少なくとも手放しで幸福な状況にある、とは言えないのだろう。もし本当に幸福なら、彼女はこの街に来ることはおろか、関心を向けることすらしなかっただろう。
恐らくは悩んでいるのだ。〝生きる〟ということに。
悩むからこそ、人はもがき、行動をする。彼女がこの街に来たのは、そういう理由があったのだろう。
かつて自分を救ってくれた人物がいた街。その息吹を強く感じられる場所。それがここ、クロスベル警察だったというわけだ。
変わらずにチクチクとロバーツをやりこめているティオを見つめながら、セルゲイは今は亡き部下に向かって心の中で呼びかける。
どうやら俺はもうしばらく、このティオ・プラトーという少女につき合う必要がありそうだ、と。

ティオの章　了

「で、実際にこちらに出向してくるのは……」
そう言いながらセルゲイは、ティオに視線を移した。
「はい、わたしです。何か問題でも？」
ティオはそう言って、セルゲイを見つめ返す。セルゲイは目を細め、何事か思案をしているようだった。
「正直なところ、こちらとしては、エプスタイン財団からの要請という時点で異例の事態だと考えています。さらに、出向してくる方がこうも若いというのは完全に想定外でしてな」
セルゲイの言葉に、あわあわと慌てだすロバーツ。こうなることも想定はしていたつもりだが、実際にクロスベル警察の人間に言われ、パニックになってしまっていた。
「あ、あの、では……」
ロバーツの狼狽ぶりはあえて無視し、セルゲイはティオに言った。
「ティオ・プラトー。君にひとつ質問がある。その質問いかんによっては、この話は断らせてもらうかもしれない」
ティオはセルゲイを見つめかえす。
「ティオで結構です。質問とはなんでしょう？」
セルゲイの細い目が、より細められる。
「君は何故、クロスベル警察に来たんだ？」
ティオはいくぶんかムッとした様子で答えた。

「先程も主任が言いましたが、魔導杖の実用試験で……」
ティオの言葉を、セルゲイは軽く首を振って遮った。
「それはエプスタイン財団の事情だ」
セルゲイの問いかけの意味が分からず、ティオは困惑した表情を見せる。
それを見て、セルゲイはゆっくりと言葉を紡いだ。
「君がここに来た理由だ。分かりづらいなら、君がここで何をしたいか、でもいい」
「わたしは……」
そこまで口にして、ティオは言葉を失った。
わたしは魔導杖のテストのためにここに来た。魔導杖の開発には初期段階から関わっているから、わたしがテストをするのは当然だ。
——違う、そういうことじゃない。
魔導杖のテストも、その場所にクロスベル警察を選んだのも、すべては自分だ。
だとしたら、何故わたしはこの場所を選んだのだろうか？
わたしはここで、何をするつもりだったのか？
分からない。
もうあの人は、ここにはいないのに。
ティオは押し黙る。その表情には、わずかにだが、悲しみの色がのっていた。

小説版 零の軌跡 四つの運命

田沢 大典
Illustration 松竜

ランディの章

特務支援課の入っているビルの一階。ロイドとエリィは、ティオを連れて台所へ向かっていた。夜中だというのに、データの打ち込み作業を続けようとするティオを、少し強引に誘って休憩させようとしていたのだ。

二人で夜の薄暗い部屋を歩くと、台所に灯りがついているのが見えた。

特務支援課の寮には、ロイドたち四人と課長であるセルゲイしか入寮していない。うち二人がここにいて、セルゲイは打ち合わせのために警察本部に出向いている。ということは、台所にいるひとりは消去法で容易に想像がついた。

ロイドたちは台所の中に入った。台所は複数人が使うことを想定していて、それなりの広さがある。やや古びてはいるが、シンクやコンロなどは消掃がいきとどいていた。そして部屋の中央付近には、テーブルがそなえつけられていて、ここで盛りつけなどを行う。支援課の男性陣は、飲み物を飲んだり軽食などを手早く食べる時に、ここで済ませてしまうこともあった。

そのテーブルにもたれかかっていたひとりの男が、陽気に手を上げてロイドたちを出迎える。

「よぉ、こんな時間におそろいとはな。どうした？」

「どうした、はこっちのセリフだよ、ランディ」

ランディはテーブルに置いてあったグラスを手に取り、ひと口飲んだ。中身は琥珀色の液体。おそらくは、酒の類なのだろう。ランディの顔も、心なしか赤みを帯びていた。

「部屋で飲もうと思ったんだが、つまみになるものを探してな」

そう言いながら、ランディはロイドの顔を見ていて妙案を思いついたようだった。

「なぁロイド、ちょうどいいからなんか作ってくれよ」

「なんかって……おつまみを？」

ランディに無茶ぶりをされて、困るロイド。

「そうそう！ 前に作ってくれた貝のバターソテーがうまくってなぁ。お前さん、料理の才能あるぜ」

ロイドにからむランディを見て、エリィとティオはふたり同時にため息をついた。

とはいえ、ロイドの料理の腕はちょっとしたものであることは、支援課の全員が認めていた。現にティオが休憩を取ろうと思ったのも、ロイドのある提案に釣られた結果である。

「ランディさん、残念ながらわたしの方が先です」

ティオは、ランディの言葉に反応した。

「先って、なんだよ？」

「ココアです。それを作ってもらうということで、休憩を取ることにしました」

「はぁぁ～？ ココアなんて、牛乳あっためて粉を溶くだけだろ？ そんなもん、ティオすけひとりで作れるじゃねーか」

「違います。ランディさんはココアの奥深さを1リジュも理解していませんね」

そうなのか？ と言いながら、ロイドの方を見る。ロイドは苦笑し、ホーローの手鍋をキッチンの戸棚から出しながら答えた。

「ココアパウダーと砂糖を少量の水で練るんだ。そうしないと、おいしいココアにならない。あと、隠し味で塩を少し加えることとかな」

「えっ、お塩？」

今度はエリィが不思議そうな顔で尋ねた。

「あぁ、少量の塩を入れた方が、甘みが増すんだ。不思議だろ」

「ロイドさんのココアはそれだけではありません。最後に、ホイップしたクリームをたっぷり乗せるんです」

そう言いながら、ティオは両手をあわせて目を閉じる。以前に飲んだ味を反芻しているようだ。

「コクが出て美味しくなるんだ。ただ、そうすると重すぎるから、牛乳の量を減らして、少し水を足すんだけどね」

そう言いながらロイドは、手早くココアパウダーや牛乳などの用意を始めた。

「なるほどねぇ。でもよ、それだけ手間暇かけるんなら、ついでにおつまみのひとつぐらい作ってくれても……」

なおもロイドにすがろうとするランディの目の前に、エリィがビーフジャーキーの袋を差し、にっこり微笑んだ。

「はい、どうぞ」

「へいへい、どうもありがとうございますっと」

少しふてくされながら、ビーフジャーキーを口に放り込むランディ。わざとらしく噛んでいるのは、おつまみを作ってもらえなかったことに対する当てつけだろうか。
そんなランディの様子を見て、ティオはいつものジト目で睨む。
「それにしても分かりません。何故自分の思考を鈍らせるような物をわざわざ飲むのですか？」
最初、何を言われているか分からなかったランディは、ティオの視線の先にあるのが、自分が手に持っているグラスだと気づいた。
「酒のことか？　そりゃあ、酒さえあればこの世は天国だからさ」
「単純すぎです」
ティオの言葉に、思わず苦笑するランディ。
「単純じゃなけりゃやってらんないのよ、人生ってやつは」
そう言ってグラスの中の琥珀色の液体を見つめ、グッとあおった。

目の前に広がるのは、赤茶けた世界。
土ぼこりが立ちこめる。これは、岸崩れと小屋の爆破で起きたものだ。土と硝煙が混じった焦げ臭い独特の匂いが、あたりにたちこめる。
そんな中、人々がそこかしこに倒れていて、その身体にはまだら模様が描かれていた。血だ。血があちこちに飛び散り、まだら模様となっているのだ。
倒れているのは、ボディアーマーを着こみ、銃器で武装した猟兵たちだ。その側には、数多の銃器が落ちている。応戦しようとし、むなしく倒れたのだ。身体に穿たれた無数の穴が、激しい撃ち合いを物語っていた。
だが、そんな光景は、ありふれたものだ。ただの猟兵団（イェーガー）のぶつかり合い。ただの殺し合い（ビジネス）。
そのはずだった。
倒れている人々の中にひとりだけ、あきらかに猟兵ではない服装の青年がいた。戦いの匂いをみじんも感じない普段着。その青年を抱きかかえる。
沈黙が耳鳴りとなって、痛い。
青年は息も絶え絶えといった様子で、その息づかいは荒いはずなのに、まったく聞こえない。
何故、と思ったその時、青年が手を伸ばした。何かを掴むように、こちらに手を伸ばす。

身体が勝手に動き、その手を握りしめる。顔を見ようとするが、何故かそこだけ、ぼんやりと霞がかかったように分からない。青年は必死に手を握りしめ、最後にひと言。
「ラン……ディ……」
ほとんど聞こえないほどのかすれ声でしゃべり、そして沈黙した。そのまま、糸が切れた操り人形のように、伸ばした手が地面に落ちた。本来するはずの、どさりという音は聞こえなかった。
だらしなく垂れ下がった頭。そこではじめて、青年の顔が見える。そばかすと、大きく見開かれた瞳。その瞳から光が消え、ガラス玉のようにあたりを映す。そこに映っていたのは、なにが起きたのか分からないという顔をし、頬を土と血にまみれたさせた、この世界のように赤茶けた髪の——

バッと身を起こす。
ハッ、ハッと荒い息づかいが耳障りだ。
誰だと思ったら自分らしい。
すぐに大きく息を吸い、吐く。
吸い、吐く。
それを五回ほど繰り返す。
深呼吸をしながら、あたりの様子をうかがう。
どうやらベッドの上らしい。部屋は暗く、ほとんど何も見えない。
息を整えてから、自分に語りかける。
俺は誰だ？　ランディ・オルランドだ。
ここはどこだ？　ベルガード門にある、クロスベル警備隊の施設だ。
今は何時だ？　外の明るさからして、おそらく明け方前。そろそろ日が昇る頃だ。
はぁ、とひとつため息をついてから、ランディは苦笑した。
「習い性ってのは、やなもんだぜ……」
飛び起きたランディが行ったのは、パニック時に行う状況把握のイロハだ。かつていた組織で、幼い頃からたたき込まれているので、こういう時にとっさに出てくる。
その組織は《赤い星座》という。ゼムリア大陸西部最強と言われる猟兵団のひとつだ。
猟兵団とは、ミラで雇われる傭兵団の中でも、荒事を得意とする集団を指す。戦争屋、などと揶揄するものもいる。《赤い星座》は、そんな猟兵団の中でも《西風の旅団》と並び恐れられる一大猟兵団だ。ランディはかつて、そういう組織に属していた。
寝間着代わりのTシャツが、汗でべとついている。とっとと着替えないと、と思ったその時、コンコンとノックの音がした。そしてドアごしに、若い女性のくぐもった声が聞こえ

ベルガード門は、クロスベル自治州とエレボニア帝国の国境沿いに立つクロスベル側の門である。門といっても、巨大な門扉が二国間を隔てているわけではない。二国間を隔てているのは、そびえ立つ断崖と、クロスベル側にある深い谷間である。クロスベル側から見ると、帝国側の高くそびえる断崖が進入を容易ならざるものとし、さらに深い谷間が阻んでいる。
　ベルガード門の正体は、地上二階、地下一階という石造りの建築物だ。その中にランディたち国境警備隊の事務局や居住区もある、いわば要塞のようなものだった。
　そして帝国側もベルガード門と似たような要塞を築き上げ、そのふたつの拠点を、巨大な鉄橋で繋いでいた。鉄橋は上下二層構造で、上部は徒歩や車両が通行でき、下部には鉄道のレールが引かれ、そのまま国境を越えて二国間を行き来できるようになっている。
　早朝のひんやりとした空気が、あたりを包む。
　門に向かって右手にある駐車場に、ランディたちクロスベル警備隊の人間が整列していた。みな、揃いのダークグレーのカーゴパンツに無地黒色のTシャツという動きやすい服装に着替えている。彼らの前には、直属の上官である二尉が立っていた。
　列の一番端にいたミレイユが、声を張り上げる。
「点呼！」
　一、二とキビキビとした返事の中にひとつ、
「は〜ち」
と返したのはランディである。ミレイユは直立不動のまま、横目でランディをにらみつけるが、だら〜っと立っている姿を見て、肩を落とした。
　点呼の後は、そのまま朝の訓練となる。体力作りのための持久走だ。現場を取り仕切るのはミレイユ曹長である。彼女は女性ながら、武術ではベルガード門詰めの男性隊員を押さえて一、二を争うほどの腕前なので、訓練の仕切りを任されるのは当然の流れだった。
　ミレイユのかけ声にあわせて規則正しく一定のペースで山道を走る。だが、ひとりペースを守りつつも、大あくびをしてダルそうに走っている人間がいる。言うまでもなく、ランディだ。
　一、二、一、二、と周りの人間が声をあげている中、ランディは小声でつぶやく。
「こんなことして、意味があるのかねぇ」
「オルランド軍曹！　声を出しなさい！」
　地獄耳だなぁ〜、と中ば呆れつつ中ば感心し、ランディはわざとらしく声を張り上げた。

「おいっちにぃ！　おいっちにぃ！」
　持久走やダッシュなどの訓練が終わると、短めの朝食の時間となり、それが終わればすぐに仕事である門の警備へと就く。
　ランディたちのいるベルガード門は、隣接する大国であるエレボニア帝国との国境に作られている。
　有事の際には最重要拠点のひとつとなるが、今は平時である。門は山間にあることもあり、大変のどかな雰囲気で、今日も日が昇り、気候もよくうららか。小鳥のさえずりなども聞こえる。
　だが、一年少し前までは、国境近くで大規模な軍事演習が行われており、一触即発の事態だった。今の平和は、不戦条約が締結されたおかげである。
　そんな平和な光景の中、ランディが門前に立っている。格好は訓練時のラフなものではなく、警備隊の制服だ。その格好は女性隊員とほぼ同じで、上半身はダークグレーを基調とした配色のシャツ。肩からは黒色のボレロがかかっている。頭にかぶるダークグレーのベレー帽も同じだ。違いは、スカートではなくパンツであること、胸元のショートタイの色が黒であること、ワインレッドのベルトの幅が狭いこと、ぐらいである。
「のどかだねぇ……」
　ランディが、気の抜けた調子でつぶやく。少し離れたところで立っているカーターなどは、大きなあくびをしている。
　これで、ランチボックスがあれば、まさにピクニックである。できれば、ブランデーが入ったスキットルがあれば最高だな、などとランディは考えた。
「ま、ピクニックする場所としては、ちょいと無粋なものが目に入るがな」
　そうつぶやいて、ランディは振り返り、門の向こう側に目をやる。そこには、帝国が築き上げた厳ついガレリア要塞がそびえ立ち、帝国のシンボルである黄金の軍馬の紋章が嫌が上でも目に入る。
　ランディはしばらく鈍色の要塞の壁を見つめていたが、ふいに目線を前に戻して、言った。
「腹減ったなぁ……」
　と、足音がして、そちらをのっそりと向くランディ。
「腹ペコなお前に朗報だ。交代の時間だとよ」
　しかし、ランディは喜ぶこともなく、ひとつ大きなため息をついた。
「交代してメシ食ったら、デスクワークか」
　ベルガード門に併設している建物には、事務所もある。ここでは、各自持ち回りでデスクワークを行う。業務日記の記

る。

「ランディ、大丈夫？」

　その声に、おう、と答えてベッドから起きてドアを開ける。扉を開けると、廊下の灯りが目に飛び込んで来て、思わず目を細めた。

「何か物音がしたけど……」

　扉の前に立ち、ランディに声をかけているのは、ランディと同年代の女性である。薄い栗色のロングヘアーは腰のあたりまで伸びていて、軽くウェーブしている。ハッキリとした顔立ちで、少し生真面目な印象を与えている。背筋はピッと伸びており、クロスベル警備隊の制服がよく似合っていた。制服はボレロと軽くスリットの入ったタイトスカート、それに足を覆うタイツが黒色で、シャツとブーツがダークグレーと、暗色でまとめられているが、胸元のショートタイ、そして幅広のコルセット状のベルトがワインレッド色をしており、適度なアクセントとなっている。頭部にはダークグレーのベレー帽をかぶり、彼女のキリリとした印象をより強いものとしていた。

「悪ィ、ミレイユ。寝ぼけてベッドから落っこちちまった」

　ランディはいつものくだけた調子で言い、あくびをひとつした。ミレイユと呼ばれた女性はあきれ顔をしたが、ランディがTシャツに下着姿だと気づくと、急に頬を赤らめ、視線をそらした。

「ん？　どうしたよ」

「……ふ、服ぐらい着なさいよ！」

　そこではじめて、自分の姿がどうなっているのか認識したランディは、ニヤリと笑った。

「ミレイユ曹長殿のエッチ」

「な……！　バカなこと言わないの!!」

　廊下に響き渡るような大声を出され、ランディが顔をしかめた。

「まだ就寝時間だろうが……」

　しかしミレイユはそんなことはお構いなしに、顔を赤らめたままだ。それは怒りなのか、羞恥なのか、あるいは両方なのか。

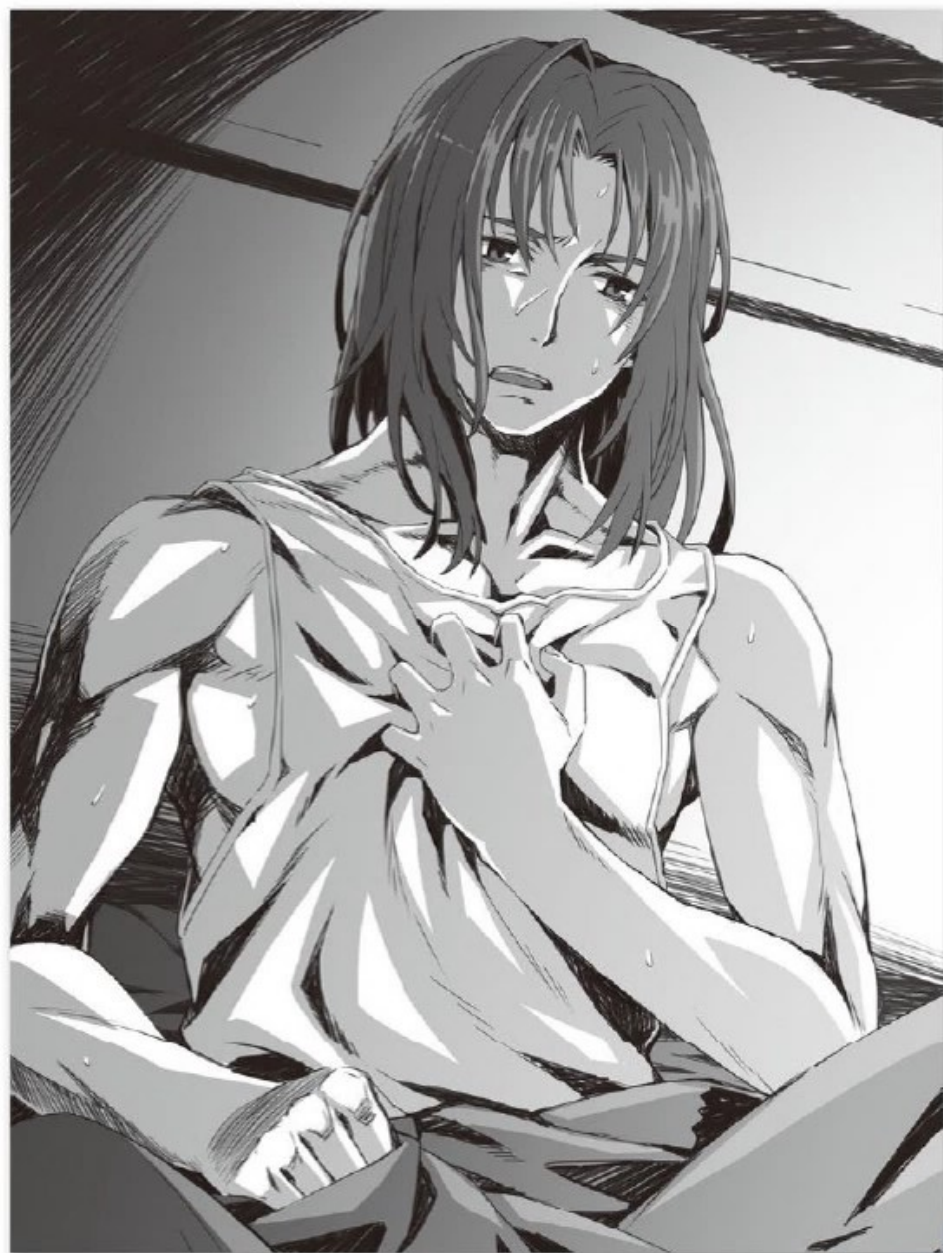
「勝手にしなさい！」

　そう言いながら、肩を怒らせて立ち去ろうとしたミレイユだったが、振り返り言った。

「あとね、就寝時間はもう終わり。十分後には点呼よ、急いで」

「へーい」

　後ろ手でドアを閉めながら、気のない返事をするランディ。ひとつ大きく伸びをして、自分の手で頬をぴしゃり、と叩いた。

「そんじゃ、今日も勤労にいそしむとしますか」

械や資材補給の要請など、クロスベル警備隊にも書類仕事を必要とする場面は意外と多いのだ。

事務所の中には机がいくつも並べられており、パッと見は中小企業の事務所と変わらない。数はそこそこ揃っているが、警備やら訓練やらで多くの隊員は出払っており、部屋の中にいる人間はまばらだ。

そんな部屋の中に、ミレイユが入ってきた。気づいた隊員のひとりが声をかける。

「あ、お疲れ様です曹長。……どうしたんです？　そんな浮かない顔をして」

「ちょっとね……」

ミレイユは気重な気分のまま、自分の席に腰掛けた。さっきまで上司である二尉に呼び出されていたのだが、そこで聞いてきた話に一点、気にかかることがあったのだ。思わず小声でつぶやく。

「今度はどんな無茶を言われるのやら……」

「はい？」

「ううん、なんでもないわ」

嫌な気分を払うように首を振り、ふぅと息をつく。そこで、部屋のわずかな異変に気がついた。

「ねぇ、ランディは？」

その声で、部屋の隅で作業をしていた男の隊員ふたりが、ビクッと肩を振るわせる。それを見て、ミレイユはイスから立ち上がり、彼らの元へと向かった。

「カーター、ラフィ、ちょっといいかしら？」

向かい合わせの机に座っていたふたりの隊員は、書類から顔を上げずに答えた。

「な、なんだい？」

「異常はないよ、ミレイユ曹長。うん、異常なし」

彼らは書類に向かい必死にペンを走らせている。

「それ、書類が逆さまよ」

「ひうっ!?」

あまり聞いたことのない悲鳴を上げ、カーターが書類を落っことす。ミレイユはそれを見てため息をつき、ラフィに向かって言った。

「……で、ランディはどこにいるの？」

ラフィは目を泳がせる。そんな彼の動きを読み切ったようにミレイユは次の句を告げた。

「いまなら、ふたりは見逃してあげるけど？」

ラフィは心の中でランディに謝りつつ、すっと天井を指差した。

「また屋上？」

ミレイユは呆れつつ天井を見上げ、まるで屋上にいるランディを見通すかのようにキッと睨んだ

その屋上では、うららかな日差しが照り、暖かい風が時折吹き抜ける。昼寝をするには絶好の陽気だった。
ランディは屋上に寝そべっていた。ベレー帽を顔の上に乗せて日射しよけとしている。屋上はコンクリートに覆われているので寝心地は良くないはずだが、ここでの昼寝には慣れている様子である。早朝に飛び起きた分はおろか、今夜の分まで、睡眠時間を確保しようとしていた。

ランディの夜は、たいがいクロスベル市街へと繰り出すところからはじまる。
急速に成長を遂げるクロスベル市街。その中でも歓楽街はもっとも急成長を遂げた場所のひとつだ。街が夕暮れに染まる頃から、あちこちの店先でネオンが灯りはじめ、行き交う人々の数が一気に増える。日が落ちる頃には、街は色とりどりのネオンで彩られた極彩色の世界へと変わっている。
そんな街角の一角、一本路地を入ったところにある酒場が、ランディたちの行きつけのお店である。かつては宿酒場だったが、今は改装し、二階部分まで座席として使っている。少し古めかしい内装は、今のクロスベルからすると時代遅れにも見えるが、懐かしい雰囲気を慕って来る常連客も多い。
ランディがここを知ったのは、カジノハウス《バルカ》のドレイク・オーナーに連れてこられたからだ。ランディ曰く「あの狸オヤジ、口は悪いがチョイスする店のセンスはいい」ということで、常連として足繁く通っているのだ。
グレーのタートルネックに、オレンジ色のパーカーという私服に着替えたランディは、同じく私服に着替えたカーターとラフィを伴って、店の一階の隅っこにあるテーブル席に座っていた。ここは、彼らのお気に入りの場所であり、よく陣取っているのだ。
「気持ちよく寝てたってのに、いきなりたたき起こして腕立て伏せ200回だぜ？　信じられるかよ」
そう言いながら、ビールがなみなみと注がれたジョッキをあおるランディ。半分近くを一気に飲み、どん、とジョッキを置く。少し赤くなった顔をカーターに近づけて恨めしそうに睨んだ。
「なのに、おまえらはおとがめ無しってか？」
「いやいやいや、俺らは関係ないですもん！」
「関係ない～？　んじゃ、もうカワイイ女の子は紹介しなくていいってことか？」
「そ、それは……」
カーターが困り顔でランディにすがる。カーターとラフィは、ランディが歓楽街で知り合った女の子を紹介してもらっていた。書類仕事を引き受けるのも、そういう事情があってのことだったのだ。ミレイユが知ったらただでは済まなさそうなので、ふたりとも昼間そのことは黙っていたのだ。
「ん～、どうしよっかな～」
ランディはニヤニヤと笑いながらビールを飲む。困ったカーターは、あわててラフィに話を振った。
「な、お前からもなんか言ってくれよ」
だが、当のラフィは既にでき上がりつつあった。
「ん～？」
「いや、『ん～？』じゃなくてよ」
「まあいいんじゃないかなぁ。曹長はランディにつっかかりたいだけだし」
なんで？　という顔をしてラフィを見るランディ。しかしカーターはうんうんとうなずいていた。話の矛先が変わったのをこれ幸いと、ラフィの話に全面的に乗っかる。
「確かに、ミレイユ曹長はそういうところあるよなぁ」
「おいおいおい、お前まで何を言い出すんだよ」
ランディはそう言いながら、イスにもたれかかりジョッキをおある。なみなみと注がれていたビールは、あっという間に残りひと口のところまで減っていた。
「で、ランディはどうなんだい？」
酔っ払ったラフィが、とろんとした口調で尋ねる。何が、とはミレイユのことだろう。ランディはしばらくジョッキの中のビールを見つめていたが、一気に飲み干して言った。
「そうだな……俺に飲み比べで買ったら教えてやるよ！」
また始まった、とカーターは思った。ランディは酔うと、何かにつけて飲み比べの勝負绪をしたがるのだ。
しかし、ラフィの方はやる気マンマンだ。すでに大声で給仕のお姉さんを呼びつけていた。
「お姉さ～ん、テキーラ、グラスで3つね」
「おいおい、ビールじゃなくていいのか？」
「なんだいランディ、今日はずいぶん弱気だね」
ラフィの挑発に、ランディはニヤリと笑った。
「言ったな？　この俺にテキーラで勝負をかけようとしたこと、後悔させてやるぜ」
言いながら、腕まくりをするランディ。頭を抱えるカーターと、テキーラのグラスをうれしそうに受け取るラフィを見ながら、ランディは思っていた。
こいつらとなんも考えず飲むのが一番ラクだわ、と。
「それじゃ行くぞ、かんぱーい！」
チン、と3つのグラスが鳴り、ランディはテキーラを一気に胃に流しこんだ。

ベルガード門近くへと走る導力バス。その最終便に乗っていたランディは、ウトウトしているところを運転手の案内の声で起こされた。

あわててバスを降り、導力灯ひとつがぽつんとついているバス停に立つ。導力バスが走り去ると、あたりは静寂に包まれた。

ベルガード門の門前までいく導力バスの路線もあるのだが、かなり早い時間で最終便が出てしまう。ランディが飲んで帰る頃には、だいたいいつも終わっているので、こうして別の路線の導力バスに乗って、あとは歩きで帰るのが常だった。

ちなみにカーターは酔いつぶれたラフィを伴って、先にベルガード門へと帰っていた。ランディはひとりで飲み直して、この真夜中に帰ってきたのである。

そのまま無言で、ベルガード門へと向かって歩き出す。あたりは暗いが、夜目はきくし、なにより両側にこんもりとした森があるので、道を間違えることもない。

このあたりまで来ると、市街のネオンも遠く届かない。代わりに頭上には、満天の星空が広がっている。

その星空を見ながら、ランディは昔を思い出していた。《赤い星座》にいた頃の自分を。

あの頃は、こうやって星を眺めて綺麗だと思うこともなかった。ただ生きるために生き、生きるために殺していた。

命を共にした仲間もいた。何人かは仕事の最中に死んでいった。だがそれも、悲しいとは思わなかった。生きるとは、いつか死ぬことなのだから。

だが、あの日。ひとりの人間の死を見て、分からなくなってしまった。それまではなんの疑問も持たずに過ごしてきた、猟兵という生き方。戦って戦って、いつか殺される日々をおくること。それに、いったいなんの意味があるのかということを。

あれから何年になるだろう、と数えようとして、ふっと笑った。そんなことをしても、何の意味も無いことに気づいたからだ。

猟兵団を抜けだし、あちこち流れ歩いた。中には居心地良い場所もあったが、ここにずっととどまっていいものか、そもそもどこに行きたいのか、それが分からず、ずっとさまよっていた。

今いるクロスベル警備隊に来てからは、およそ一年になる。食べることにも、寝るところにも困らない。一緒に働いている連中も気の良い奴らばかりだ。居心地の良さなら、今までいたところでも一番と言ってもいいかもしれない。

だが、ここに骨を埋めるつもりはない。というか、そんなことは自分にはできないと知っているのだ。俺の居場所はここではないのだから。

俺の居場所？　そんなもの、この世に存在するのだろうか？

夜の冷えた空気を吸い込み、酒混じりの息をゆっくりと吐く。それだけで、身体が冷えていくのが分かった。

この真っ暗な道は、まるで自分の人生のようだ。ただ暗く、ただ進むしかない。そしてさまよい歩き、いつか歩けなくなり、道ばたでのたれ死ぬのだ。

と、視界の端に光が見えた。ランディは反射的に身構え、その光の正体を探る。直接光を見てしまっては夜目が利かなくなるので、その光の周りを観察する。

どうやら獣の類ではないようだ。だとすると人だろうか？

誰何するか考えているうちに、向こうから声がした。

「ランディじゃないの」

「なんだ、お前かよ」

聞き慣れた声に、張り詰めていた緊張を一気に解く。

導力ランタンを持って現れたのは、警ら中のミレイユ曹長だった。

「なんだとはなによ」

そういいながらミレイユはランディの傍らに近づき、鼻を鳴らした。

「やっぱり飲んでる」

「非番なんだから、そりゃ飲むだろうが」

「やっぱりこっちを見回り担当にしてもらって正解ね」

そういえば、とランディは気づいた。今日のミレイユは門前の警備担当だったはずだ。ということは、わざわざ自分のために配置を変わったらしい。まったく面倒見のよろしいことで、と軽口を叩こうとしたら、ミレイユが言った。

「どうせ酔っ払って、迷子にでもなってるんじゃないかと思ってたところ」

迷子、という単語に、ふっと笑みがこぼれた。今の気分を現すのに、これほど適切な単語もなかったからだ。

「確かに、俺はずっと迷子なのかもしれねぇな」

「え？」

ランディの言葉の意味が分からず、尋ね返すミレイユ。そのミレイユの肩を、ランディはポンと叩いて歩き出した。

「まぁでも、お前さんみたいなのが道を照らしてくれるんなら、悪くないかもな、案外」

ふとランディは思った。たまにこうして、自分のどうしようもなく真っ暗な人生を照らしてくれる灯りがあるのなら、せめてそこまでは歩いてみよう、と。

しかし、言われた方のミレイユは、ただ首を捻るばかりだった。

そんなミレイユにランディは声をかける。

「おーい、戻んなくていいのか？　置いてくぞ」

「あっ、ちょっと！」

そう言ってミレイユはランディに追いつき、並んで歩き始

めた。

それから数日後。今にも雨が降りそうな曇天と肌寒さの中。ベルガード門の駐車場に、クロスベル警備隊の隊員たちが全員集合し、三列になり整列していた。

彼らの前、小さな鉄製の台の上にいるのは、クロスベル警備隊の司令だ。年は四十歳代後半といったところで、小太りな身体を警備隊の制服で包んでいる。その制服には、司令の証である階級章があり、その横には色とりどりの勲章が多数つけられていた。その様子を見てランディは、自己顕示欲が勲章に形を変えただけだ、などと思った。

司令といえば、隊内では現場にはほとんど顔を出さないことで知られている。普段はクロスベル自治州議会の議員たちとのコネクション作りに奔走していることは、公然の秘密だった。

そんな司令が、なぜ今日に限ってここに来ているのか？　それは、彼の斜め後ろで警備隊を見守る、数名のスーツ姿の男たちが原因のようだった。

ランディの横に並んでいるカーターが小声で囁く。

「おい、あそこにいるの、帝国派の議員じゃないか？」

その声に、ランディを挟んで反対側にいたラフィが答える。

「確かに、クロスベルタイムズで見たことあるな」

「それじゃ、この招集は……」

「おおかた司令が、議員様にいいとこ見せたいために視察でもしてもらおうって腹だろ」

ふたりのやりとりを聞いていたランディが、興味なさそうにつぶやいた。

「朝礼なら、さっきやったばっかりじゃんかよ……」

しかも、司令は無理矢理全員を招集した。本来ならば門を警備するべき人員まで、ここに並んでいる。これでは本末転倒だが、司令の命令とあれば誰も逆らえない。ミレイユが数日前、上官に呼び出されて憂鬱な顔をしていたのは、このことを聞かされていたからだ。

上がアホだと、下っ端は苦労するねぇ……などと、ランディは他人事のように内心でつぶやいた。

「気をつけーっ！」

二尉のかけ声にあわせて、勝手に身体が動く。条件反射というやつだ。わんこかよ、などと思うが、こういう時は脳みそを使わなくてよいので、逆にありがたい。

「捧ーげー、銃！」

号令と共に、肩にかけていたアサルトライフルを手に持ち、右手で銃床を、左手で銃身を持ち、銃口を空に向けた状態で捧げる。隊員たちの一糸乱れぬ動きに司令は満足そうに目を細め、端から順に隊員たちを眺めた。

こんな相手に恭順の意とやらは捧げたくないねぇ、とランディは内心で悪態をついていた。すると、隊員たちを順に眺めていた司令の視線が、自分のところでピタリと止まり、その表情がどんどん険しくなっていく。

心の声が聞こえでもしたのだろうか？　だとしたら、我らが司令殿は読心術を身につけていることになる。魔法(アーツ)かなにかだろうか？

ランディがそんなことを考えていると、司令が台の上から降りて、ランディの方へ向かってズカズカと歩いてきた。ランディは二列目だったので、一列目と二列目の人間を鷹揚な手つきでどかせる。そして、ランディの目の前にやってくると、不機嫌そうな表情で言った。

「貴様、名前は」

「はっ、クロスベル警備隊、ベルガード方面部隊所属、ランディ・オルランド軍曹であります！」

「オルランド軍曹、ひとつ尋ねたいことがあるのだが」

司令はランディの手元をにらみつつ言った。

「君が手にしているそれは、何かね？」

「はっ、スタンハルバードであります！」

ランディが手にしていたのは、他の隊員の持つアサルトライフルではなく、スタンハルバードだった。通常の斧と違い、刃の近くに導力ユニットが取りつけられていて、導力を打撃力に変換することでより大きな威力を与えるようにできている。だが、いま司令が問題にしているのは、打撃力ではなかった。

「軍曹、君以外は全員ライフルのようだが？」

「はっ、そのようであります」

ランディの返答に、隣にいたラフィが思わずプッと笑ってしまう。が、司令にギロリと睨まれ、縮こまってしまった。

「何故君はライフルでないのかね!?」

その言葉に、ランディは一瞬だけ険しい表情を浮かべた。まるで、何かの痛みに耐えるように。しかし、すぐにいつもの表情に戻ると、しれっとした調子で言った。

「はっ、自分の好みではありませんので」

「なっ……！」

狼狽するに、今度はあちこちから忍び笑いが起こる。しかし、司令の怒声がそれをかき消してしまった。

「どど、どういうことだ！　あれは帝国の最新モデルだぞ！　私の尽力で導入が決まったようなものなんだぞ！」

ランディがライフルを持っていないことに関する怒りは、そのあたりも関係していた。このライフル、彼が懇意にしている自治州議会のハルトマン議員が「警備隊にも最新の装備を」ということで帝国・ラインフォルト社製のアサルトライフルの購入を強く勧め、結果として導入されたものである。

視察に来ている帝国派の議員の手前、全員がライフルを持っていないとメンツに関わるのだ。
　ちなみに、司令は最新式だと言っていたが、実際にはだいぶ古い設計のものを、多少手を加えて型番だけ新しくしたものである。少し考えてみれば、国境を接する国に自国の最新式の武器を売るはずがないのだが、そのあたりのからくりを彼はまったく聞かされていないようだった。
「はぁ……すんません。でもなんか性に合わないもんで」
「しょ……!?」
　またも絶句する司令に、またも忍び笑いが起こる。しかしミレイユなどは、この成り行きをハラハラとした様子で見守っていた。そんなミレイユの心配などまったく知らず、ランディは続ける。
「銃って、なんかコソコソしてる感じがするっつーか。あ、でも大丈夫っす！　自分、撃たれる前に敵の懐に飛び込んで、バッタバッタとなぎ倒しますんで」
　そう言って、得意そうにスタンハルバードを掲げる。大の大人が両手で支えるのも大変なこの武器を易々と扱うあたり、ランディの実力が垣間見えるのだが、残念ながら司令はその実力を見抜く能力を持っていなかった。
「そういうわけなんで、ライフルの代わりにこれじゃ……ダメっすかね？」
　申し訳なさそうに言うランディ。本人は謝っているつもりなのだが、結果として司令の神経を逆撫でするだけだった。
「くだらない言い訳など聞きたくはないっ！　オルランド軍曹！　至急自分のライフルを持ってこい！　これは命令だッ！」
　司令はこめかみに青筋を立て、泡を吹かんばかりに口から唾を飛ばして怒鳴る。そのあまりの形相に普通の人間なら引いてしまうところだが、ランディは顔色ひとつ変えずに答えた。
「あー……すんません、ライフル、なくしちゃって」
　ランディのその言葉を聞いた瞬間、司令の顔が熟れたトマトのように真っ赤になった。ふとランディは、トマトジュースで作られたカクテルであるブラッディマリーが飲みたいな、などと考えた。
「貴様は、クビだぁぁあーーーっ！」
　の金切り声が響き渡り、他の隊員たちがギョッとした表情で司令とランディを見ている。だが、ランディの心の中はとても平静だった。
　仕方ないか。ま、いつかこんな日が来るだろうと思ってたし。
　ふう、と何かに区切りを付けるようにため息をひとつつく。
「じゃあま、そういうことで」

　そのままゆったりとした足取りで、ランディは自室へと歩き出した。
　あたりはざわざわとざわめくが、司令の手前、誰も動き出せない。そんな中をランディは悠然と歩いた。
「ランディ！」
　背中に声がかけられる。確かめるまでもない。聞き慣れたミレイユの声だ。おそらく引き留めて、なんとか謝らせようというのだろう。だが、そんな気分にはなれなかった。
　反発心とか、そういうのではない。ただ一度でも『ここにいるべきじゃない』と感じてしまった以上、静かに身を退くのが、お互いのためだと知っているからだ。
　だからランディは、ミレイユに感謝の気持ちを込めて、前を向き歩いたまま、ただ手をひらひらと振った。

　ランディの処分には、結局四日ほどを必要とした。
　クビと言われたものの、結果的には出願除隊という形に治まった。懲罰除隊を出すことはクロスベル警備隊の名前を傷つけることになる、というメンツを重視した結果だった。
　だが、これはランディにとっても朗報だった。懲罰除隊と違い、出願除隊ならば除隊金が出る。当座の生活には困らないのは正直ありがたかった。
　いつも街に繰り出す時の私服に着替えたランディは、部屋を見渡した。自分のベッドの上は綺麗に片づけられ、大きなショルダーバッグがひとつ置かれている。あちこち流れ歩く者としては、荷物はこれぐらいに抑えておくのがよいのだ。
　部屋の中で大きくのびをし、息をつく。そのままバッグを肩にかけ、部屋を出て行こうと扉を開けた。
　すると廊下に、制服姿のミレイユ曹長が立っていた。
「ずっとここで待ってたのか？　入って来りゃよかったのに」
　しかしミレイユはそれに答えず、じっとランディの顔を見た。その真剣さに、一歩身を退いてしまう。
「おいおい、そんな怖い顔すんなって。あ、もしかして俺をなぐさめに来てくれた？　『ランディ、私、あなたと離れたくない！』とかなんとか言っちゃって！」
　ランディが茶化しても、ミレイユは何も言わない。ランディは少し困った顔をして、言った。
「……今まで、世話になったな」
　その言葉に、ミレイユの顔がキッと厳しくなる。まるで、何かをこらえているかのような表情だった。ランディはそのことには触れず、そのまま立ち去ろうとする。
「ランディ、今すぐ司令室に行きなさい」
　意外な言葉に、足を止めるランディ。司令室だって？　書類の手続きはすべて済ませたはずだが。そんなことを考えていると、ミレイユが促した。

してやがるんだ、などとつまらないことがランディの頭をよぎる。
「こんなに広い部屋を用意する必要があるとは思えないのだけど」
ソファーに座り、部屋を見回しながら、ソーニャが言葉を漏らす。つられてランディも、ぐるりと部屋を見渡す。
「自分たち下っ端にはとんと縁が無かったんで、なんとも……あぁ、掃除当番のやつは、ムダに部屋が広くてめんどくさいって愚痴ってたっけ」
ランディの言葉に、まあ、と少し驚くソーニャ。
「私の部屋を掃除してくれる隊員も、そんな風に愚痴っているのかしら」
「いや、それはどうかわからないっすけど……」
ちなみに、タングラム門にあるソーニャの副司令室は常に整理整頓されている上、掃除までソーニャがしてしまうらしく、「いったいどこを掃除すればいいのか」という逆の悩みを隊員たちが抱えているらしい。
ランディはまだ部屋を見回していたが、あることに思い至って、ソーニャに向かって愛想笑いを浮かべた。
「でも、こういう部屋には、年代物の酒瓶が置かれているのがお約束かなって」
「残念。隊内での飲酒は基本禁止よ。それは司令でも同じ」
「ハハ、やっぱそうっすよね」
優しい口調ではあるが、ぴしゃりと否定されてしまっては二の句が継げない。このままソーニャ副指令と他愛もない話をするのもよいが、相手も暇人ではないだろう。ランディから話を切り出すことにした。
「で、俺になんの用っすか？　不敬罪くらった下っ端なんぞと話しても得なことがあるとは思えないんすけど」
ランディの言葉に、ふと口元が緩むソーニャ。
「不敬罪、とは面白い言い回しね」
「ま、正確には違いますけど、似たようなもんじゃないっすか」
「私の立場としては、肯定しかねるのだけど」
などと言っているが、暗に司令の横暴ぶりを肯定しているようなものだ。物静かな語り口だが、なんとも食えないな、などとランディは内心で苦笑した。
「実は、あなたにひとつ提案があって来てもらったの」
さあ来たぞ、とランディは身構えた。どんな無茶を言われるか、次の言葉を待つ。
「単刀直入に聞くわ。警察に興味はある？」
「……は？」
思わず間抜けな返事しかできなかった。
「ケーサッつーと、犯人追っかけたりする、あの」
「ええ、そうよ」

ランディと警察の縁といえば、酔っ払いのケンカに巻き込まれた時に仲裁してもらったとか、その程度である。あとは、酒場でクロスベル警察の悪口を聞いたぐらいか。あちこちの街を渡り歩いてきたランディだったが、警察機構がこれほど『役立たず』と烙印を押されている街は珍しいな、と感じていた。
「私の知人が、クロスベル警察で警部をしていてね。彼が今度新部署を立ち上げることになったの」
「はぁ。でも俺、捜査官なんて無理っすよ？　第一、資格もないし」
「その点は問題ないわ。新部署は警察のイメージアップのために作られる特別な課だから」
「イメージアップ？」
警察のイメージアップのための部署に、自分が行く。ますます訳が分からない話だ。どこの馬の骨ともしれない自分が『警察の代表やってます！』という顔をして、街中でビラでも配るというのだろうか？
ランディの疑問は顔に出ていたらしい。ソーニャは薄く微笑んだ。
「別にあなたに、人気取りのために愛想笑いを振りまいて欲しいわけではないわ。……もっとも、あなたなら案外いけそうだけど」
「はは……できなくはないっすけど、どうせなら相手は女性限定にしたいかなぁ～」
「でしょうね」
そう言ってうなずくソーニャ。
「とにかく、新設されるその課には、さまざまなジャンルのスペシャリストを揃えたいらしいのよ。それで、戦闘のスペシャリストとしてあなたを推薦しようと思い立ったわけ」
「俺を？」
「合同演習の時に見せてもらったけど、あなたの戦闘技術は警備隊隊員の中でも飛び抜けているわ。さすがダグラス教官から教えてもらっただけはあるわね」
ダグラス教官とは、《鬼のダグラス》として知られている、警備隊きっての実力派だ。警備隊きってのホープとして期待されていたが、司令に疎まれて新兵訓練などの閑職に回されていた。
「買いかぶり過ぎですって。ダグラスの兄さんに比べたら、俺なんて」
「謙遜ね。……あなたが本当の本気を出せば、ダグラス教官も圧倒できると踏んでいるのだけど」
そう言ってソーニャは、何かを見透かすような瞳でじっと見つめた。ランディはどきりとして視線をそらす。
「ハハ……それこそ買いかぶり過ぎですって」

「返事は？」
「了解！」
ランディは敬礼をし、そのまま手をひらひらと振って、司令室に向かって歩き出した。
ミレイユはその背中を見つめていた。ランディの姿が通路の角を曲がり、見えなくなるまでずっと。

ランディが向かった先である司令室は、ベルガード門に併設されている建物の二階部分にある。一応司令が来た時に使うための部屋となっているが、めったに司令が来ないので、ほとんど使われることがない。ランディも一度入ったかどうか、というぐらいには印象が薄い。
しかし、いったい誰が自分を呼んでいるのだろうか？　直属の上司である二尉への挨拶はすでに済ませている。まさか司令が、と思ったが、自分でクビにした相手をわざわざ呼ぶだろうか？　と考えて、あの司令が自分のためだけにベルガード門くんだりまで顔を出すはずがない、と思い至った。だとすると本当に誰が呼んでるのか思い当たらないな……などと考えていると、司令室の前に着いてしまった。
「ま、会えばわかるさ」
そうつぶやいて、司令室のドアをノックする。
ドア越しに聞こえた「どうぞ」という言葉は、女性のものだった。はて、いかな美女がお出迎えしてくれるのだろうか……などと悠長なことを考えながら、ドアを開けて部屋の中に入る。
司令室の中は赤い絨毯が敷き詰められ、豪奢な雰囲気だ。置かれている家具も、隊員にあてがわれている簡素なものと違って、いかにも高そうである。入って右手には、調度品として高価そうな絵画や壺や大皿が並べられている。この部屋の持ち主である司令の趣味なのだろうが、色合いも年代も制作者もバラバラで、ただお金に任せて集めたのがひと目で分かる。持ち主のセンスの無さをそのまま表しているような、醜悪なコレクションだった。
部屋の正面の壁には、クロスベル警備隊の紋章が大きく入った旗が部屋に飾られていた。その前に、大きめなデスクが置いてあり、それに見合うチェアがしつらえてある。ランディを呼び出した人物は、そのデスクの傍らに立ち、書類に目を通していた。
その姿を見て、ランディは驚いてしまった。彼女は、ここではなくタングラム門で執務を取っているはずだからだ。
クロスベル警備隊の制服を着ているが、一般隊員のものとはいくつかデザインが異なっている。一番特徴的なのは、ワインレッドの幅広のベルトをしていないこと。そしてブラウスの裾部分が、大きく斜めにカットされていることだ。これ

は、警備隊の中でも佐官以上の女性隊員にしか与えられない特別な制服である。
やや暗めのライトブルー色の髪をショートボブでまとめていて、襟足はやや肩にかかっている。薄く化粧をした顔立ちは理知的で、アンダーリムのメガネがその印象をより強調していた。その端正な顔を向け、彼女は言った。
「ご苦労様、オルランド軍曹」
「はっ！」
自然と身体が反応し、敬礼をしていた。先程ミレイユにしたのとは明らかに違う、緊張感を伴ったものだ。
この女性は、ソーニャ・ベルツ一佐。クロスベル警備隊副指令である。立場的には彼女と並ぶ地位の人間はいるが、その能力を認められ、実質的な警備隊のナンバー2と言われている。指揮官としてのカリスマなら、ナンバー1だという呼び声も高い。普段はタングラム門に詰めつつ、各地の警備隊に指示をする才女である。
ランディはタングラム門部隊との合同演習の際に、彼女と会っている。といっても、指揮官と一隊員としてだが。演習でランディたちベルガード門部隊は、彼女が指揮するタングラム門の精鋭部隊に完敗した。結果、ベルガード門部隊はソーニャ直々に特訓を受けることとなった。その特訓であったある出来事で「怒らせるとこれほど恐い女（ひと）はいない」とランディは思い知ることとなり、先のような態度につながったのである。
しかし、とランディは考える。彼女はタングラム門詰めで忙しいはずだ。なぜベルガード門に来ているのだろうか？
ランディの敬礼に、自身も敬礼で返答するソーニャ。だが、ふと表情を緩めた。
「考えてみれば……あなたはもう、隊員ではないのよね」
「あ」
言われるまでそのことに気づかなかった。その自分のマヌケさに、思わず苦笑するランディ。
「ごめんなさい、ついクセで」
そういってわずかに微笑む。その自然な表情に、思わず見とれてしまう。名指揮官の意外な一面を見て、緊張していた気分が一気に緩む。
「いや、敬礼したのは自分なんで、気にしないでください」
頭をかきながら、気まずそうに言うランディ。口調はだいぶくだけていたが、ソーニャは気にする様子もなく、そう、とだけ答えた。
「立ち話もなんだから、そこに掛けなさい」
「そんじゃ、お言葉に甘えて」
ソーニャの言うまま、室内にあるソファーセットに腰掛けた。自分の部屋にあった固いイスと違って、なんてふわふわ

「私、人を見る目はあると思っているのだけど」
「男を見る目は、別じゃないっすか？」
　いつもの調子で軽口を叩く。こうでもしないと、いつもの自分のペースを保てない。まったく、ソーニャには調子を狂わされっぱなしだと、ランディは内心でひとりごちた。
「しかし、戦闘のスペシャリストねぇ……」
　確かに自分は、戦闘のスペシャリストと言ってもいいだろう。警察でも格闘術ぐらいは教えるが、それは犯人逮捕のための制圧力でしかない。相手が武装した凶悪犯だと、自分のように突撃し、突破し、相手を打破するための圧倒的な力が必要になる。
　といっても、殺しの技術まではいらないと思うが。
「どうかしら？　いい話だと思うのだけど。ランディ・オルランド」
　フルネームで呼ばれて、我に返った。ソーニャは変わらずソファーに座り、こちらを見つめている。
「できたばかりの部署でしがらみもない。上司は……まぁ、ちょっと変わっているけど優秀な男で、窮屈に感じることはないでしょう。おまけに、警備隊と同じく寮も完備よ」
　確かによい話ではある。次の仕事先が用意されている上に、その仕事は警察だ。宮仕えは信用がある。保証がない身分では、今のクロスベル市では住居を借りることすらままならないだろう。しかも、その住居まで用意されているとなれば、飛びつかない手はない。
　だが、うまい話があってそのまま乗っかるほど、自分は青二才でもお調子者でもないつもりだった。
「ひとつ質問があるんすけど」
　どうぞ、というソーニャの言葉を待って、ランディは続ける。
「どうして俺にこの話を？」
「簡単なことよ。タイミングよくあなたが辞める時に、警部から声がかけられただけ」
「……本当に？」
　ランディの眼光が鋭くなり、目がスッと細くなる。だが、そんなランディの変化にも動じず、ソーニャは続けた。
「あなたとその警部、両方まとめて恩が売れるチャンスなの。これを逃す手はないでしょう？　それと、先程も言った通り、人を見る目はあると思っているから」
　そう言って口元に笑みを浮かべた。ランディはしばらくソーニャの顔を見つめていたが、急にフッと笑った。
　これだけべっぴんの女神様なら、騙されてみてもいいかもしれない。それに、そもそも行くあてもなければ、生きる目的もない。ただ流されるだけなら、面白そうなほうに行くさ。
　そうランディは思った。

「ま、他にアテもないし、お世話になるとしますか」
「そう、よかったわ」
　ソーニャは立ち上がり、デスクに置いてあった書類をランディに差し出す。
「これが推薦状。クロスベル警察の受付に行ってこれを見せれば、後は向こうで手続きを進めてくれます」
「へーい」
　ランディは推薦状を受け取り、書類を眺めた。
「特務……支援課」
「そう、それが、あなたが配属されることになる、新しい課よ」
「特務支援課」
　もう一度口にしてみる。なかなか悪くない響きだ。特務って響きは、純粋にカッコイイ。支援課ってあたりは微妙だが。
「それじゃ、さっそくクロスベル警察にでも行ってみますかね」
　ランディは勢いをつけて立ち上がり、推薦状を折りたたんでポケットにしまった。
「あなたの新しい生活が実り多きものとなるよう女神（エイドス）に祈っておくわ。それから、今までクロスベル警備隊に尽くしてくれた事、感謝します」
「ま、メシと寝るところを提供してくれる分ぐらいはがんばったつもりっすけど。それから、紹介マジで助かったっす」
　ども、といってひょいと頭を下げるランディ。
「そんじゃ」
　そう言って、軽いノリのままドアを開け、出て行った。
　ソーニャは閉じられたドアを見つめて、ふっと笑みをこぼした。
「そのお礼の言葉は、あなたの同僚に言うべきじゃないかしら」
　いなくなったランディに向かってそうつぶやく。
　ソーニャがセルゲイに声をかけられ、特務支援課向きのメンバーを探していたのは事実だが、ランディのことを知ったのはミレイユのおかげであった。ランディがクビと言われてからの数日間、彼女は各方面の副指令クラスの人間に、処分の取り消しを求める嘆願書を送っていたのだ。そのうちの一通がソーニャの元に届き、彼女がこうして救いの手を差し伸べる結果となった。
　それに、ソーニャにとってもランディを警察内部に送り込むことは都合がよかった。セルゲイと共に、現場レベルで警察と警備隊のコネクションを作っておくことは、あれこれとプラスになることが大きいと感じていたからだ。彼女の考えは、程なくして起きるクロスベル自治州各地での魔獣による事件で早速証明されるのだが、それはまた別の話である。
　ソーニャは心の中で、セルゲイの作ろうとしている特務支

援課が、その目的を果たせることを祈りつつ、仕事へと戻っていった。

ランディは外に出て、ベルガード門の正面に立った。門の向こうに見える、見慣れた帝国の要塞とも今日でお別れだ。ランディは要塞に描かれた帝国の紋章を見ていたが、踵を返して、クロスベル市街へ向けて歩き出した。

外は天気もよく、うららかな日射しが降り注いでいる。ピクニックには絶好の陽気だ。ミレイユが出迎えてくれたあの夜、真っ暗だった道は、今は明るくてどこまでも見通せる。

ま、たまにはこんな日がないとな、などとひとりごちながら、ランディは足取りも軽く山道を歩いた。

これから先、数奇な運命を共にする仲間たちの元へと向かって。

ランディの章　了

小説版 零の軌跡 四つの運命

田沢 大典
Illustration 松竜

第五章 抗争の疑惑（前編）

支援課ビルの一階にある台所は、夜だというのにずいぶんと賑やかだった。このさほど広くないスペースに、支援課の四人が集まっているからだ。

それぞれの手には、飲み物がある。ランディは、ブランデーをストレートで。ティオは、約束どおりロイドに作ってもらったココアのホイップクリームのせ。ロイドとエリィは紅茶。これは、ロイドがココアを作っている間にエリィが淹れたものである。

ランディとティオは台所にある小さなテーブルにもたれかかり、エリィとロイドはシンクの側に立って、おしゃべりに興じていた。

「ココアの良い香り……私も紅茶じゃなくて、ココアにすればよかったかも」

「エリィさん、ひと口飲みますか？」

ティオがココアの入ったマグカップを差し出すが、エリィは緩やかに首を振って断った。

「口の中で紅茶の味とまざっちゃうと、ちょっとね」

確かになぁ、とランディが軽く笑った。

「ま、ティオすけにはアルコールもカフェインも、まだ早いってな」

ほろ酔いの顔のランディを、ティオがジト目で見つめる。

「ランディさんのように醜態をさらすぐらいなら、一生アルコールは飲みません」

「し、醜態って……！」

思わぬ反論に驚くランディ。その様子を見て、エリィがクスクスと笑った。

「おいおい、お嬢まで笑うことねぇじゃんかよ」

「ふふっ、ごめんなさい。でも、私もお酒は嗜まないから、ティオちゃんとさほど変わらない意見ね」

エリィの言葉に、ランディは大げさに天を仰いだ。

「まったく、なんて嘆かわしい。人生に極上の彩りを添える、美酒の味を知らないなんて勿体ないってのー！」

酔いのせいか、いつもよりアクションもオーバー気味だ。

「あら、味なら知っているわよ。お菓子の中に、お酒を使うものとかがあるじゃない」

「酒を使ったお菓子？」

「ええ。メジャーなところだと、チョコレートケーキの香りづけとか。あと、チョコレートの中にウイスキーが入っているものもあるわね」

エリィの説明に、感心したように膝を叩くランディ。

「チョコレートとウイスキーか。チョコが甘すぎなけりゃ、結構イケる組み合わせだな」

「香りを重視してる味つけだから、そんなに甘くないわ。言われてみれば、男性向けかもね」

いいねぇ、とのってくるランディ。興味津々といった様子だ。

「レミフェリア出身の有名なパティシエがやっているお店なのよ。以前、友人に連れて行ってもらったことがあるんだけど、みんなで、そこのお店に行くのもいいわね。ティオちゃん好みの甘いお菓子もあるし」

その言葉に、ティオも思わず目を輝かせる。

「……それはグッジョブな提案です」

「それじゃあ、今度のお休みにでも。ロイドもどう？」

「うん、いいんじゃないかな」

ロイドの答えを聞いて、ティオが「決まりですね」と言い、胸の前で手のひらをあわせた。喜ぶエリィたち。話は既に、どんなケーキがあるのか、まずどれを買うかで盛り上がっている。

しかし、ロイドは内心、別のことを考えていた。

自分たちは、各人さまざまな経緯を経て、この特務支援課という名の下に集まった。いわば、寄り合い所帯だ。生まれも育ちも違えば、長けている能力も違う。

にも関わらず、自分たちはひとつの『チーム』として、結構まとまっているのではないか。ロイドは最近そう思うようになっていた。

お互いがお互いを尊重し、信頼する。言葉では簡単だが、実際にはプライドやら能力差などがあって、簡単にできるものではない。しかし、自分たちは自然とそれができるようになりつつある、と感じていた。

組み合わせの妙というやつだろうか。もしこれを狙ってメ

ンバーを集めたとしたら、セルゲイ課長は相当の切れ者だな、とロイドは思った。

そして同時に、なんの経験もない自分がリーダーとしてなんとかやっていけているのは、彼らあってこそなのだ、そう認識した。

「じゃ、ロイドのおごりってことでひとつ。それでいいか？」

「あぁ、うん。……って、なんでそうなるんだよ!?」

考え事で上の空だったのをランディに見抜かれていたらしい。突然話を振られ、つい生返事をしてしまった。

「ロイドさん、ありがとうございます」

すかさずティオが援護射撃を行う。こういう時は、仲間のチームワークの良さが恨めしい。

ちょっと、とたしなめるエリィの声を聞きながら、ロイドは改めて思った。

前言撤回。このメンバーのリーダーをやるのは、やっぱりそれなりに苦労が伴う。

龍老飯店は、クロスベル市街に店を構える東方料理の専門店である。火と油が命の東方料理は、使う食材・調味料・調理法すべてが豊富で、かなりのバリエーションを誇る。龍老飯店は遠く東方から呼び寄せた料理人で本場の味を提供し、ファンも多い。

店内は広く、テーブル席とカウンターの両方を合わせれば、かなりの人数が収容できる。店内は東方風の飾りつけがされており、朱色がかった木材を基調としたカラーリングに、クロスベル地方ではあまり見られない意匠のついたてが置かれている。テーブルは大きく、六人ほど座れるほどの大きさだ。テーブルの上には、さまざまな東方料理が並び、湯気を立てていた。

そのテーブルに今、ロイドたち支援課の人間と、ひとりの女性が座っている。年の頃は二十代半ばだろうか。グレーがかったベリーショートの髪には、ゴーグルがヘアバンドの代わりのようについている。くりっとした大きな目は、彼女の旺盛な好奇心を表しているかのようだ。服装は灰色のタートルネックに、カーキ色のショートコートを羽織っており、パンツルックと相まって活動的な印象を与えていた。

彼女の傍らには、写真を撮るためのオーバルカメラが置いてある。聡い人間なら、それだけで彼女の職業の予想がつくだろう。

グレイス・リン。それが彼女の名前である。仕事は、報道誌クロスベルタイムズの記者。クロスベルタイムズは、事件や社会問題への鋭い切り口と、体制への批判も辞さないという姿勢が多くのファンの心を掴んでいた。

クロスベルタイムズは何度か警察批判も行ってきた。現に、ロイドたち支援課の初任務となった『ジオフロント少年救出事件』でも取材に来て、遊撃士のアリオスにおいしいところを持っていかれたロイドたちを面白おかしくかき立てていた。両者の関係は良好とは言えず、どちらかというと悪い方だ。しかし今は、こうして同じテーブルを囲み、東方料理に舌鼓を打っている。

「どう？　なかなかイケるでしょ」

グレイスが、肘をついた両手の上にあごを乗せたポーズで言う。それに、エリィが素直にうなずいた。

「確かに美味しいです。かなり腕の立つコックがいるみたいですね」

その横に座るティオは、ひたすら口を動かしていた。口にしていた肉団子をごっくんと飲み込み、ふぅ、と恍惚の表情を浮かべる。

チャーハンを掻き込んでいたランディも、うんうんとうなずき、レンゲを置いた。

「しかし、こんな美味い料理に酒がないなんてありえねぇぜ。なぁロイド、せっかくのおごりだし、ちょっとぐらい良いだろ？」

ロイドに向かって猫なで声を上げるランディ。そんなランディにあきれた様子でロイドが答える。

「駄目だって。今は仕事中なんだから、ケジメはつけないと」

すげない言葉を聞いて、ランディは不満げだ。

「はいはい。ったく、ウチのリーダーは固いねぇ」

それまでもくもくと食べていたティオが、ぽつりとつぶやいた。

「ランディさんが柔らかすぎるのではないかと……」

「そうね、さすがに仕事中にお酒はどうかと思うわ」

エリィにまで同意されては、ランディは立つ瀬がなかった。

「おまえら……」

そんな彼らを見ていたグレイスが、ふふっと微笑んだ。

「面白いわね～、あなたたち」

面白い？　と聞き返したランディに、うなずくグレイス。

「てんでバラバラな顔ぶれなのに、どこかまとまってる。なかなか良いチームみたいね」

そう言って、ニコニコと笑うグレイス。どうやらイヤミではなく、本心から言っているようだった。しかし、以前手痛い目にあっているロイドは、社交辞令としか受け取らなかった。

「それより、仕事の話をしましょう」

ロイドはなんとかイニシアチブを取ろうと、自ら話を振る。ここには、仲良くご飯を食べに来たわけではない。捜査に

行き詰まっていたロイドたちの前に現れたグレイスに、情報の取引を持ちかけられたからだ。彼女は、ロイドたちに『欠けたパズルのピース』を提供する代わりに、そちらの持っている情報をもらう、と言っていた。このままでは埒があかないと判断したロイドは、この取引に応じることにしたのだ。

「さっきひと通り話しましたが、旧市街での事件は、不良グループのサーベルバイパーも、テスタメンツも、身に覚えがないとのことでした。お互いにお互いがしかけてきた、そう考えているようです」

　ロイドたちはグレイスに会う直前まで、サーベルバイパーとテスタメンツの本拠地に乗り込み、彼らに事情聴取をしていた。

　といっても、一筋縄で話してくれる相手ではない。テスタメンツのリーダーであるワジにはさんざんからかわれ、サーベルバイパーのリーダー、ヴァルドに至っては、ロイドが彼にタイマン勝負を挑んで勝利し、ようやく話を聞き出した。

　だが、このあたりのことを話して、クロスベルタイムズに面白おかしく書かれてはたまったものではない。あくまで事情聴取の結果聞き出した、という筋書きにして、真実は伏せていた。

「ふぅん。彼らが素直に聴取に応じるとはねぇ……どんな魔法（アーツ）を使ったことやら」

　そう言いながらロイドを見てニヤリと笑う。どうやらグレイスは事情聴取でのやりとりを聞きたがっているようだ。ロイドはあわてて話を続けた。

「とにかく。あなたが持っている『欠けたパズルのピース』について、そろそろ話してくれませんか」

　身を乗り出して言うロイド。グレイスは、軽くしなを作って答えた。

「もし、イヤだ、って言ったら？」

　ロイドはいらだちを隠そうともせず、語気強く言った。

「グレイスさんのことを、今後一切信用しないだけです。お話をする機会も、今日で最後になるでしょうね」

　ロイドの様子を見てもなお、グレイスは口調を変えることはなかった。

「ウソウソ！　本気にしちゃやーよ。でも、その毅然としたところは結構いいわね～。優しげなマスクとのギャップがなかなかそそるって言うか～」

　ロイドはエリィたちの方を向き、さらりと言った。

「それじゃみんな、そろそろ捜査に戻ろうか」

　そう言って立ち上がるロイド。エリィとティオはそれに続いた。

「ええ、そうね」

「……ごちそうさまでした」

「ああん、冗談だってば～。パズルのピースでしょ？　ちゃんと話してあげるから～」

　脱力しながら席に座るロイドに向かって、ずっと席に座ったままのランディが笑う。

「ハハッ！　モテモテじゃん」

　そんなランディに向かって、ティオはいつものジト目を向けるが、ランディ自身は気づいていないようだった。

　居住まいを正したグレイスが、少し声のトーンを落として話を始める。

「あなたたち、『ルバーチェ』って知ってる？」

　その単語を聞いた瞬間、ロイドとエリィの顔に驚きが広がった。

「その名前は……」

　つぶやいて、その後の言葉を飲み込んでしまうエリィ。ランディとティオは、事情が分からないといった様子だ。

「なんだよ。ふたりとも、豆鉄砲喰らったような顔して」

　ティオは、ルバーチェ、という言葉をつぶやいて、何かを思い出したようだった。

「『ルバーチェ商会』……クロスベル市で認可された法人に、そんな名前があったような」

　ティオの言葉を聞いて、グレイスが微笑む。先程までの楽しげな雰囲気とは少し違う、押さえきれない好奇心があふれ出た表情だ。

「そう、表向きは認可された法人。だけどその実体は――」

　弁士のように間を取り、ロイドたちを見回してから次の言葉を続ける。

「昔からクロスベルの裏社会を支配している『マフィア』よ」

　今度は、ティオとランディが驚く番だった。

「なるほど……そういうのがいるって噂は聞いたことあるが」

　ランディの言葉を受けて、ロイドが答える。

「クロスベルに住んでいたら、嫌でも耳にする名前だよ」

「さまざまなコネクションを持っている組織、という話を聞いたことがあるわ。有力者ともつながりがあるから、警察も簡単に手が出せない、とも」

　エリィの言葉に、裏社会はどこもそんなもんか、とランディがつぶやく。ティオが話を戻そうと、グレイスに尋ねた。

「その『ルバーチェ』が、どうかしたんですか？」

　グレイスは顔を近づけ、小声でしゃべる。

「最近『ルバーチェ』の構成員が妙な動きを見せているらしいのよ」

「妙な動き……ですか」

　ティオの問いかけに、こくりとうなずくグレイス。

「何でか分からないけど、あちこち忙しそうに動き回ってるわ。それで私も暇を見て、色々調べてる最中ってわけ」

グレイスの言葉を聞いて、ロイドが腕組みをしてつぶやく。
「マフィアが忙しそうに動いている……」
どう考えても、よい予兆ではない。ロイドの表情に苦いものが走る。エリィはグレイスに、抱いていた疑問をぶつけた。
「貴女が旧市街に来ていたのも、もしかしてそれと関係が……？」
エリィの言葉に、グレイス以外の全員が驚く。言い当てられたグレイスは、微笑を浮かべながら肯定した。
「そういうこと。ある筋から聞いたんだけど、半月ほど前、マフィアの構成員が旧市街をうろついていたらしくてね。しかも、人目を避けるように質素な格好をしていたらしいのよ。……何かあると思わないかしら？」
最後の部分は、ロイドたちを見回しながらゆったりと言った。ランディとロイドは、目を合わせる。
「……匂うな」
「ああ、プンプンする」
エリィもうなずき、ふたりの言葉に賛同する。
「ほぼ同時刻に起こった、二件の闇討ち事件。ふたつの不良グループが同時に事件を起こすという、本来ありえない状況でしか説明がつかなかったけど、そこに新たな第三の容疑者が現れたわけね」
手詰まり感があった捜査に、一条の光が見えた。しかし、ティオが疑問を差し挟む。
「……でも、おかしいです」
その言葉に、みんなの視線が集中する。
「何故、マフィア組織が不良グループのメンバーをわざわざ闇討ちに……？」
「ああ、問題はそこだ。何らかの敵対関係があるなら、話は単純なんだけど……」
ロイドの言葉に、乗り出していた身をイスにもたれさせながら答えるグレイス。
「うーん、あたしの知る限り、そういったイザコザは今まで無かったんだけどね～。同じ暴力的なところはあっても、マフィアはプロだし、不良たちは所詮アマチュア……。利害が絡むわけでもないから対立する接点がないのよね～」
そこに関しての情報は、グレイスといえど持っていないらしい。暴力によって成り立つ組織は、普段からあちこちで暴力を振り回したりはしない。ここ一番、というところで効果的に振るってこそ効果的だし、味方も摩耗しない。アマチュアであるサーベルバイパーやテスタメンツでも知っていることだし、プロのマフィアであるルバーチェなら、なおさら理解している。利害が絡まない対立は、考えられなかった。
ふとランディが思いついたらしく、人差し指を立てながら話し始める。

「どちらかのグループが相手を潰すためにマフィアと手を組んだってのはどうだ？　その場合、自分とこの闇討ちは偽装ってことになるだろうが……」
自信がないのか、後半はややトーンダウンしていた。ランディの推理に、すかさずエリィとロイドが反論を試みる。
「うーん……そこまでやるかしら？」
「ああ、少なくとも、あのワジとヴァルドのふたりにそこまでの険悪さは無かったな。どちらかと言うと、何となくお互いを認め合ってるような……」
ロイドの言葉に、グレイスは軽く驚いた様子だった。
「あら、鋭いじゃない。あたしの知る限り、あのヴァルド君とワジ君はいいケンカ相手って感じなのよね」
やっぱり、という感じでロイドがうなずく。グレイスはそのまま話を続けた。
「元々、あの旧市街にいたのはヴァルド君の『サーベルバイパー』だけだったんだけど……そこに二年くらい前、あのワジ君がふらりと現れて『テスタメンツ』を結成したのよ。当然、ヴァルド君たちに絡まれて締め上げられそうになったんだけど……」
グレイスの表情がワクワクとしたものに変わる。あきらかに、誰かに結果を言い当てて欲しいようだった。
「……ひょっとして、返り討ち？」
ロイドが驚きながら尋ねる。ヴァルドとタイマン勝負をしたロイドにとって、あの優男風のワジがヴァルドを返り討ちにしたというのは、少し信じられないことだったからだ。そして、事実は小説よりも奇なり、だったらしい。
「そうそう、そうなのよ！　ワジ君、ああ見えて、格闘術をやってるみたいでね。目にも止まらぬパンチとキックで油断してたヴァルド君を叩きのめしちゃったらしいの！」
グレイスの野次馬根性丸出しな解説でも、ワジの強さは伝わった。ランディたちも驚きの表情をしていた。
「は～、あんなかわいい顔してそんなに強かったのかよ」
グレイスはおしゃべりをしながら、お皿にのっかっていた餃子をひとつ、口に放り込んだ。
「まあ、最初は油断しただけで、その後は何度かやり合ってほぼ互角の勝負みたいだけどね。でも、そういう経緯があるから、お互い認め合っているみたいよ」
「なるほど、ライバルと言うわけですか」
「そういうこと」
エリィの問いかけに答えつつ、皿の上に残っていた餃子をポイポイと口に放り込む。その健啖振りに若干あきれつつ、ランディが言った。
「となると、マフィアを利用して相手を潰そうって線はナシか」

ロイドはうなずいて、ランディの考えを肯定した。

「ふたりとも人望は厚そうだから、手下の暴走という線も考えなくていいだろう。うーん、そうなると……」

考え込んだロイドの横顔を見て、グレイスは懐かしいものを見るような目をして、ふっと微笑んだ。彼女が見ていたのは、ロイド本人ではなく、その向こうにいる、誰かのようだった。

「——あたしとしたことが、サービスしすぎちゃったかな？」

グレイスのつぶやきにロイドが気づいた時には、彼女は既に席から立っていた。

「他の取材があるから、これで失礼させてもらうわ」

彼女は円卓の上にあったオーバルカメラと伝票をさっと掴むと、空いている方の手でひらひらと手を振った。

「ま、せいぜい頑張って、良い記事を書かせてちょうだい。おごり損ってことにならないようにしてね」

まったね～、と能天気な声を出して、グレイスは出口に向かって歩いていった。彼女が立ち去るのを見とどけると、ロイドは、ふぅ、と肩で息をする。その様子を見て、エリィがクスリと笑った。

「あぁいう人は苦手？」

「え、あぁいや、そういうわけじゃないけど……」

押しの強い人間、特に女性には、少し苦手意識を感じているロイドだった。捜査官としては、苦手なタイプの人間がいることはあまり好ましくないとは分かっているのだが、こればかりはどうしようもない。

「我が道を行くって感じの人だものね。でも、彼女のおかげで、かなり情報が揃ってきたわ」

エリィの声も心なしか弾んでいる。ロイドは、真面目な顔でうなずいた。

「マフィアの話が聞けたのはかなり大きな収穫だった。問題は、どうして旧市街に介入しているかだけど……」

そこまで言って、ロイドはもう一度考えこむ。

「……難しいな。判断するには、情報が少なすぎる」

ティオがロイドの推理を捕捉すべく発言する。

「警察のデータベースでも見た覚えはありません……。セキュリティの高い場所に隠されているみたいですね」

「機密情報ってか」

ランディの問いに、エリィが答える。

「その可能性は高そうね……彼らは『ルバーチェ』だから」

エリィの言葉には、言外に警察内部との癒着があるであろうことが含まれていた。そちらの線から情報を集めようにも、困難が予想される。ロイドはしばらく考えたあと、一度支援課へ戻ることを提案した。

「セルゲイ課長の判断を仰ぐ必要があると思う。なんとか自力で解決したかったけど、そうも言ってられないみたいだ」

ロイドの判断に、エリィたちはうなずいた。

「そんじゃ、とっとと戻って、オッサンを捕まえるとすっか」

ランディの号令で、ロイドたちは席を立った。

支援課ビル内にある課長室。セルゲイは普段から、ここに詰めている。

大きな窓が壁面につけられており、採光は良い。部屋の広さにはゆとりがあり、全体の半分も使ってはいない。だが、いざとなればここに支援課全員が集合することを考えれば、広すぎるということはないだろう。部屋の奥には大きな本棚がふたつあり、連結棚によってつながれている。本の中身は警察関係の資料や法律関連の書物が大半である。

その本棚の前には大きなデスクが置かれている。しかし、いつも書類や本が山積みにされており、実質的に使えるスペースはあまり広くはない。セルゲイはデスクに備えつけのイスに足を組んで座り、資料に目を通していた。

コンコン、とノックの音がする。入れ、と答えると、ロイドを先頭に支援課メンバーの四人が入ってきた。セルゲイは資料から目を上げ、彼らを出迎える。

「不良共のケンカ、ちゃんと止めてきたのか？」

その言葉に、ロイドはなんとも言えない、といった表情を浮かべた。

「課長……それなんですが、少しやっかいなことになってきたかもしれません」

なんだ？　という顔のセルゲイに向かって、ロイドはこれまでの経過を報告した。不良グループはサーベルバイパーとテスタメンツという、旧市街で相争う二大勢力であること。彼らが反目し合うのは、同時に発生したという不可解な闇討ち事件だということ。そしてそこに、第三の勢力として『ルバーチェ』が浮かび上がってきたこと。

特に、ルバーチェの名前を出した瞬間に、セルゲイの眼光が鋭く光ったことを、ロイドは見逃さなかった。

「……ふん、なるほどな」

それだけ言うと、セルゲイは押し黙ってしまった。普段からなにを考えているのか読みづらい顔だが、こういう時はまったく読めなくなってしまう。どのタイミングで声をかければいいものか、ロイドは分からなかった。さすがにそろそろ声をかけた方がいいか、と思ったその時。

「……そうだな。この件に関しては、おまえたちにすべて任せた」

唐突にそんなことを言われ、ロイドは面食らってしまった。それは、他の支援課のメンバーも同じようだった。エリィが真意を尋ねようとする。

セルゲイの言葉に、ロイドがきょとんとした表情を浮かべる。
「いい助言者、ですか」
そうだ、と言いながらセルゲイはイスから立ち上がる。散らかっているデスクの一角に置かれた名刺入れを手早く探し、目当てのものを見つけると、ロイドに向かってそれを差し出す。
ロイドはデスクごしにそれを受け取り確認する。どうやら名刺のようだった。
「『グリムウッド法律事務所』？」
どこか聞き覚えのある名前だな、とロイドは思った。
「西通りにある法律事務所だ。イアンって名前の弁護士先生がいる」
イアン、という名前を引き金にして、記憶が蘇ってくる。
「ああ……！ あのパン屋の裏手にある。そういえば俺も、前いた時、何度か挨拶くらいはしてますね」
イアンの名前を聞いて思いだしたのは、ロイドだけではなく、エリィもだった。
「私も聞いたことがあります。確か、企業や貿易商などの法律相談をしている先生ですよね？」
「ってことは、大先生じゃねーの？ 俺らと会ってくれるのか？」
ランディの問いかけに、エリィはにっこりと微笑んだ。
「大丈夫だと思うわ。そういう企業相手の仕事をこなす一方で、市民の法律相談にも親身に乗ってくれるって話だし」
エリィの言葉に、へぇ、と感心した声をあげるランディ。
「熊みたいな髭面してるから、『熊ヒゲ先生』なんて呼ばれている。あの先生なら、マフィアについてかなりの情報を持っているはずだ。ひょっとしたら……警察も知らない最新情報なんかもな」
セルゲイはこともなげに言ったが、ロイドたちは驚いてしまった。警察も知り得ない情報を、市井の弁護士が持っている。それだけで、その弁護士の凄さが分かるというものだ。
「いったい何者だよ、その先生は？」
「ま、会えば分かるさ」
ランディの呆れにも似た感嘆の声に、セルゲイはシンプルに答えた。
「前に俺が会ったときに、特務支援課のことは話している。おまえたちの身分を明かせば、話ぐらいは聞いてくれるはずだ。この機会に挨拶しとけ」
ロイドは居住まいを正して答える。
「わ、分かりました」
そして、そのままエリィたちに向き直り言った。
「西通りならすぐ近くだ。さっそく行ってみよう」
「了解！」という言葉と共に、彼らはロイドについていく。
彼らが出ていくと、課長室は以前の静けさを取り戻した。
セルゲイはイスに座り直し、胸元のポケットからタバコを取り出す。手慣れた手つきでタバコに火をつけ、一服した。
「『ルバーチェ』相手にどこまでやれるか、お手並み拝見させてもらうぞ」
若き支援課のメンバーたちに向かってそうつぶやき、セルゲイは一服を楽しんだ。

クロスベル市街、西通り。生活感あふれるこの通りにあるベーカリーカフェ《モルジュ》の裏手に、ロイドたちが目指す場所があった。
エリィが看板を指さす。
「グリムウッド法律事務所……うん、ここがそうみたいね」
ロイドが腕組みをしながら、少し考え込んだ様子で言った。
「それにしても、そのイアン先生という人は何度か見かけたことがあるけど……そんな偉い先生だなんて、思ってもみなかったな」
「ハハッ。ま、人は見かけによらないってね。この俺のように」
「ランディさんは、見た目どおりの人だと思います」
ランディの軽口に、律儀に突っ込むティオ。そのやりとりを見て、緊張していたロイドの心が少しほぐれた。
その時、法律事務所の木製のドアが開き、中からスーツ姿の男が出てきた。年の頃は20代後半～30代前半くらいだろうか。藍色のスーツをきっちりと着こなし、髪も整えられており、おまけに黒縁のメガネまでかけている。一見しただけでエリートであることが分かる風体だ。だが、知的な風貌に似合わず身体はかなり鍛えられており、上にスーツを着ていても分かるほどの肉づきの良さだ。
スーツの男は玄関先で、扉の向こうにいるであろう人物に頭を下げた。
「それでは先生、今後ともよろしくお願いします」
扉の向こうから、壮年の男の声がする。先生と呼ばれた人物だろうか。
「ああ、それはいいが……君たちのところは、もう少しなんとかならんのかね？ 少しは市民の気持ちというものをだね……」
「……市民の人気取りが仕事ではありませんので。それでは失礼します」
壮年の男の話を遮り、スーツの男が話を切り上げ、玄関先から立ち去る。そのまま、ロイドたちがいる方に向かって歩いてきた。男はロイドたちの姿を見つけると、軽く驚いたようだった。
「おまえたちは……」

「あの、それはどういう？」
「ここで引くも、さらに突っ込むも、判断は任せたって言ってるんだ」
捜査を指揮する課長職にあるまじき発言だった。さらに、セルゲイは続ける。
「『ルバーチェ』の件に関しても、おまえたちに教えることはない。全部、自分たちで調べてみろ」
判断を仰ぎつつ、新たな情報を入手できれば、と思っていたロイドのもくろみは早くも崩壊してしまった。
「そ、そんな無茶な……」
そんなことを思わず口にしたロイドに向かって、セルゲイは言い放った。
「……俺が止めろと言ったら、おまえらは納得できるのか？」
普段の飄々としたセルゲイの雰囲気とは違う、ずしりと重いトーンの言葉に、ロイドたちは息を呑んだ。
「え……」
「マフィアの件に関しては、それだけ面倒くせぇ問題なんだ。もし俺が上司としてマトモな判断をするんだったら、止めろとしか言いようがない」
そこまで一気に言い、少し間を置いてセルゲイはロイドに問いかけた。
「それでいいのかよ？」
セルゲイの視線を真っ正面から受け止め、ロイドは考えた。確かにセルゲイに判断を仰ごうとは考えたが、捜査の中止を言い渡されることは、正直想定していなかった。しかも、『マフィアがらみはやっかいだ』という理由では。そして、実際に言われたとして、自分がどう答えるだろうかも考えた。答えはすぐに出た。
「……いえ」
ロイドの思いを代弁するかのように、ランディが続ける。
「ま、ここで打ち切りってのはさすがに後味が悪いかもな」
「そうね……色々と知ってしまったし」
「……同感です。」
エリィやティオも同意する。三人は顔をあせて、気持ちを確かめあった。
「みんな……」
口にするまでもなく、自分と意識が共有できていることに、ロイドは喜びを感じていた。
そんな彼らのやりとりを見てセルゲイはニヤリと笑ったが、その笑顔は一瞬で隠してしまったので、ロイドたちは気づくはずもなかった。
「――まあ、そうだな。何も知らない小僧どもが足を滑らせて大ケガでもしたら寝覚めが悪ィ(ワリ)しな。せめて良い助言者(アドバイザー)をおまえらに紹介してやろう」

見ず知らずの相手に驚かれ、ロイドは戸惑う。
「な、何か……？」
どう対処してよいのか分からず、多少しどろもどろな問いかけになってしまう。その様子を見てかどうかは分からないが、スーツの男はフッと鼻で笑った。
「なるほどな……セルゲイさんが飼い始めた仔犬どもというわけか」
意外な人物からセルゲイの話が出て、驚くロイドたち。よく見ると、男の胸元には、クロスベル警察の捜査官を示すバッジがついていた。
「そのバッジ……あなたもクロスベル警察の？」
しかし、男はフンと鼻を鳴らし、露骨な嫌悪感を表した。どうやら、ロイドたちと同じ組織であるとは認めたくないようだった。
「私のことはどうでもいい。それより、イアン先生を訪ねてきたようだが……」
そこまで言うと、ロイドの前に一歩出て、威圧的に見下ろす。
「くれぐれも余計な時間を取らせるんじゃないぞ。おまえたちのような役立たずと違って、色々と忙しい人だからな」
「なっ……!?」
役立たず、という言葉に色めき立つロイド。しかし、男は相手をするつもりはないらしく、そのままロイドたちの脇を抜けて、立ち去っていってしまった。
男が立ち去るのを見送ったあと、ロイドが声をあげる。
「な、なんだアイツは!?」
エリィは、男が立ち去ったあとを見つめながら答えた。
「どうやら本部の捜査官みたいだけど……」
「……居丈高な感じですね」
エリィが言いよどんだことを、ティオがずばり言う。だが、ランディは少し違う印象を持ったようだった。
「しかしあのメガネ、随分とやるみたいだったぞ」
やる、という言葉の意味が分からず、エリィがきょとんとする。ランディは自分の左脇をポンポンと叩きながら言った。
「左脇のところに、デカい得物を吊るしてたな」
きょとんとしていたエリィの顔が、驚きに変わる。それはロイドも同じだった。
「得物って、拳銃か？」
「他になにがあるんだよ」
「よく気づいたわね……」
しかしティオは、驚いた様子もなく言った。
「わたしもセンサーで感知しました。大型の軍用拳銃……といったところでしょうか」
ティオの発言を、ランディが肯定する。

「ああ、多分そうだろ。警察の支給品じゃ、あんなに膨らみはしない。それにあれだけ鍛えてりゃ、反動の大きな軍用拳銃だって使いこなせるんじゃねーの?」

ふたりの会話に、ロイドとエリィは感心しきりだ。エリィが素直な感想を述べる。

「ふたりとも、凄いわね……」

たまたま分かっただけさ、と笑いながら答えるランディ。ロイドなどは、いまだに驚いていた。そんなロイドに、ティオが提言をする。

「それより、弁護士の先生を訪ねなくてもいいんですか?」

その言葉で、一同はここに来た目的を思い出した。

「そうだな。忙しいところを悪いけど、挨拶させてもらおうか」

ロイドを先頭に、グリムウッド法律事務所のドアをくぐった。入ると、大きな室内全体を見回せる開放感ある作りがまず目に飛び込んでくる。壁を設けず、ステップフロアによって応接スペースと仕事用スペースを分けているためだろう。

玄関を入ってすぐに応接スペースがあり、年代物のソファとテーブルセットが置かれている。観葉植物なども置かれ、相談に来た来客者をリラックスさせようという心遣いが感じられる。

ステップフロアはL字型となっており、応接スペースを囲むような構造だ。その一番奥、質素なデスクで、壮年の男性が何かの紙資料を読んでいた。年の頃は40代後半だろうか。少しでっぷりとした体躯を、白のYシャツと焦げ茶のズボンに押し込んでいる。ダークシアンのベストときっちりしめられた黄色いネクタイのおかげで多少かっちりした印象を与えるが、先程のスーツの男と違い、人を拒絶するような雰囲気はない。それは、男の顔に生えている立派な髭のせいだろう。あご髭と鼻下の髭、それにもみあげがつながり、なんとも愛嬌のある顔になっている。銀縁のメガネも人を威圧するような雰囲気はなく、年相応の落ち着きを感じさせるものとなっていた。

男は、ロイドたち来客に気づき、声をかけてきた。

「おや、忘れ物かね?」

先程のスーツの男が戻ってきたのかと勘違いしたようだ。すぐに見知らぬ相手だと気づき、態度を改め、営業用の声を出す。

「おっと、これは失礼した。グリムウッド法律事務所へようこそ。今日は何か相談事でも?」

「あ、いや……」

ロイドがどう話を切り出そうかと考えている間に、男はデスクを離れ、ロイドたちのいる応接スペースへと歩いてきた。

「いやいや。遠慮することはないよ。まだ若いようだが借金などで困ったことでも? それとも仲間を集めて事業でも起こしたいのかね? 何でもいい、どーんと相談してくれたまえ」

ロイドに二の句を告げさせる間もなく、一気にまくし立てる。男のパワフルな一面が垣間見えるようだ、とランディなどは思った。

ティオが小声で、隣にいるエリィにささやく。

「この人が『熊ヒゲ先生』ですか……」

「噂どおりの方みたいね」

クスリと笑いながら、エリィが答えた。

戸惑っているロイドの顔を見つめていた男は、ふと何かに気づいたようで、眉根を寄せた。

「……おや? よく見れば、君の顔……どこかで見たことがあるな。確かこのあたりに住んでいた子じゃなかったかね?」

「あはは……覚えててくれたみたいですね。三年くらい前に近くのアパルトメントで暮らしていました」

ようやく話すきっかけができてひと息ついたロイドが答える。そして、姿勢を正して自己紹介をした。

「改めまして――ロイド・バニングスといいます」

「おお、そうか。道理で見覚えがあると――」

男は笑顔で答えたが、バニングスという名前を聞き、また何かを思い出したようだった。

「ん? バニングス……!? ひょっとして……ガイ・バニングスの弟さんか?」

思わぬところで兄の名前が出てきたに驚きつつ、ロイドが答える。

「あ……はい。ひょっとして、兄のこともご存知だったんですか?」

「ご存じもなにも……」

そこまで言い、男は遠くを見るような目でロイドを見つめた。あきらかにロイドではなく、その向こうにいるガイを見ている視線だった。少し居心地が悪いのか、ロイドが戸惑いつつ、仲間たちの方を振り返る。男はそこではじめて、ロイドが着ているジャケットの背中にあるクロスベル警察の紋章に気づいたようだった。

「……ふむ、どうやら事情があって来たようだね。こんな所で立ち話もなんだ。ソファにかけたまえ」

応接セットへロイドたちを促しつつ、大きな体躯を揺らし、ドタドタとステップフロアを上っていく。

「あいにくコーヒーしかないのだが、それでかまわないかね?」

「あ、お構いなく」

ロイドが声をかけた頃には、すでに男はカップを並べ、ポットに入ったコーヒーを注いでいた。ランディがソファに腰掛けながら、エリィにささやく。

「……ガイ君のことは残念だった。私も個人的に、あの事件のことは調べてみたこともあったが……。残念ながら、手がかりすら見つかっていない状況でね……」

イアンのその言葉を聞き、ロイドの胸がチクリと痛む。生前の兄を知り、この街の情報にも通じているというイアン弁護士なら、兄が死んだ事件について、なんらかの情報を持っているのではないかと思っていたからだ。しかし、その望みはあっけなく散ってしまった。

だが、今はそのことを悲しんでいる時ではない。ロイドは頭を切り換えた。

「――いや。今は兄のことはいいんです。それよりも先生。今日ここに来たのは、お聞きしたいことがあるからなんです」

「ああ、なんでも聞いてくれたまえ。話せる範囲でだが、協力しよう」

イアンの返答を聞き、ロイドは単刀直入に問いかけた。

「『ルバーチェ』について、何かご存知のことがあれば聞かせていただけませんか？」

イアンは片方の眉だけを上げた。そのまま軽く思案するように、あご髭を手で撫でる。

「ふむ……『ルバーチェ』か」

それは、新人であるロイドたちにどこまで話すべきなのか、考えているようだった。

「……彼らにまつわる黒い噂は多い。帝国と共和国にまたがる密貿易。盗品売買に、ミラ・ロンダリング。猟兵団の斡旋や武器の密売まで……。そのどれもが、クロスベルの特殊性を利用したものと言えるだろう」

「クロスベルの特殊性……？」

ロイドの問いかけに、エリィが答えた。

「近年ますます盛んになっている貿易業と金融業の発展……それと反比例するかのように脆弱きわまる政治基盤ですね？」

イアンは大きくうなずく。エリィは市長の娘として。イアンは街の弁護士として。立場は違えど、政治状況に関する憂いは共通するものがあった。

「このクロスベル自治州の政治基盤は極めて弱い。多くの政治家は、帝国派か共和国派のどちらかに属しており、利権をむさぼる者が多いんだ」

イアンは一気に言い切ると、コーヒーをひと口すする。苦い顔をしたのは、冷めかけのコーヒーのせいだけではないのだろう。

「そして、マフィアの暗躍を取り締まる法案が出されたとしても……彼らと癒着した議員に潰される」

その言葉に、まさか、といった表情でランディが問いかけた。

「なんだそりゃ……本当なのか？」

エリィが沈痛な面持ちで答える。

「……残念だけど、本当よ。ルバーチェの利権とつながっている議員は相当多いと言われているわ。おそらく、警察が動けないのもそれが最大の理由でしょうね。」

「……大人の事情、ですか」

それまで黙ってコーヒーを飲んでいたティオが、ため息と共につぶやく。大人の事情というものに振り回されてきた彼女なりに、思うところがあったのだろう。

「それではルバーチェは実質上、犯罪を起こし放題なんですか？」

ティオに尋ねられたイアンは、かぶりを振ってそれに答えた。

「いや、さすがにそれはない。あからさまな犯罪を放置すれば市民や周辺諸国も騒ぐだろうし……今のところは『市民生活に直接迷惑はかけない』という一線だけは、ルバーチェ側も守っているようだ」

そこまで言うと、イアンはソファに身体をあずけて、少し疲れた様子で言った。

「逆に、その一線を越えなければ何をやっても警察は動かない……そう高を括っているところもあるみたいだがね」

その言葉に、ロイドは絶句してしまう。ランディは、何かを得心した様子でうなずいていた。

「なるほどなぁ。活気ある華やかな都市の裏側に、魑魅魍魎のうごめく影アリか」

「……機密レベルの高い情報をチェックしておきたいですね……」

ティオはティオで、やる気になっているようだった。相手がルールに則らないとするならば、こちらも多少逸脱しても、情報を手に入れようと考えている様子だ。

イアンはソファに身体をあずけたまま、話を続ける。

「まあ、ルバーチェの基礎知識は大体そんなところだが……」

よっと、という声と共に身体を起こし、ロイドたちの方に身を乗り出して言った。

「――しかし、ここ最近、少し風向きが変わってきていてね」

イアンの口ぶりから、何かあると察したエリィが続きを促す。

「どういうことですか？」

「これはまだ、警察の方でも掴んだばかりの情報らしいが……最近、どうやらルバーチェの対抗勢力が現れたらしいんだ。それもかなり強力な、ね」

マフィアに対抗しうる勢力となると、相応の実力と規模のある組織だ。ロイドがまっさきに思いついたのは、遊撃士協会だった。だが、それを口にすると、イアンは首を横に振った。

「なんというか、完全に向こうのペースだな」
　エリィは苦笑しつつ、ランディに同意した。
　ロイドたちがソファに座って少し経つと、トレイにコーヒーカップを五つ乗せ、男が戻ってきた。手慣れた手つきで各自の前にコーヒーを置き、テーブルの真ん中にミルクピッチャーと砂糖が入ったポットを置くと、ソファにどっかと腰掛ける。
「ミルクと砂糖はお好みでどうぞ。お嬢さん方には、少し苦いかもしれないが」
　ありがとうございます、と微笑むエリィ。ティオは、どうも、とだけ言って、さっそく砂糖をポットから自分のコーヒーに入れていた。
　男は胸元のポケットから名刺入れを出しつつ、ロイドに向かって言った。
「あらためて自己紹介といこう。私の名は、イアン・グリムウッド。この法律事務所で弁護士をしている」
　イアンから差し出された名刺を受け取りつつ、ロイドが答える。
「ロイドです。こっちから順にエリィ・マクダエル、ティオ・プラトー、ランディ・オルランド」
　ロイドは言いながら、各自を指し示す。
「はじめまして」
「どうも」
「こんちはっス」
　それぞれ個性的な挨拶を聞いて、イアンはニコニコと笑っていた。
「君たちは見たところ、クロスベル警察の人らしいが？」
「はい。できたばかりなのでご存じないかもしれませんが、俺たちは特務支援課というセクションです」
　イアンは片方の眉だけを器用にあげた。どうやら軽く驚いた時のクセらしい。
「あぁ、なるほど……君たちがセルゲイ君の言ってた新人か」
　セルゲイの話どおり、すでにイアンは支援課のことを知っていたようだった。
「そういえば最新のクロスベルタイムズも読んだよ。着任早々、なかなか頑張ってるみたいじゃないか」
　グレイスが書いたクロスベルタイムズの記事は、イアンにも読まれていたらしい。ロイドが苦笑しながら答える。
「何だか散々なことを書かれちゃってますけど……」
　ロイドたち特務支援課の初仕事は、グレイスによってさんざんな書かれようをしていた。多少過剰な表現があったとはいえ、大半は事実なので反論もできない。
「なあに、あそこは昔からあんな調子だ。気にすることはない。彼らも認めざるを得ないよう、大活躍すればいいだけのこと

だ」
　そう言って笑いながら、コーヒーをひと口飲む。イアンのおおらかな話しぶりに、自然とロイドの顔もほころんだ。イアンは、そんなロイドの顔を見ながら、しみじみとつぶやいた。
「しかしそうか……あのガイ君の弟さんが警察に。何だかこう、空の女神(エイドス)の巡り合わせを感じるねぇ……」
　そうして、ひとりうなずく。
「あの……先生は兄とはどういう？」
「ああ、今の君たちと同じくたまに情報交換に来てくれたんだ。もっとも、彼は非常に優秀な捜査官だったからね。逆に私の方が色々と助けてもらったくらいだよ」
　ロイドはうなずきながら、ここでも兄の背中を見ることになるのか、と内心つぶやいていた。兄が優秀なのは誇れることだし、我がことのようにうれしく感じることもある。だが、時として重荷となることがあるのも事実だった。
　と、エリィが軽く驚いた様子でロイドに問いかける。
「ロイド……あなた、捜査官のお兄さんがいるの？」
「なんだよ、水臭ぇな。そんなことひと言も聞いてないぜ？」
　エリィと同じく、ランディも驚いた様子だ。ティオは黙ったまま、ミルクと砂糖がたっぷり入ったコーヒーをすすっているが、その目はロイドをじーっと見つめていた。
　ロイドは彼らに兄のことを話していなかったことに気づき、詫びた。
「はは、ゴメン。つい言いそびれててさ。それに……もう亡くなった人だから」
　できるだけさらりと言ったつもりだった。だが、エリィの顔には、先程とは違う驚きが広がる。
「あ……」
「仕事中に殉職したんだ。ちょうど三年前になるかな」
　エリィはなんと言っていいのか分からず、口ごもってしまう。代わりに、ランディが話を受けた。
「三年前……そうか、それでおまえ、しばらくこの街を離れて……」
　ああ、とロイドはうなずいた。ロイドは親戚の家に身を寄せ、捜査官を目指すべくクロスベル警察学校に入校したのだ。
　エリィが肩を落とし、伏し目がちに謝った。
「ごめんなさい、ロイド。その……」
　エリィにこれ以上気を遣わせないよう、あくまでいつもの調子で返す。
「いいんだ。言ってなかった俺のせいだから」
　だが、一度重くなってしまった空気は、なかなか戻るものではない。イアンが手にしていたマグカップをテーブルに置く音がやけに響いた。

「対抗勢力といっても悪い意味でだよ。カルバード共和国の東方人街に一大勢力を構えている組織……というか、マフィアだね。それが、このクロスベルに進出し始めているらしいんだ」
　別のマフィアが、このクロスベルに現れた。そのショッキングな情報を聞いて、ロイドは思わず腰を浮かせた。
「なっ……！」
「ほ、本当ですか!?」
　ロイドと同様にエリィも驚く。イアンは深くうなずき、腕組みをした。
「以前からそんな噂はあったが、どうやら事実だったらしい。──組織の名は、『黒月（ヘイユエ）』。そしてつい半年前、クロスベルの港湾区にできたのが『黒月貿易公司』という」
「『黒月』……」
　ロイドのつぶやきに、ティオが素直な感想を言う。
「……いかにも東方風の名前ですね」
　ランディが軽く肩をすくめながら、ぼやきのように話す。
「しかしマフィア同士の抗争か……。こりゃ、不良同士のケンカどころの騒ぎじゃないぜ」
　飄々とした語り口が信条のランディも、調子が出ないようだ。
　イアンは腕組みしていた右手をほどき、そのままあご髭を撫でた。
「幸いにしてというべきか……まだ、その抗争そのものは表立っては始まっていないらしい。しかし近いうちに何らかの形で暗闘が始まるかもしれない……。警察の捜査一課などはそれを警戒しているようでね」
　捜査一課、という単語を聞き、ロイドは驚いた。ここに来てから、驚きの連続だと我ながら思う。エリィは、少し考え込むようなそぶりを見せてから、イアンに尋ねた。
「もしかして、先ほどこちらを訪ねていた眼鏡の男性は……？」
「ああ、捜査一課に所属するダドリー君という捜査官だ。ちょうど、今話している事と同じような話をしに来たのさ」
「そうだったんですか……」
　エリィの言葉を聞きながら、ロイドは考えにふけっていた。イアンの話は驚きの連続だが、それはすなわち新情報が多く手に入ったということだ。そして、それらの『新しいピース』が、綺麗にはまる推理が組み立てられそうだ、という予感を感じていた。
「ロイドさん……？　どうしたんですか？　そんな難しそうな顔をして……」
　ティオに声をかけられ、ようやく我に返った。ロイドの様子を見て、ランディも何かを察したようだった。

「ひょっとして、何か気づいた事でもあるのか？」
「ああ……まだ完全にはまとまってはいないけどね」
　そう言いながらロイドは、一刻も早くこの推理を組み立てたい思いに駆り立てられた。こういう時は、ひらめきが消える前に、アウトプットした方がよい。警察学校での授業での経験などから、ロイドはそう思った。そうと決まれば話は早い。ロイドはソファから立ち上がった。
「──先生。ありがとうございました。先生の情報のおかげで解決の糸口が見えた気がします」
　そう言って、頭を下げる。仲間たちも立ち上がった。
「そうか……それは何よりだ」
　イアンも立ち上がり、ロイドたち支援課のメンバーを見回した。
「セルゲイ君には世話になっているし君たちの事は個人的に応援している。また何かあったらいつでも訪ねてきてくれたまえ」
「はい、ありがとうございます。それでは、失礼します」
「ありがとうございました、先生」
「コーヒー、ごちそうさまでした」
「どもっした」
　各人、思い思いの挨拶をして、事務所を出ていく。彼らがドアを閉めた後。
　イアンはドアの向こうに消えたロイドの背中を思い出していた。
「……そうか、ガイ君の弟さんか……」
　ふう、と小さなため息をひとつつき、カップに残っていたコーヒーを飲み干した。

第五章　抗争の疑惑（前編）　了

小説版 零の軌跡 四つの運命

田沢 大典
Illustration 松竜

第六章 抗争の疑惑（後編）

支援課が入っているビルの一階は、主に共用スペースとして使われていた。玄関から見てステップフロアとなっている少し小高いフロアには、長机がある。年代物らしく傷は多いが、しっかりとした作りでガタつきひとつない。ここでメンバーは食事を取ったり、他愛もない雑談に花を咲かせたりする。しかし今は、捜査のための重要な会議が行われていた。

　ロイドが、長机の近くに置かれたホワイトボードの前に立っている。ホワイトボードには旧市街の地図が貼られ、今回の事件に関わっているであろう人の名前、その所属などをロイドが手早く書いていた。これから、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争に関する事件についての捜査会議を行おうとしているのだ。

　一通り書いたロイドが、長机の方を見る。そこには、エリィ、ティオ、ランディが座っていた。エリィとティオは姿勢よくイスに座っているが、ランディは背もたれに身体を預け、足を組んでいる。みな、ロイドの次の言葉を待っていた。

「発端は五日前の真夜中。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のメンバーがそれぞれ何者かに襲われた」

　ロイドは事件の概要を説明した。簡潔な言葉で要点をまとめる。警察学校で最初にたたき込まれる、捜査会議での説明方法だ。

「場所は、旧市街の別の二箇所。ここと、ここになる」

　言いながら、ホワイトボードに貼られた地図に赤い×印を付けていく。ペンが走る音がする中、みなロイドの説明を真剣に聞いていた。

　エリィがホワイトボードの地図を指差しながら言う。

「西の裏通り裏の西通りで『テスタメンツ』のメンバーが襲われ……」

　そのまま指を、もうひとつの×印の方へと向かわせる。エリィが言葉を発する前に、ランディが口を開いた。

「で、東のライブハウス前で『サーベルバイパー』のヤツが襲われたってことだな」

　そう言って、背もたれにわずかに身体を預け、イスを揺らす。ティオはじっと地図を見つめていたが、少しだけ目が見開かれる。何かに気づいたようだった。

「……こうして見ると、旧市街の反対側同士ですね」

　ティオの言葉にロイドがうなずく。

「ああ、同じ夜に起きても、すぐには判らなかったはずだ」

　両方の×印を指し示しながら、事件に関する仮説をひとつ積み重ねる。

「ある程度の時間が経ってはじめて、闇討ちがお互いの仕業だと確信して現在に至る、というところかな」

　そこまで言ってからロイドは腕を組み、黙った。みなの意見を聞こうというつもりらしい。

「うーん……やっぱり、第三者がいたとしか思えねぇぜ」

　そう発言したのはランディだった。両手を頭の後ろで組み、ホワイトボードを難しい顔でにらみつける。考え事をするときのクセのようだった。

「どっちかのメンバーの全員が口裏を合わせない限り、どっちの犯行も不可能だろう？」

　ランディは、サーベルバイパー、テスタメンツ、両方の犯行の可能性を否定した。今回の事件は、サーベルバイパーかテスタメンツ、どちらかのメンバー全員が結託すれば、『演出』することは可能だ。だが、その場合、自分の仲間を自分たちの手で病院送りにする必要がある。ケンカっ早い彼らが相手を攻撃する時に『仲間がやられた』という大義名分を必要とするとも思えないし、なにより大事な仲間を自分たちの手で痛めつけることをするとは思えないのだ。

「ランディの言うとおりだ。この段階で、ふたつの犯行を第三者の仕業だと仮定してしまっても構わないと思う」

「そうね……少しずつ可能性を絞らないと前に進めないし」

　エリィはあごに手を添えて、ややうつむいたまましゃべった。慎重に考えながら、ランディとロイドの仮定に同意する。そして、顔をあげてロイドの方を見やった。

「──で、その第三者として上がってきた名前があるわけね」

　ああ、と言いながらロイドがうなずく。その表情が一段と引き締まった。いよいよここから、事件の核心に迫っていくところだからだ。

「『ルバーチェ商会』──クロスベルの裏社会を支配しているというマフィアだ。グレイスさんの情報によれば半月ほど前、

その構成員が旧市街で目撃されている。この情報自体の真偽を確かめている時間はないけど……まずは『ルバーチェ』が二件の傷害事件を起こしたという仮定で話を進めてみよう」

ロイドは一気に説明をし、みなを見回す。さっきと同じ、意見が出てくるまで待とうというポーズだ。するとティオがぽつりとつぶやいた。

「……そうなると……やはり問題は〝動機〟ですか」

ティオの言葉に、ランディが答える。

「うーん、動機ねぇ……利害の絡みそうにないマフィアと二組の不良集団か……」

そう言って、天井を見上げる。そこに何か良いアイデアが張りついているのか、と思わせるほど、じっと見つめていたが、当然のように答えが貼られているわけではなかった。

考え込むティオとランディを見つめ、エリィが言った。

「それら三つの〝点〟を結ぶ〝線〟があるはず」

この線を見つけることが、今回の事件を解く鍵となる。そう結論づける。

「不良連中もマフィアも、メンツをつぶされれば怒り狂って動く、って線で考えてみたんだが……マフィアに関しちゃ、メンツどころか表だってもねぇ。つながらねぇな」

ランディの言葉に、エリィもうなずく。

「ランディの言うとおりだわ。マフィアは必要がない限りは示威行為には出ず、影に潜み機会を窺うもの。現に、グレイスさんが見た時も、自分たちの正体が分からないように行動していたみたいだし」

そして彼女は、そのまま視線をロイドに移した。

「――ねえロイド、見当は付いているのでしょう？」

えっ、とティオとランディは軽く驚き、ロイドの方を見る。

ロイドは少し照れくさそうに頬をかく。エリィの考えは当たっているようだった。ロイドは、まだ確証があるわけじゃないけど、と前置きをし、表情を引き締めて言った。

「三つの〝点〟を結ぶ〝線〟、俺は《黒月》だと思う」

「あのヒゲ先生が教えてくれた情報だな」

ランディがすかさず補足を入れる。面白くなってきた、と言わんばかりにテーブルに肘をつき、身を乗り出す。

「確かに、可能性としてはいちばんありそうな気がするけど……。でも、そうだとしたら、どんな線になるのかしら」

再びあごに手を添え、エリィが考えつつしゃべる。その眉根は寄せられ、彼女が深く考えているのが外から見ても分かる。

少しの間、一同が無言になる。訪れた静寂があたりを包む。と、その時ティオがしゃべり出した。

「点と点を結ぶ線は、どうして結ばれるのでしょう？」

ティオの発言に、誰も返答できなかった。質問の意味が分からなかったらしい。

「導力ネットワークが結ばれるのは、端末からサーバーにアクセスするためです。端末という点と、サーバーという点を、ネットワークという線で結ぶ。それによって、情報を引き出せるようになります」

エリィがあごに手を添えたまま、つぶやいた。

「つまり、情報を引き出すという目的があるから、線をつなぐ……。なら、ルバーチェがサーベルバイパーやテスタメンツとつながる目的を考えればいい、というわけね」

「そのとおりです。目的……もっと大きく『必然性』とでもいいましょうか。黒月が関係することで、ルバーチェと不良グループがつながる『必然性』、それが見えれば、あるいは」

事件解決の糸口が見えるかもしれない。エリィとランディは、うなずいた。

「パッと思いつくのは、黒月が来たことで、手を組もうぜーって話だが……マフィアと不良グループが手を組むなんてこと、まずないんじゃねーか？」

ランディの言葉に、エリィも同意する。

「さっきランディが言ったとおり、マフィアも不良グループもメンツを重要視するわ。共闘する場合は、お互いが同格だと認識しない限り無理よね」

その時、ティオがキョトンとした顔で尋ねた。

「あの……因子の関係性が双方向ではなくて、片方向だけ、ということはありませんか？」

「おいおいティオ、また専門用語か？」

ティオの難しい言い回しに、ランディが悲鳴を上げる。ティオはジト目をランディに向けた。

「……では、ランディさんのためにマスターとスレーブとでも言い換えましょうか」

「……おまえ、わざと分かりにくい言葉選んでないか？」

ランディ、とエリィが茶々をたしなめる。そのまま、ティオに続きを促した。

「ティオちゃん、それって？」

「つまり、両方にではなく、片方が一方的に利益を得られるなら、つながりができるのではないか……ということです」

その時、目を閉じてじっと考えこんでいたロイドが、急に目を見開いた。そうか、とつぶやき、何度かうなずく。自分で自分の考えを整理し、穴がないことを確認していた。

「なんか閃いたか？」

「『必然性』の話だよ。それから、『一方的な利益』も」

ランディの問いにロイドは答える。

「《黒月》のクロスベル進出を受けて、ルバーチェ側がする事といえば何だ？」

ロイドはみなに問いかけた。問いはとてもシンプルで、み

なが考えるとっかかりとして分かりやすい。
「そりゃあ、単純に考えれば戦力増強だろ」
最初にランディが答えた。
「兵隊の増強と武装の強化。どちらも欲しいところだよな」
人差し指と親指を出し、数を数えながら話をする。
ロイドは軽くうなずき、ランディの話を受ける形で続ける。
「マフィアなら、武装の強化は密貿易で確保できるだろう。……だが、戦闘員の方はどうだ？」
「そいつは……」
ランディは口を開きかけたが、そのまま押し黙ってしまう。マフィアの戦闘員ともなれば、ただ人を雇えばよいという話ではない。相応の腕前と覚悟が必要になる。
「普通に考えたら猟兵団を雇うところでしょうけど……ううん、駄目ね」
エリィはいったん口にした自分の意見を、自分で否定した。首を振り、あごに手を添えて思考する。
「クロスベルは色々な意味で周辺諸国から注目されすぎている。《不戦条約》の手前もあるし、猟兵団なんかを動かしたりしたら帝国と共和国が黙っていないわ。それは両者の意を受ける政治家や議員たちにも同じこと……」
クロスベルという土地を内外から見つめ続けてきたエリィの分析は的確で、ロイドは聞きながらうなずいていた。
「つまり、ある程度の実力があり、帝国も共和国も外交問題にしない、あるいはできないような人間が理想、ということですね」
「しかも、ひとりふたりじゃダメだぜ。マフィアが戦闘員として必要とするなら、ダース単位は欲しいところだろう」
ティオのまとめに、戦闘のプロであるランディが補足をする。
「でも、そんな都合のいい人間を、しかもまとめてだなんて……」
エリィのつぶやきは、途中で消えてしまう。そして、彼女の顔には驚愕の表情が浮かんでいた。
「——あ」
ティオとランディも気づいたようだ。ティオもまた驚きで目を見張り、ランディはイスから腰を浮かせた。
「ロイドさん、もしかして……」
「その兵隊候補として、不良どもをってことかよ!?」
ランディの大きな声がフロアに響く。ランディは、ロイドに確認を求めるように見つめた。
「ああ……血の気が多く、しかも統率されている青年たち。この街で運用できる戦力としてはまさにうってつけだろう」
ロイドはランディたちの推測を肯定し、話を続ける。
「しかし、どちらのグループにも目障りな存在がいるとした

ら……？」
「なるほど……あのワジ君は、間違ってもマフィアに協力しそうにないし」
「あのヴァルドさんもお山の大将でいたいタイプ……とてもマフィアの下で働きそうにはありませんね」
「そこで、お互いを潰し合わせて弱体化させた頃合いを見計らって、一気に取り込みにかかる……なるほど、そういう筋書きかよ！」
ロイドの言葉を受け、エリィとティオとランディが発言する。そのテンポは小気味よく、まるで何かの演奏のようだった。
「あくまで可能性のひとつさ。現時点である情報をひとつずつ組み立てた場合のね」
盛り上がる三人を前にし、ロイドがさらりと言う。一度冷静になり、自分たちが視野狭窄に陥ってないかを確認するかのようだった。
しかしランディはすっかり盛り上がり、ロイドの元へ歩いていって、その肩を勢いよく叩いた。
「またまた～！　謙遜するなってーの！」
痛いってば、と言うロイド。しかしその表情は笑顔だ。
エリィもまた、ロイドに負けないほどの笑顔だ。
「うん、私もかなり的を射ていると思うわ。推理にも無理がないし、状況的な説得力もあるもの」
「……伊達に捜査官の資格を持ってはいませんね」
そう言って目を閉じ、ティオが微笑む。
三人から褒められ、ロイドは頭をかいた。少々照れくささを感じていたようだ。
「はは……ありがとう。——それで、さ」
ロイドの次の言葉に、みなが意識を傾ける。
「この推理……あのふたりにも伝えた方がいいと思わないか？」
エリィたちは、またも驚きの表情になる。
「あのふたりって……」
「おいおい、まさか……」
ロイドは、ホワイトボードに書かれた文字を指差しながら言った。
「ヴァルド・ヴァレスに、ワジ・ヘミスフィア。『サーベルバイパー』と『テスタメンツ』のヘッドたちさ」

駅前通りは夜になると、人影もまばらになる。夜の闇に浮かぶ巨大なクロスベル駅は不気味な迫力があり、用事もなくここを訪れる者はほとんどいない。

共和国方面行きの最終列車がけたたましい音を立てて出発すると、あたりは静寂に包まれた。
ロイドたちは人気がいなくなる頃を見計らい、ワジとヴァルドをここ駅前通りの奥にある、資材置き場に呼び出した。ここなら、人目につくことはまずありえない。警察官と街の不良グループのヘッドが密会するには、うってつけの場所というわけだ。
支援課のメンバーが駅前に到着する直前、何者かの怒号が響き渡った。
まっさきにランディが反応する。
「おい、今の声は……」
「……サーベルバイパーのヘッドの人だと思います」
即座にセンサーモードに切り替えたティオが答える。ロイドは足を速めながら、みんなに言った。
「急いだ方が良さそうだ」
ロイドの声に従うように、エリィたちもスピードを速める。
彼らが駅前通りから横にそれる階段を駆け下り、資材置き場に到着した時には、すでにヴァルドとワジは到着していた。ヴァルドは背中に木刀を担ぎ、ワジに噛みつかんばかりの勢いで迫り、ワジはようやく到着したロイドたちを半笑いの表情で眺めている。一触即発、という雰囲気だった。
「てめえら……」
ヴァルドのイラついた声をさらりと受け流し、ロイドが詫びる。
「済まない、ふたりとも。待たせてしまったみたいだな」
ワジはロイドの方に向き直り、うやうやしく一礼をする。右手を胸の前に添え、まるで役者のようだ。
「お招きにあずかり光栄至極——」
そこまで言って、顔を上げてニヤリと笑う。
「約束どおり、さぞ面白い話を聞かせてくれるんだろうね？」
その笑顔に街灯が作り出した影が顔にかかり、凄味のある雰囲気を生み出していた。
「面白いかどうかはともかく、興味深い話ではあると思う。さっそく聞いてくれるか？」
ロイドは手早く説明を始めることにした。ワジは何故ここに呼ばれたか、既に理解しているようだったからだ。
しかし、ヴァルドは事情が飲み込めない様子で、話にブレーキをかける。
「ちょ、ちょっと待ちやがれ。面白い話だぁ？　いったい何を言ってやがる!?」
驚きつつも、精一杯すごんでみせるヴァルドの努力をあざ笑うかのように、ワジがあきれ声をあげた。
「バカだなぁ、君は」
その言葉に色めきだつヴァルドを完全に無視し、ワジがよ

どみなく話を続ける。
「五日前の夜、旧市街で起こった二件の傷害事件……その真犯人の目星が付いたって話に決まってるじゃないか」
「な、なにぃ……!?」
ヴァルドが驚きの声をあげるが、同時にエリィたちも驚いていた。
「……あなたの方も、疑っていたようですね？」
ティオがワジに問いかける。ティオのまなざしは鋭く、自分が相対している相手がいかに油断ならないか、よく分かっているようだった。
しかしワジは、ティオのまなざしなどまったく感じていない様子で、手をあげてわざとらしくおどけて見せた。
「僕も最初はメンバーの勝手な暴走かと思ってたんだけど……よくよく状況を整理してみると、どう考えても不自然じゃないか。バイパー側にしてもそれは同じ……まあ、僕の推理はそこで止まっちゃってるけどね」
「そうか……だったら話は早そうだ」
ワジの言葉を聞きながら、ロイドはワジの洞察力の高さに内心舌を巻いていた。しかし、ここで相手を褒めたところで、こちらにはなんの得にもならない。ここは話を進めるのが得策だった。
ロイドはヴァルドの方に向き直る。
「——ヴァルド・ヴァレス。色々と不審なことはあるかもしれないけど……まずは一旦、こちらの話を最後まで聞いてくれないか？」
薄闇の中でも分かるロイドの真摯なまなざしに、ヴァルドはあてられたようだった。肩にかついでいた木刀を下ろし、舌打ちをする。
「——手短に話せ。もし、下らねぇ話だったら、その頭をカチ割ってやるからな」
どうやら、話は聞いてもらえそうだ、とロイドは内心で少し安堵する。
「それじゃあ早速始めよう。まずこの推理は、旧市街の真反対と言える場所でほぼ同時刻に起きた、という不自然な点から着目したんだが——」
ロイドはなるべく手短に説明をした。ワジはともかく、ヴァルドは簡潔に話さないと、飽きて帰ってしまうのではないか、と思ったからだ。
だが、ヴァルドは食い入るようにロイドの話に聞き入っていた。反対にワジの方は、ある程度話を聞いた段階で結論は読めたらしい。ロイドの話に相づちも打たず、何かをじっと考えている様子だった。
「——よって、ルバーチェが今回の事件に関わっていた可能性が非常に高い。これが現時点での情報を組み立ててみた推

理だ。率直な感想を聞かせて欲しい」

ヴァルドはただ突っ立ったまま、地面を見つめていた。まるでロイドの言葉が耳に届いていないかのようだ。

代わりにワジが、髪の毛をかき上げつつ、ため息混じりに答える。

「参ったね。まさかマフィアなんかに、そこまでコケされてたとは」

「今の話……納得してくれたのかしら？」

エリィの問いかけに、ワジは人の悪そうな笑みを浮かべる。

「フフ、納得もなにも……前にルバーチェの連いが僕たちの所に来てるからね」

その言葉に、ロイドが驚く。

「良い目を見させてやるからウチの下で働かないかってね。もちろん鼻で笑って追い返してやったけどさ」

「そうだったのか……」

「……決まりだな」

ランディの言葉に、一同がうなずく。決定的な証拠だった。

ワジがヴァルドに声をかける。

「君のところはどうだい、ヴァルド？　やっぱりマフィアの勧誘があったんじゃないの？」

沈黙したままだったヴァルドはワジをギロリとにらむ。

「……ああ、一月くらい前にな。あまりに舐めた話だったから脅しつけて叩き出してやったが……」

ヴァルドの瞳がカッと見開かれ、口元に獰猛な肉食獣の笑みが浮かんだ。

「……クク、まさかここまで舐めた真似をしてくれるとはなァ……！　ワジ！　てめえとの決着は延期だ！　マフィアだろうと関係ねえ！　まとめて叩き潰してやらあッ!!」

ヴァルドの怒号が再びあたりに響き渡る。木刀を背中に背負い、今にでも走り出して、ルバーチュの事務所に突撃しそうな勢いだ。

「ちょ、ちょっと!?」

「沸点低すぎです……」

「お、落ち着いてくれ！　下手にそんな事をしたら――」

ロイドたちが必死にヴァルドをなだめようとしたその時。

ワジが冷や水のような言葉を浴びせ、一瞬場が凍りついた。

「本当、馬鹿だなぁ」

「なにぃ……!?」

目を剥いて怒るヴァルド。普通の人間なら思わずすくみ上がってしまうところだが、ワジはまったく意に介さない。大げさに肩をすくめ、まるで役者のようにまくしたてた。

「マフィア相手にケンカして勝ち目があるわけないだろう？　下手に乗り込んだところで、蜂の巣にされるのがオチだろうね」

「るせえ！　やってみなきゃ判らねえだろうが！」
　ワジの冷静な言葉に反発するかのように、どんどんヒートアップしていくヴァルド。その様子をワジは、言葉以上に冷めた目で見つめている。
「あのね、体力バカで、多少導力銃で撃たれたところで死なない君はいいよ」
　バカとはなんだ、というヴァルドの怒号を無視してワジは続ける。
「でも――君のかわいい舎弟たちまで、それに巻き込むつもりかい？」
　そこで、怒号はピタリと止まった。ぐ、といううめき声をあげたら、あとは黙りこくってしまう。この様子を見て、ロイドたちはワジのあしらい方に舌を巻いていた。ヴァルドを怒らせるのも黙らせるのも、彼の口先ひとつで思うがままなのだ。
「なら、てめえはどうなんだ!?　ここまでコケにされて……仲間をやられたままで、おめおめと引き下がれんのか!?」
　ヴァルドは怒りの矛先をワジに向ける。同じ不良グループの頭（ヘッド）として、ワジの弱腰の姿勢にガマンがならなかったからだ。
　だが、ワジから返ってきたのは、意外な答えだった。
「フッ……そんなワケないだろ」
　髪をかき上げ、不敵に微笑む。ヴァルドを含め、ロイドたちも驚いていた。ワジはこのまま問題を穏便に済ませるつもりだと思っていたからだ。
「今回の件、関わってるのはマフィアでもごく一部のはずだ。なら、そいつらにのみ落とし前を付けさせればいい。報復もできないくらい、きっちりとスジを通した上でね」
　さっきと同じように、口調は冷静だ。だが、そこには氷のような冷たさと鋭さがあった。ヴァルドの肉食獣のような激しさとは違う、得物を理知的に、確実に仕留める狩人のような恐ろしさをまとっている。
「――ヴァルド。君にも協力してもらうよ。」
　ワジはそう言って微笑む。その表情を見て、ヴァルドは、彼とはじめて出会った時のことを思い出していた。
「おまえ……」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！」
　このままではまずいことになる。直感的にそう判断したロイドは、ふたりの間に割って入った。
「何をするつもりだ？　あんまり不穏なことは――」
「ああ、心配しなくても、君たちにも手伝ってもらうから」
　さらりととんでもないことを言われ、絶句するロイド。ワジは割り込んできたロイドに顔を近づける。
「――君たちの任務は、旧市街での事件を解決すること。だったらマフィアが今後、僕たちに余計な手出しをしないよう言い含めてやる必要がある……違うかい？」
「そ、それは……」
　ロイドは思わずたじろいだ。ワジの端正ながら迫力のある顔を目の前にしては、新米捜査官ごときでは太刀打ちできないのは明白だった。
　そんなロイドを遠巻きにしつつ、エリィたちは肩を寄せ合ってひそひそと話す。
「どういう事……？」
「……よく判りませんが……」
「なんかロイドのやつ、取って喰われそうだな……」
「ちょ、ちょっとランディ、そういう冗談は止めなさい！」
「……ワジさんなら、やりかねません」
「ティオちゃんまで！」
　彼女たちのやりとりを横目で見つつ、ワジはたじろくロイドに向かってにっこりと微笑んだ。
「あんな面白い推理をわざわざ披露してくれたんだ。責任……取ってくれるよね？」
「せ、責任!?」
「最後まで付き合ってもらうってことさ」
　ロイドは、ワジとヴァルドに話したことを、すでに後悔していた。

　それから三日後。
　一触即発、という雰囲気だったはずの不良グループたちは特に争うこともなく、旧市街は不自然なほど平穏だった。このことをほとんどの市民は歓迎したが、そうでない者たちも当然のようにいた。
　真夜中ともなると、旧市街入口にある広場には人気はまったくない。そこに、闇に紛れるかのように、黒いスーツの男たちが四人、集まってきた。ご丁寧に、黒いサングラスまでかけている。
　彼らは広場の中央に集まると、ひそひそと話を始めた。
「チッ……静かなもんだな。あそこまで仕込んだのに、どうして潰し合いが始まらない？」
　ひとりの男がイラついたように吐き捨てる。別の男が、気味悪く喉を鳴らして笑った。
「クク……最後の一押しが足りんだけさ。導火線に火が点けば、勝手に潰し合いが始まるだろう」
「バイパーとテスタメンツ、どっちのガキでもいい……目に付いたヤツをやるぞ」
「くれぐれも姿を見られるなよ？　バイパーならスリングショット、テスタメンツなら背後から一撃だ」
　残りふたりの男が、まったく感情を込めずに淡々と話す。

彼ら少年たちを人間扱いせず、兎や狐のように考えている。声の調子から、それが伝わってきた。そして、それを証明するかのように、喉を気味悪くならした男がつぶやく。
「クク……狩りの始まりだ」
　彼らにとってこれは人間を襲うのではなく、哀れな動物を仕留める狩りのようなものだったらしい。
　男たちはその言葉を合図にめいめいに散らばり、旧市街の暗い路地の中へと消えていった。

　それから数十分後。
テスタメンツの根城である店『トリニティ』からほど近い裏通り。そこを、青装束を着たひとりのテスタメンツメンバーが歩いていた。フードを目深にかぶり、ひたすら前を見て進む。
　しばらく歩くと、少し開けた場所に出た。倉庫の物などを一時的に置いておく荷物置き場だ。
　フードをかぶった人物が荷物置き場を歩いて抜けようとする。と、その背後に先程の黒いスーツの男のひとりが現れる。その手にはサーベルバイパーのメンバーが持つ、釘つきのこん棒が握られていた。
　男は大きくこん棒を振りかぶるが、フードをかぶった人物は前だけを向いているので気がつかない。そのまま男は、脳天にこん棒を振り下ろした。
「がっ！」
　悲鳴にもならない悲鳴を最後に、ばったりとうつぶせに地面に倒れる。動かなくなったことを確認するスーツの男。
「クク……青ウサギを一匹と」
　どうやら、先程の気味悪く喉を鳴らす男だったようだ。男があたりに目配せをすると、荷物の影から、他の三人の男たちも現れた。
「ハハ……あっさり掛かってくれたな」
「時間はない……とっとと痛めつけるぞ」
「ただし、殺さない程度にな」
　得物を前にして舌なめずりをする男たち。まさに『狩り』そのものだった。逆に、狩られることになるとも知らずに。
「クク……悪く思うなよ」
　男がそう言いながら釘つきこん棒を振りかざし、倒れている相手に振り下ろしたその時。
「——そうは行くか！」
　あたりにロイドの凛とした声が響き渡った。
　男の振り下ろしたこん棒を隠し持っていたトンファーで受け止め、そのまま身体を捻り、男の手からこん棒を振り落とす。男はのけぞりながら後ろに二、三歩下がり、間合いを取った。

　ロイドはかぶっていたフードを跳ね上げる。その頭は、頑丈なヘルメットで守られていた。
「……まったく。まさかここまで見事に引っかかってくれるとはね」
　黒いスーツの男たちが色めき立つ。
「ヘルメットだと……!?」
「な、何者だ!?」
　ロイドはヘルメットと、テスタメンツの青装束を脱ぎ捨てた。特務支援課の制服があらわになる。
「現行犯逮捕と行きたいところだけど……微妙に囮捜査くさいし、今回は無理か」
　ロイドの制服を見て、黒いスーツの男たちは、ようやく自分たちが罠にかかったことを理解したようだった。
「こいつ、まさか……」
「警察の人間か!?」
「フフ……彼はあくまで助っ人さ」
　自分たちの頭上から声がして、男たちが見上げる。二階建ての建物の屋根の上に、ワジ、エリィ、ランディ、ティオが立っていた。ワジなどは腰に手を当てるポーズまで取っている。すっかり役者の気分らしい。
「おーおー、本当にひっかかるとはなぁ」
「……なかなかの読みですね」
　ワジと共に悠長に構えているランディとティオ。一方、エリィはロイドの身を案じていた。
「ロイド、大丈夫!?」
「ああ……無傷だよ。かなりの使い手みたいだけど、油断してて助かった」
　ロイドのこの作戦には、ひとつの賭があった。相手は相当の使い手であり、そして使い手が夜闇に乗じて襲い掛かってくるとするなら、確実に脳天を狙ってくるであろう、と読んだのだ。だからこそロイドは、他の部位に関しては防具を着けず、ヘルメットだけをかぶることにした。そしてその読みは、見事当たったというわけだ。
「まさか俺たちの存在を嗅ぎつけられていたとは……」
　男のひとりが、忌々しそうにつぶやく。彼らの苦々しい表情を見て、ワジは満足そうな笑みを浮かべた。
「さてと……どうする、お兄さんたち？　この場で投降するなら大目に見てもいいけど」
　そこでいったん言葉を切り、氷のような冷たさで言い放つ。
「——それとも今度は、アンタたちが狩られてみる？」
　チッ、と男のひとりが舌打ちをする。
「二手に分かれるぞ！」
　別の男の一斉で、男たちがふたりずつ一組となり、脱兎のごとく駆けだした。

体を反転させ、もうひとりの男に狙いを定める。
　そのもうひとりの男は、ティオに向かって銃を構えようとしていた。
「間に合えっ……！」
　ランディが全力で駆けだすが、男が銃を出す方がわずかに早い。
　ティオに向かって銃口が向けられたその瞬間。
「——キミの相手は、僕」
　頭上から声がしたかと思うと、ワジが緑色の光をまとい、男に突撃した。男は銃を放り出して吹っ飛び、建物の壁に打ちつけられる。
「うひょー、魔法（アーツ）を直撃させるとはえげつねーな」
　軽口を叩くランディだが、その目は笑ってはいなかった。今の動きひとつとっても、あきらかに素人の動きではない。隠そうとしても隠しきれない、戦いになれた者の空気をまとっていた。しかし当のワジは、ランディの鋭い眼光などどこ吹く風といった様子だ。
「フフ……ブラフの一撃からの攻撃、しかも頭上からなんていう攻撃をかましているキミに言われたくはないね」
　ランディに向かってワジが微笑む。ランディが取った攻撃方法は、相手が確実に反撃してくる、と判っているからこそのものだった。相手が逃げることに専念するような相手なら、とっくに逃げ切られていた。しかし、相手はプロである。隙を見せれば、確実に反撃してくるとランディには判っていたのだ。
　しかもその方法は、平面に動く相手に対して、頭上からの攻撃という三次元軌道である。確実に相手を仕留めるための戦法だ。当然、猟兵団で培った戦法のひとつである。
「それにしても、女性を囮に使う戦法を取るなんてね」
「んまぁ～、ティオすけならなんとかすんだろ、って思ってたしな」
　そう言ってふたりはティオを見る。ようやく息を整えたティオが、いつものジト目でランディをにらみつけた。
「……なるほど。それでは今度からランディさんがピンチになっても『なんとかすんだろ』と思うことにします。一切助けません」
「ちょ、待てよ！　そういうことじゃ……」
「あはははっ！」
　ワジの笑い声が、旧市街の裏路地に響いた。

　もう一組の男たちは、旧市街入口にある広場まで逃げてきていた。暗闇に包まれたあたりを警戒しながら、来るはずのないもう一組を待っている。
「クソ、まさか腰抜けの警察が出張ってきてるとはな……。

こうなったらいったん戻って応援を——」
　そこまで口にし、もうひとりの男があわててまくしたてる。
「ま、待て！　こんな失態、若頭にでも知られちまったら……！」
　今回の一件は、どうやら彼らの独断だったらしい。助けを頼めない事情があるようだった。そのことを思い出し、チッと舌打ちをする。
「まあいい、とにかく俺たちだけでも先に——」
「先に、どこに行くんだァ？」
　どう猛な声がして、男たちがそちらを向く。暗闇の中から、赤い獣がぬっと現れたように男たちには見えた。それは、愛用の木刀を背中に背負った、ヴァルドの姿だった。
「なっ⁉」
　反射的に男たちは逃げようとする。ちょうどそこに、ロイドとエリィが駆けつけた。
「……ここまでだ」
　数セルジュの間を開け、ロイドたちと男たちが対峙する。男たちの背後では、ヴァルドがニタニタと笑い、事の成り行きを見守っている。
　旧市街でも屈指の不良グループの頭（ヘッド）と、腰抜けの警察官。彼らがどちらと戦うかは、明白だった。
　わずかな沈黙の後、男たちは同時に動いた。ひとりが懐に手を入れ、銃を取り出そうとする。その時、一発の銃声が響いた。エリィの早撃ちが、男が手にしていた銃をはじき飛ばしたのだ。
「ちいっ！」
　もうひとりの男はそれを認識し、銃を撃って無防備になったエリィに狙いを定める。得物の釘つきこん棒を持ち、ダッシュで一気に間合いを詰めようとしたところに、トンファーを持ったロイドが立ちはだかる。
「らあっ！」
　ダッシュの勢いを乗せたこん棒が、ロイドの頭上に振り下ろされる。それを、両手のトンファーで受け止めた。金属がこすれ合う耳障りな音に、男とロイドの荒い息が混じる。
「この……っ！」
　なよなよとした優男を一撃で吹き飛ばし、女の方に突撃する、という計画が見事に崩された男は、歯ぎしりをする。しかし、こうして組み合っている以上は、向こうも手出しはできない。男がそう思った時だった。
　ロイドが左手をスッと下げつつ手首を捻る。と、男が突然悲鳴を上げた。
「ぎゃっ！」
　男がこん棒を落とす。その隙を逃さず、ロイドは右手のトンファーで男の腹に一撃を加えた。こん棒と仲良く並ぶよう

「ま、待て！」

ロイドは完全に不意を突かれ、声をかけることしかできない。そんな彼の前方に、ワジがスッと降り立つ。その仕草があまりに軽やかで、建物の屋上から飛び降りてきたことを忘れてしまう。

「――ふたり、ついてきて」

ロイドの方を振り向かずにそう言い、そのまま逃げた片方の組を追いかける。ロイドが声をかけようとした時には、ワジはすでに暗闇の中に姿を消していた。

「くっ……！」

何から何まで相手とワジのペースだ、とロイドは焦る。

「ロイド、どうするの⁉」

頭上からの声に見上げると、屋上から心配そうに見守るエリィの姿があった。その隣には、ランディとティオも並んでいる。

焦っている暇はない。今はあの男たちを、なんとしてでも捕まえる時だ。ロイドは瞬時に頭を切り換え、最適なチーム分けを考える。

「エリィ、俺と一緒に来てくれ！ ランディとティオは、ワジと一緒に！」

「わかったわ！」

「がってん承知の助！」

「了解です」

返事と共に、エリィが屋根から下に降りるために建物の裏手に回り込む。ランディは膝をつき、ティオを抱えるような仕草をした。

「ほれ、ティオすけ」

一瞬どうしたものか、と躊躇したティオだったが、今は少しの間も惜しいと判断したのだろう。

「……はい」

素直にランディに抱きかかえられた。いわゆる、お姫様だっこ、というやつだ。

そのままランディは屋根の上からジャンプし、ロイドの近くに着地する。

「このまま走ってくか？」

「……いえ、自分で走れますので」

幾分かむすっとした表情のティオ。子供扱いされたと思ったのだろう。ランディが丁重に地面に降ろすと、そのままワジを追って駆けだしていってしまった。

ランディはロイドに向かって、無言で肩をすくめる。

「おまえらも気をつけろよ！」

そう言って、ランディはティオの後を追って駆けだした。

「ロイド！」

その声に振り返る。ふわり、とパールグレイの髪が夜の闇に輝く。エリィがやってきたのだ。

「よし行こう、急げばまだ間に合う！」

ロイドはエリィと共に、もう一組の男たちを追いかけるため、駆けだしていった。

ワジの後を追いかけていったランディとティオは、路地裏を駆け抜ける黒いスーツの男たちの後ろ姿を捉えた。しかし、ワジの姿は見当たらない。

「やっこさん、どこいきやがった？」

「分かりません……！」

走りながらも普通に会話できるランディに比べ、走るので精一杯なティオは返事をするのがやっとだ。

このままだと巻かれる、と判断したランディは、先手を打って捕らえるべきだ、と瞬時に判断する。幸い、ここは裏路地でもそこそこの道幅がある。しかけるにはもってこいだ。

「ティオすけ、合図で一発なんかぶちかましてくれ」

「はぁ、はぁ……！」

必死に走りつつ、杖を掲げる。いける、というサインだ。

ランディはその様子を見て、こいつ、結構根性あるんだよなぁ、などとどうでもいいことを考えていた。

「三、二、一……ＧＯ！」

「はあっ！」

走る速度を緩めながら、ティオが魔導杖(オーバルスタッフ)を振るう。その杖の先から、電撃がほとばしり、十数セルジュ先の男たちに向かって飛んでいく。

それと同時に、ランディは全身のバネを使い、大きく跳躍した。

黒いスーツの男ふたりは、まるでタイミングを合わせたかのように左右に分かれ、弧を描くように反転する。分かれたふたりの間を、ティオが放った電撃が通り過ぎていった。男たちの視線の先にあるのは、電撃を放って完全に無防備になったティオだ。

「マヌケがぁ！」

そう言ってティオに襲いかかろうとした男の頭上に、今度はランディが襲いかかる。あらかじめ跳躍していたのは、このためだったのだ。

「おうら……よっ！」

ランディのスタンハルバードが振り下ろされ、男の背中を一撃する。

「ぎゃっ！」

無防備な背中に衝撃を受け、男のひとりがそのまま地面につっぷした。

ランディは振り下ろした勢いで空中で一回転し、そのまま地面に着地する。しゃがみ込んだ体勢から立ち上がりつつ身

な形で、どさりと男が倒れる。
　あまりの早業にあっけにとられるエリィ。早撃ちで動体視力には自信があったが、ロイドが何をしたのか、よく判らなかったのだ。
　うずくまる男にロープをかけているロイドの元に、ヴァルドが近づいてくる。
「ヘッ……そんな隠し球があるとはなァ。ヘンな形をしてやがると思ったら、そういうことかよ」
「どういうこと？」
　どうやらさっきのロイドの不自然な動きのことを言っているようだった。もうひとりの男にもロープをかけ終わったロイドが、エリィに説明をする。
「このトンファーは、短い方で突くのがメインの使い方なんだけど……」
　そう言いながら、エリィによく見えるようにトンファーをかかげる。
「持ち手を回転させることで、相手に不意打ちを食らわすことができるんだ」
　ロイドがトンファーを構えた体勢のまま、手首を軽く捻る。と、トンファーが持ち手の部分を起点に回転し、弧を描いた。トンファーが風を切る音は鋭く、まるで短い鞭がしなるような動きだ。さっき男がこん棒を落としたのは、この動きで右手を強打されたからだったのだ。
「なんでそんなにリーチの短い得物を使ってやがるんだと思ったが……ククッ、とんだ喰わせモンじゃねぇか！」
　ヴァルドは心の底から愉快そうに笑った。その目はギラギラと輝き、闘争本能の火がついていることが一目で分かる。
「オイ、もう一度オレとやれ。この前のタイマンじゃ、今の技は使わなかったしなァ……！」
「言っておくが、もうアンタと戦うつもりはない」
　好戦的なヴァルドを言葉でいさめつつ、トンファーを腰に吊す。ヴァルドはそれを見て、チッと舌打ちをした。
　ロイドが見せた技は、相手を騙し、不意を突くための技である。その手の内がバレてしまった相手には、なかなか通用しにくい。もちろん、この技があることを知っている相手は警戒し、その動きに制約が出る。それを活かした戦い方もできるのだが、そのことはヴァルドには黙っていた。
　ロイドの技に目を見開いていたエリィだが、何かを思いついたようだった。
「ねぇ、ロイド。ひょっとして、テスタメンツの格好をして囮をするっていうのも……」
「あぁ、そうだよ。よく分かったな、エリィ」
　今度はロイドが驚く番だった。相手が思いもしない行動をし、不意をつく。戦闘術としてトンファーを学ぶ中で、自然

と身についた考え方を応用したのが今回の作戦だったのだ。だが、それを今の説明だけで結びつける、というあたりに、エリィの非凡な才能が垣間見えた。
「でも、囮役なんて危険よ。こっちは気が気じゃなかったわ」
「ご、ごめん……」
　エリィのたしなめるような声色に、思わず反射的に謝ってしまうロイド。どうやら、女性のこういう言動には逆らえないらしい。
「でも、囮なんて役目、他の誰かにやらせる訳にもいかないし」
　ワジからこの作戦の提案があった時、まっさきに囮役に手を上げたのはロイドである。『リーダーが率先して危険な役回りをするべきではない』というエリィたちの反対意見も、『大丈夫だから』のひと言で押し切ってしまった。
「フフ……そんなお人好しじゃ、この先大変だと思うけどねぇ」
　突然したワジの声に、ロイドたちが振り返る。ワジは、両肩にのびている男を抱えているランディと、ティオを引き連れて広場にやってきた。ロイドがロープをかけた男たちの横に、ランディが抱えていた男を転がし、パンパンと手を払う。
「ワジ、それにふたりとも、無事だったのか」
「心配してくれたのかい？　うれしいなぁ」
　そう言いつつ、ロイドに異様に接近するワジ。エリィはギョッとした顔になり、ティオは自然とジト目になる。
「ワ、ワジ⁉」
「フフ……優しいね。キミみたいなタイプ……個人的には嫌いじゃないかな」
　ロイドが、声にならない声をあげる。ワジは不敵に微笑み、ロイドを至近距離で見つめていた。
　エリィの横に並んだティオとランディが囁きあう。
「おい、やっぱり取って喰われるんじゃねーか？」
「そ、そんな！　だって相手は男の子よ！？……とっても美形だけど……」
「ロイドさん……来るもの拒まず、ですね」
　一気に緩んだ空気を吹き飛ばすかのように、ヴァルドが吠える。
「おい！　で、こいつらどうすんだよ⁉」
「そ、そうだった！」
　その声で我に返ったロイドはワジの側をそそくさと離れ、のびている男たちの元へとかけよった。へたり込んだ男のひとりが、うめき声をあげながらロイドをにらみつけた。

翌日。

ロイドたちは朝食後、支援課ビルの一室にある課長室に集まっていた。セルゲイはロイドたちの報告を、デスク越しに聞いていた。

「男たちが持っている銃器は帝国製の最新式軍用拳銃でした。これはルバーチェの密貿易で扱っている武器だと思われます。彼らは、自身のバックボーンをちらつかせながら恐喝めいた言動を繰り返していました」

「だろうな。で、どうやって説得して、今後手出し無用とお引き取り願ったんだ?」

「それは……」

それまでよどみなく報告をしていたロイドが、言いにくそうに言葉を途切れさせる。その様子に、セルゲイがいぶかしげな表情を浮かべた。

「……グレイスさんです」

ロイドの代わりに、ティオが発言する。

「グレイス? あぁ、あのクロスベルタイムズの記者がどうかしたのか?」

「はい、あの……クロスベルタイムズに、今回の一件の顛末を書くと」

ロイドの声の張りがどんどんなくなっていく。

「ペンは銃よりも強し、ってところか? しかし、それで黙るルバーチェでもないだろう。奴らなら、圧力をかけて雑誌を出せないなんて芸当も可能だ」

「はい、似たようなことを言っていました」

「……トドメはなんだったんだ?」

セルゲイの確信をついた言葉に、ロイドは観念して口を開いた。

「……遊撃士の介入があるかもしれない、というグレイスさんのひと言です」

セルゲイは無言のまま、ロイドを見つめる。エリィが補足するように続けた。

「実は今回の件、遊撃士のアリオス・マクレイン氏も介入するつもりだったそうなんです。ですが、多忙であることと、私たちが先に介入していることを理由に今回は譲る、と……」

「まぁ、また手のひらの上ってか?」

「ちょっと、ランディ」

ランディのおちゃらけた調子を、エリィがたしなめる。

「クク――ふははっ!」

突然セルゲイが笑い出し、ロイドたちは驚いて見つめる。肩を小刻みに揺らしながら、セルゲイが愉快そうに言った。

「なるほど、アリオス・マクレインの名前を出して丸く収まったと。そいつは報告しづらいだろうな」

「すみません……」

ロイドはますます小さくなって、セルゲイに頭を下げる。

「何も謝ることはねぇよ。――それとも、自分たちだけで解決できなかったことが、そんなに不満か?」

セルゲイの言葉にドキリとする。それと同じ事を、グレイスにも言われたからだ。彼女は立ち去る間際、こんな言葉を残していったのだ。

『ふふ、自分たちだけで解決できた気になれない……そんな気分ってところかしら?』

『小さい、小さいわねぇ。必要とあらば、ためらわずに他人の力も借りてより大きな真実を掴み取る……それができてこそ、一人前の捜査官じゃないの? ――あなたのお兄さんみたいな』

またも、兄の名前が出てきた。その背中は大きく、ロイドはまたも自分の無力さを思い知った。誰にも気づかれぬよう、そっと拳を握りしめる。

「しかし、だ。そのグレイスって記者は、相当やり手だな」

セルゲイは、あえてのんきなトーンで話し始めた。彼なりの思いやりなのだろうか。

「はい……彼女の持つ情報網は、かなりのものだと、今回情報交換などを通じて思いました」

「そうじゃねえよ」

ロイドのきょとんとした顔を見て、セルゲイがあきれたように言う。

「アリオスが本当に今回の事件に関わろうとしてたって、誰か確認したのか?」

「それは……」

セルゲイの言葉に、ロイドたち一同がぽかんと口を開ける。

「つまり……すべてグレイスさんの虚言だったと?」

「そこまでは分からん。本当にアリオスが関わろうとしてたのかもしれないし、嘘かもしれん。だが、重要なのは、実際にルバーチェの動きを封じた、ってことだ」

エリィが頬に手をあて、考えながらつぶやく。

「もし虚言だったとしても、後日アリオスさんと会った時に話をすればいいわけよね。『介入しようとしていたことにしてください』って。そうすれば万事解決する……」

「とんだペテンですね……」

「けど、そういうハッタリも案外重要なんじゃねーの?」

腕組みしながらニヤリと笑うランディ。その言葉に、セルゲイもうなずく。

「おまえらにも、正攻法だけじゃうまくいかないってのはよく分かっただろう。ま、今回の一件、いろいろあったが……新人にしちゃあ頑張ったほうじゃねえか?」

「はい……」
　がっくり肩を落としているロイドに、エリィたちが声をかける。
「そんなに落ちこまないで、ロイド」
「新人だけで事件が解決できただけでも上出来なんじゃねーの？」
「はい……胸を張っても、よいのではないかと」
　みんなに励まされながら、仲間にこれだけ気を遣わせてしまうリーダーってどうなんだろう、とロイドは思った。
「しかし、今回の一件でおまえらにも見えてきただろ。このクロスベルって場所のやっかいな側面が」
　セルゲイのトゲのある言葉に、ロイドが顔を上げる。それは、と言い、そのまま口ごもってしまった。
「まぁ、確かにちょいと面倒くさい場所みたいだな」
「さまざまな暗部やしがらみ……大人の事情の温床って感じです」
　余所者であるランディは客観的に、ティオは幾分かの嫌悪感をこめて感想を述べる。
「……そうね」
　ふたりの言葉を受けて、エリィが深刻そうにうなずく。この街で生まれ育ち、両親も祖父も政治家である彼女からすれば、彼らの言葉にはうなずかざるを得ず、また反論できないもどかしさがあった。
　セルゲイはタバコに火をつけてふかした。紫煙があたりに漂う。
「警察本部の連中だって決して無能ってわけじゃない。賄賂を受け取ってるようなバカ野郎もいるみたいだが……多くの捜査官は、そこそこ優秀で自分なりの正義感を持ってる連中だ」
　そこまで言うとセルゲイはタバコを手にしたまま立ち上がり、デスクを回ってロイドたちのほうへと歩いてきた。
「だが……有形無形の『壁』がある。マフィアの利権とつながっている議員や政治家どもとかな」
　その言葉に、エリィたちは黙り込んでしまう。今回の事件は、まさにそのマフィアと対峙したのだ。この街の『壁』に直接ぶち当たったと言ってもいい。
　セルゲイはもう一度タバコをふかし、ロイドに尋ねた。
「どうだ、ロイド？　警察辞めて遊撃士にでも転職したくなってきたか？」
　その顔はシニカルな笑みをたたえていた。
「……いえ。そんな事情があっての『特務支援課』でしょう？」
　ロイドはそう言って、まっすぐセルゲイを見つめ返した。その瞳はまっすぐで、顔には強い決意が表れている。セルゲイの表情とは、正反対のものだった。

　面白いものを見た、といった風に、セルゲイの表情が軽い驚きに変わる。
「ほう……」
「『人を守る』——遊撃士の理念は確かにすばらしいと思います。ですが、それだけじゃ解決できない問題も当然あります。密貿易に違法な武器取引。盗品売買にミラ・ロンダリング。そしてマフィアと政治家の癒着……どれも遊撃士が直接には介入できない問題です」
　ランディが、確かに、と言いながらうなずく。
「『支える籠手』の力にも限界はあるという事ですか……」
　ティオがロイドの言葉に同意するようにつぶやく。『支える籠手』とは、遊撃士教会の紋章のことであり、遊撃士そのものを指す言葉でもある。
「——でも、警察なら本来それが可能なはずです。現実として、さまざまな壁が立ち塞がっていたとしても……そうした壁を突破できる可能性はゼロじゃないはずだ」
　ロイドの言葉に、エリィの表情が少し明るいものとなる。
「遊撃士が介入できない、解決できない事件も、支援課ならその可能性を見出せるかもしれない……つまり、そういうことね？」
　エリィの方を向き、ああ、と力強くうなずく。しかしすぐに、弱気な気持ちが首をもたげてしまったらしい。
「ちょっと楽天的すぎるかな……？」
「……現実はそこまで甘くないと思いますけど」
　いきなりティオにチクリとやられ、苦笑するロイド。しかし、ティオはふっと表情を緩め、微笑んだ。
「ただ、どんな可能性もゼロでは無いのは確かです」
「ティオ……」
　思いがけない言葉にロイドが驚く。そんな様子を見て、ランディがあきれつつも愉快そうに笑った。
「やれやれ……不良の頭とタイマン張ったり、危険な囮役を買って出たり……真面目で大人しそうな面して大した熱血野郎だぜ」
「別に熱血ってわけじゃないと思うけど……」
　軽く頭をかくロイド。ふと真面目な表情になって、かみしめるように言葉を紡いだ。
「——でも今回、みんなと一緒に仕事をしてて改めて思った。お互い、まだまだ未熟なところはあるだろうけど……」
　話しつつ、エリィたち支援課のメンバーを見回す。
「このメンバーだったらどんな壁も、力を合わせて乗り越えて行けそうだってね」
　その言葉に、エリィ、ティオ、ランディの三人は、一瞬虚を突かれた。
「ロ、ロイド……」

おいて、それがどれほど困難か、分からないロイドではない。そして、それをやりとげるだけの技量と才覚を、自分の上司が持ち合わせているだろうことも、ロイドには分かりつつあった。

「ふふ……要するに放任主義ですか」

「ったく、話が判るんだか、いい加減なだけなんだか」

「と言うより、ただ面倒なだけでは……？」

　そのあたりの事情を知ってか知らずか、エリィやランディ、ティオなどは好き勝手に言っている。だが、この自由に発言できる空気こそが、支援課の強みなのだと、ロイドは理解していた。

「ま、ズルイ大人だからな」

　そう言って、セルゲイは二本目のタバコに火をつける。

「『特務支援課』が単なる遊撃士のパクリで終わるか。それとも新たな可能性を見出すことができるのか。――俺は煙草でもふかしながら、せいぜい眺めさせてもらうぜ」

　セルゲイはタバコを吹かす。目を細めたのは、タバコの味のせいか、ようやく走り始めたひよっこたちを見守ることの楽しさのせいか。

「そんじゃま、こっちはせいぜい給料分ぐらいは頑張るとしますかね」

「ランディ。――それでは課長」

頬を赤らめるエリィ。

「はは……なんつーか。」

　頭をかき、視線をそらすランディ。

「……クサすぎです……」

　ジト目になりつつも、どこか楽しそうなティオ。

「え、あの……」

　自分の言葉が予想外の反応を引き起こして戸惑うロイド。

「ククク……ハーッハッハッハッ！」

　そんな彼らを見て、セルゲイはこらえきれず爆笑した。

「そ、そんな笑わなくても。えっと……さすがに夢見すぎですか？」

　セルゲイは笑いをこらえつつ、タバコを灰皿に押しつけた。

「クク……まあ、いいんじゃねえか？　『特務支援課』が設立されたのは色々なしがらみによるもんだが……その場所をどう利用するかはおまえたちの自由っちゃ自由だ」

　そう言って、今度は声を出さずにニヤリと笑う。

「俺は直接、おまえたちに力を貸すことはないだろうが……やりすぎちまってもお偉いさんににらまれないよう、ケムに巻くくらいはしてやるよ」

「課長……」

　無茶をしてもバックアップしてやる、と言外に言っているのだ。『色々なしがらみ』によって設立された特務支援課に

「うむ」
　セルゲイはふかしていたタバコを灰皿に起き、姿勢を正した。ロイドたちもそれにならい、気をつけの姿勢になる。
「不良グループの対立に関する捜査任務の終了を確認した。現時刻をもって、特務支援課は通常任務に復帰とする」
「了解！」
　ロイドたちの敬礼に、セルゲイも敬礼で応える。
「それじゃ行こう、みんな！」
「ええ！」
「……了解です」
「うっし、今日もやるか！」
　ロイドを先頭にエリィ、ティオ、ランディと続く。そのまま部屋を出て、支援課ビルの玄関へと向かう。
　玄関のドアを開け放つと、外は青空だった。心地よい風も吹きこんでくる。まるで、世界が彼らを祝福しているかのようだった。
　その中を、ロイドたちは小走りに駆け出していく。多くの人が行き交い活気あふれる街、クロスベルへと。
　仲間と共に街を歩きながら、ロイドは思った。
　これから先、いくつもの壁が立ちはだかるだろう。その前で、呆然となり、自分の無力さに打ちのめされる日が来るかもしれない。
　だが、それでも。
　仲間と共に走り続け、壁に挑戦し続けることが、今の自分にできるすべてなのだ、と。
　クロスベルの街の中を、ロイドたち特務支援課が駆け抜けていく。
　空はどこまでも蒼い。大きな雲がクロスベルの街を覆い、そして雲は風に流され、その形を変え、ちぎれていく。
　この世界では、空の女神（エイドス）が、はるか天空から人々を見守っているという。
　その女神の住まう世界から下界を見下ろせば、大地は緑深く、海は碧い。唯々、美しい世界が広がっているように見える。
　だが、実際は違う。
　美しい世界にすべく、日々悩み、あがき、戦う人々が、そこに暮らしているのだ。

第六章　抗争の疑惑（後編）　了

小説版 零の軌跡 ショートストーリーズ

田沢　大典
Illustration　松竜

ロイドの章（前編）

その日、彼女が《それ》を拾ったのは、まったくの偶然だった。

クロスベル警察に特務支援課が作られ、そこにロイドたちが配属された時より、数年前。

クロスベルも今ほど隆盛ではなく、しかしそのバブルとも言える繁栄の萌芽が芽吹きはじめた頃である。

街にはようやく導力車が少しは行き交うようにはなったが、大変高価で、庶民には決して手の出るものではなかった。今は乱立している高層建築も、当時は少ないものである。とはいえ、二、三のビルが、人々の衆目を集めていた。

大通りですらその状況なので、市街地に入ってしまえば、今のクロスベルと変わらない、生活感あふれた街並が広がっている。

そんな住宅街の少し開けた広場で、彼女は《それ》を拾った。もっと正確に言うと、奪った。

「んんんんん……？」

大きくてくりくりした目をまん丸に見開いて、《それ》を見つめているのは、十二、三歳ぐらいの少女だった。

服はデニム地のオーバーオール。たくさんポケットが付いていて、汚れても平気で、しかも楽。彼女にとって洋服とはオシャレに着飾るものではなく、用を為せばそれでよい、というものだった。そのオーバーオールの中には、着古したTシャツ。首元が少しくたびれている。

やや短めの茶色の髪は後ろで縛られていて、キャップを前後逆にしてかぶっている。パッと見は、少女というより少年に見えなくもない。

彼女の横では、《それ》を取られたらしい猫が、抗議の声をあげていた。

とはいえ、彼女の耳にはまったく届いていない。彼女は興味のあるものを見つけると、周りのことがまったく気にならなくなってしまうのだ。

たとえ、友だちふたりに大声で話しかけられたとしても、である。

「ウェンディ、ウェンディ！」

「おーい、もしもーし」

声をかけていたひとり、背が少しだけ低い方の男の子に肩を揺さぶられ、ウェンディと呼ばれた少女はようやくその存在に気がついたようだった。

「あら、ロイドにオスカー。いたの？」

「さっきからずっと呼んでたんだけど？」

そう言って、ロイドと呼ばれた少年はむくれる。

茶色の髪に、男としては少し長めの襟足。髪型こそ十八歳の頃と変わらないが、その顔つきはまだ幼く、少年の面影を多分に残している。

服装はTシャツの上にシャツを羽織り、下はカーゴパンツ。動きやすい服装でまとめている。

「ウェンディは夢中になるといっつもだからなぁ～」

そう言って、オスカーと呼ばれた少年がヘラヘラと笑う。

背は少しロイドより高い。紫色がかった髪に、整った顔立ち。美形、というほどのインパクトはないが、年の割には大人びた雰囲気を持った少年である。

カットソーにチノパンという、やや落ち着いた服装も、大人びた雰囲気を醸し出すのに一役買っていた。

とはいえ、今のように笑うと年相応の少年のあどけなさを見せる。

「で、何をやってたの？」

「ずいぶんと熱心に見てたけど……」

ふたりの問いかけに、ウェンディは勢いよく手のひらを指しだした。

「これよ！」

「これは……」

それは、細長い筒状の形をしていた。長さはウェンディのような子供の手から少しはみ出るぐらい。先端がとがっている。材質は鉛だろうか、金属でできていた。もし鉛色をしていなければ、使い込んで短くなった鉛筆のようにも見えた。

「何？」

オスカーの問いに、ウェンディは首をひねる。

「わっかんない」

そう言ってから、ウェンディは首を振った。

「いや、『思い出せない』というべきかしら。なんか見覚えはあるんだけど……」

それだけ言って、うーん、とうなってしまう。こうなると、ウェンディは何がなんでも思い出そうとして、延々つきあわされることを、ロイドとオスカーは短くないつきあいの中で知っていた。

「どこで見たんだっけかな……おじいちゃんの工房……いや、違うな……本？」

案の定、ウェンディは思考の迷宮に入り込みかけていた。

こういう時は、先手必勝。話題をそらすに限る。これもまた、ロイドとオスカーがつきあいの中で学習したことだった。

「ところでさ、ウェンディ！　これ、直してくれよ」

オスカーが手にしていたものを差し出す。それは、ピストル型のおもちゃだった。ロイドたちの間で、おもちゃ型のピストルが流行っていたのだが、これにウェンディが改造をして、輪ゴムを飛ばせるようにしたのだ。架空の弾を撃って遊んでいた彼らにとって、それは革命的なことだった。が、これは日曜学校のシスターの怒りを大いにかってしまい、ほとんどの子どもたちが強制的に廃棄させられていた。

オスカーが持っているのは、その『ピストル狩り』を逃げ延びた数少ない生き残りである。オスカーとロイドはこれで射的をし、ポイントを競いあうのが最近のお気に入りの遊びだった。

「まーた壊したの？」

「壊したんじゃないよ。壊れたんだ」

「同じことよ。どうせ、当たらないからってあちこちいじくって壊したんでしょ」

図星なのか、オスカーがばつが悪そうに黙りこくる。

「まあまあ。とにかく、ウェンディにしか直せないから、頼むよ」

ロイドが取りなす。この三人の関係性は、ウェンディがつっぱしり、オスカーが笑ってそれを見、ロイドがだいたい後片付けをする、というものだった。

ウェンディにしか直せない、というところに技術者マインドをくすぐられたらしい。ウェンディは少し機嫌を直したのか、オスカーの持っていたピストルを手にした。

「まったく、しょうがないんだから……」

ウェンディは手にしたピストルを凝視した。あまりに凝視しすぎてより目になってしまうほどだ。

いったい何があるのか、思わずロイドとオスカーも身を乗り出して、ピストルを見つめる。

「これだー！」

いきなりの叫び声に、ロイドとオスカーはひっくり返った。

そして奇声をあげ続けるウェンディ、その様子を猫だけが眠たそうに見ていた。

ウェンディの実家は、工房である。

クオーツの扱いはもちろん、その他メカ部分のメンテナンスも行える、評判の技師がウェンディの祖父だ。

その祖父の工房には、山ほどのパーツ、何に使うのかわからないがらくた、クオーツ、設計図と膨大なメモ、そしてゴミとも部品ともつかない何か、が渾然一体となって存在していた。一度オスカーが『がらくたの宇宙』という詩的な表現をしたことがあったが、ウェンディはその表現がお気に召さないようだった。

ウェンディは、幼い頃からこの工房を遊び場としてきた。技術者として気むずかしく頑固と評判だったウェンディの祖父も、孫娘はかわいかったらしく、彼女がこの工房で遊び回ってもほとんど文句のひとつも言わなかった。

やがてウェンディは祖父の見よう見まねで工具をいじりだし、父親のフェイからもらった鉄道の導力オモチャを分解・改造するなどして、いつの間にか機械に関して一通りの知識を身につけるにいたった、というわけだ。

そんな祖父の工房に、ロイドたち三人はいた。ウェンディは散らかった机の上に無理矢理スペースを作り、大きくて分厚い本を広げていた。工房には、機械に関する書物も山と積まれており、壁の二面ほどを本棚が占拠していた。もっとも、その本棚の前にもよくわからないがらくたやパーツ、さらには買い足した本などが積み重なっており、目当ての本を探すまでロイドとオスカーはひと仕事をしなくてはいけなかったが。

ウェンディが読んでいたのは、かなり年代物の本で、大量の挿絵が描かれている、いわば図鑑のようなものだった。そこに書かれている機械も、ロイドやオスカーには見慣れないものばかりである。ウェンディはその挿絵ひとつひとつと熱心に見比べていた。ロイドとオスカーはというと、ウェンディの邪魔をしないように本を横目で見つつ、作業を見守っている。

「……違う……これは……うーん……」

ペラリ、というページをめくる音と、ウェンディの小さな独り言しかしない工房で、ロイドは昔のことを思い出していた。この工房にはじめて足を踏み入れたのは、自分がもっと幼い頃だった。その頃まだウェンディとは友だちではなく、それどころか大げんかをしたのだ。その時にいろいろとあって、ロイドとオスカーとウェンディの三人は、お互いの大切なものを見せ合う、という儀式を経て友だちになった。ウェンディが見せたのが、この工房だったのである。ウェンディの祖父、つまりおじいさんは、近所でも評判のこわいおじい

さんであり、ロイドとオスカーはここに入ることをずいぶんとためらったことを覚えていた。

そういえばあの時は……とロイドが記憶を呼び起こそうとしたその時。

「見つけた！」

ウェンディの弾けるような声に、ロイドとオスカーが顔を上げる。ふたりが覗き込むと、ウェンディは本のページにある挿絵を指差した。

そこには、ウェンディが手にしている、あの短い鉛筆のような謎の金属と同じイラストが描かれていた。

「これよこれ！ 前におじいちゃんに、これが何かって聞いたことがあったから覚えてて！」

ウェンディは、ずっと気になっていたことが分かってスッキリしたのか、とても晴れやかな表情だ。しかし、ロイドはそこに書かれている文字の方を追いかけて、怪訝そうな顔をした。

「銃弾……？」

「銃弾ってわりには、ずいぶん不格好だよなぁ」

オスカーの言葉に、ロイドもうなずく。ロイドの兄は捜査官で、当然本物の導力銃も持っている。その弾を見せてもらったことがあるが、もっと短いし、なにより短い鉛筆のような形はしていなかった。

そのことをロイドが尋ねると、ウェンディは本のある部分を指差した。

「これは銃弾でも、火薬式のものなのよ」

「火薬……？ それって、花火とかで使う、あれか？」

ウェンディがうなずく。

「銃といえば導力式が普通だけど、ごく一部で火薬式も使われているの。というか、実は火薬式の方が古いのよね」

「古い……ひょっとして、導力革命より前の話？」

ロイドは日曜学校で習った歴史の授業を思い出しながら尋ねた。その言葉に、ウェンディがうなずく。

「そうそう。火薬式って威力はすごいらしいんだけど、メンテナンスが大変だし、使い勝手も導力式と比べて悪いから、使うのはよっぽどの酔狂な人間だって、おじいちゃんは言ってた」

そこで言葉をいったん区切り、眉をひそめて言った。

「……あとは、猟兵団（イェーガー）ぐらいだって」

猟兵団という単語を聞いて、ロイドとオスカーはギョッとした顔をする。猟兵団とは、荒事を専門とする傭兵集団のことだ。その名は畏怖と侮蔑の対象である。クロスベルという街は国際貿易都市なので、猟兵団が流れて来てトラブルを起こすことも、極まれにだがあった。なので、他の街の子どもたちに比べ、より実感を持って恐ろしさを感じていた。

ロイドは、ウェンディの持っている銃弾を見つめる。もしこれが、猟兵団が関連することに繋がるものだったとしたら。そう考えると、背筋がスッと寒くなる。しかし、それと同時に、抑えきれない好奇心を感じていることもまた、事実だった。

オスカーもまた同じようなことを考えているらしく、わずかの恐れと、あふれんばかりの好奇心の目を、銃弾に向けていた。

「じゃあその中には、火薬が詰まってるのか？ バーン！ っていきなり爆発しちまうとか？」

オスカーの問いかけに、ウェンディはあきれた様子で答える。

「そんな簡単に爆発したら、扱いにくくてしょうが無いでしょ。よっぽど強い衝撃を与えない限り大丈夫よ。……って、本には書いてある」

自信満々に答えていたが、最後は少し自信なさげだ。あくまで知識として知っているだけ、という点では、ウェンディの言葉も心許ない。

「う～ん……でもこれ、なんかおかしいのよね」

おかしい？ というロイドの問いかけに、ウェンディがうなずく。

「よく見て。おじいちゃんの本に載ってるこの銃弾と、形が違うのよ。ほら、先っぽがちょっと丸くなってるでしょう？」

ウェンディの言うとおり、本に載っているものと違い、ウェンディが拾った銃弾は、先が少し丸くなっていた。

「おじいちゃんの本、すっごく古いから……もしかしたらその後に作られたものかもしれないわね」

そう言って、ウェンディはポケットに銃弾をしまった。

「それじゃ、行きましょう」

「行くって、どこへ？」

オスカーの問いかけに、ウェンディはあきれた様子で答える。

「図書館に決まってるでしょう？ もっとくわしく、この銃弾のこと、調べないと！」

クロスベル市立図書館。クロスベル自治州の中でも、最大の規模を誇る図書館である。

重厚な作りの建物の中には、国内外問わず蔵書であふれていた。国際貿易都市らしく、クロスベル以外で書かれた書物も数多く所蔵されている。このあたりでは珍しい東方の文献なども豊富で、研究者にとっては垂涎の的でもあった。

そんな図書館に、ロイドたちはやってきていた。もちろん、例の銃弾を調べるためである。

遊びたい盛りのロイドたちにとって、図書館などは退屈な場所であり、普段はあまり来ることもない。なので、見るも

のすべてが新鮮で、ロイドとオスカーはまるで観光客のようにあちこち見回していた。

「ちょっと、何してるのよ。こっちこっち」

そんな中、ウェンディひとりが勝手知ってるといった風に歩いて行く。どうやら、ここにはそれなりに来たことがあるようだった。

木製の大きな長机の一角を占拠し、ウェンディが荷物をどっかと置く。そしてそのまま、大人の背丈よりもさらに高い本棚へと向かった。ロイドとオスカーもそれにならって、あわててついていく。ウェンディは流れるような動作で、次々と本を指差した。

「あれと、あれ。あと、あの上にある、赤い背表紙の本。あれもね」

指差す本を順番に見ていたロイドとオスカーに向かって、ウェンディが怒る。

「あのねぇ、ボーッと見てないでどうすんのよ。取ってきて」

ふたりはそこでようやく、自分たちが小間使いとして呼ばれたことを認識したのだった。

ウェンディの指示に従い、脚立なども使って本をかき集めると、その冊数は十冊ほどになった。それを三人で手分けして、一冊ずつ当たっていく。例の弾丸と同じものを探すためだ。

だが、その試みはあっという間に失敗に終わった。そもそも火薬式の銃という珍しいものを扱う本自体が少なく、さらに『導力銃を解説した本が、巻末で少しだけ火薬式の銃も扱う』といった体のものがほとんどだったからだ。

ウェンディとオスカーはすでに自分の担当分を読み終わり、最後まで本を丹念に調べていたロイドも、本を閉じ、首を振った。三人は一斉にため息をつく。

「なんでないかなぁ……うーん、もっと技術書がいっぱいある図書館とかないかなぁ」

「ここにないのにー？」

ウェンディのつぶやきに、オスカーがだるそうに返事をする。クロスベル最大規模の図書館にないとすれば、ある見込みがありそうなのは、ツァイスの中央工房にある職人向けの資料室ぐらいだろう。もちろん、そこに行くためのお金も、資料室に入る肩書きも、ウェンディは持っていなかった。

うなだれているロイドたちを、本を抱えて歩く司書が怪訝そうな表情で見ている。ここは子どもの遊び場じゃないぞ、と顔に書いてあるようだった。微妙な居心地の悪さを感じながら、ロイドが声を抑えて話しだす。

「なぁ、これってさ……」

「偽物、なのかしらね」

ウェンディが間髪入れず答える。そして、机の上にある銃弾をボーッとながめた。
「マニアが職人に作らせた模倣品……ってところかしら。面白いものだとは思うけど、マニアにしか価値がないものよね」
すると、それまでだるそうにしていたオスカーが、顔をむくりとあげて言った。
「いや、これ多分本物だよ」
オスカーの言葉に、ウェンディが鼻で笑う。
「なんでオスカーに分かるのよ」
「だってさ、見た感じ本物じゃん」
オスカーの当を得ない言葉に、ウェンディがイラっとした表情を向ける。
「それってただのカンじゃない」
ウェンディの多少険をはらんだ言葉にも動じることなく、オスカーはいつもの調子で続けた。
「んー、でも俺はそう思うけどなぁ」
バカらしい、とひと言で切って捨てるウェンディ。しかし、それまで黙っていたロイドが意外なことを口にした。
「いや……オスカーの言うこと、あってるんじゃないかな」
ロイドの言葉に反論しようとしたウェンディだが、口をつぐんだ。この少し気弱だが思慮深い友人が言うことは、たいがい論理的な思考から導き出されたもので、間違っていることはほとんどなかったからだ。
だから、反論の代わりにウェンディは尋ねた。
「どうしてそう思うの？」
「なぁウェンディ、もし君が火薬式の銃のマニアだったとしたら、この弾を欲しいと思うか？」
「あたしはマニアじゃないから分からないわ」
「いいから」
粘り強くウェンディに問いかけるロイド。その言葉に押されて、ウェンディは自分がマニアだと思い込むことにした。
「うーん……欲しいような、欲しくないような……」
「どうして？ 大好きな銃の銃弾なんだよ？」
「だって、本物じゃないから。これは今ある銃弾とは違う偽物だから……あ！」
そこまで言って、ウェンディは何かに気づいたようだった。思わず大きな声が出てしまい、まわりの人から静かにしろ、という厳しい視線が飛んでくる。
それに三人で頭を下げながら応え、ぐぐっとイスを近づけてひそひそと話し出した。口火を切ったのはオスカーだった。
「なになに、ふたりしてどうしたの？」
「偽物は欲しくないんだよ。マニアならなおさら」
「そうよ、どうせ模造品を作るなら、本物そっくりに作るわ。少なくとも、私ならそうする」

ウェンディはかつて祖父の真似をし、時計を作ったことがある。不格好ながらも、祖父の作った時計にそっくりにさせようと、苦心したことを思い出した。
「そう。だから、マニアのための模造品っていうのは、違うと思うんだ」
でも、とウェンディは反論を試みる。
「どうしてどの本にも載ってないの？」
ムキになっているのではなく、本当に分からなかったからだ。と、ロイドは少しうつむいて、ぽつりと言った。
「まだ世に出まわっていない……あるいは、本当は出まわってはいけないもの、なのかも」
「それって……」
ウェンディが言葉を続けようとして、思わずだまりこくる。
試作品、あるいは新製品。クロスベルはあらゆる物が行き交う街である。研究途中や試作品の機械などが運ばれてきても、おかしくはない。
ただ、これは銃弾である。本来ならばおおっぴらにはやりとりできないはずのもので、しかもそれが試作品ならなおさらだ。そこには、なんらかの犯罪組織か、猟兵団が絡んでいる可能性が高い。
ふたりのシリアスな空気を察し、普段はのほほんとしているオスカーも真面目な表情だ。
「……とりあえず、外に出よう」
ロイドの言葉に促され、ウェンディとオスカーは本を片付けるために立ち上がった。
図書館を出ると、太陽がだいぶ傾いていた。影が長くなり、クロスベルの街並が夕焼けによってうっすらと赤く照らされている。もう一時間もしないうちに、夜がやってくるはずだ。
そんな中を、ロイド達は言葉少なげに歩いていた。銃弾の正体はなんとなく分かったが、これをどうするかは、まだ決めかねていた。
ふと、ウェンディが立ち止まる。
「……これさ、いっつもいる猫がくわえてたんだよね」
「ミーが？」
「シナモンが？」
ロイドとオスカーが同時に言う。ふたりは顔をあわせ、きょとんとした。
「あの猫、ミーって言うんじゃないの？」
「シナモンだよ。少なくとも、パン屋のおやじさんはそう呼んでたよ」
「おかしいな、うちの隣のおばさんは、ミー、ミーおいでーってエサをあげてたけど」
「あのねぇ、どっちでもいいでしょそんなの」

ロイドとオスカーの会話を断ち切るようにウェンディが大声を出す。
「とにかく！　これの出所、調べてみない？」
「それは……危ないんじゃないかな」
ロイドは真面目な表情で答える。他のものならまだしも、銃弾という物騒なものの出所を興味本位で探していいものか、正直判断がつきかねた。
「……俺は、警察に持っていった方がいいと思う」
ロイドの言葉に、ウェンディがあきれた顔を向けた。
「警察ぅ？　そんなのダメよ。あいつら、なーんにもできっこないんだから」
なにもウェンディが特別警察が嫌いなわけではない。この街での警察の信頼度は、多かれ少なかれこんなものだった。汚職・ワイロ・職務怠慢。クロスベル警察といえば、頼りにならないもの、使えないものの代名詞のように言われている。それはまさに、ウェンディのような子どもでも知っていることだった。
「私たちがこれを持っていったってとりあわないわよ、どーせ。それか、自分が見つけましたー！　って勝手に手柄にしちゃうんだわ」
ウェンディの言葉にはトゲがあったが、言っていることがあながち間違いではなかった。この街の警察は、面倒事は請け負わず、手柄だけは欲するのだ。
「じゃあさ、遊撃士協会は？」
オスカーが言う。この街では、困ったこと、面倒事が起きたら遊撃士協会に言え、と言われるほど、あてにされている存在だ。
「うーん……確かにギルドならとりあってくれるかもしれないけど。でも、結局私たちにはなーんにも教えてくれずに終わっちゃうと思うわよ。せいぜいもらえてあめ玉ぐらいじゃないかな？」
もしこの銃弾が危ないものであれ、危なくないものであれ、遊撃士協会はその性質上、秘密主義的なところも少なくない。仮にこの銃弾が犯罪組織のものだとして、有効な手札だと分かった時点で、銃弾のことは秘密にしてしまうだろう。それでは、ウェンディの知的好奇心は満たせないのだった。
「うーん、ギルドもダメ、警察もダメかぁ。あ、でも、ロイドのお兄さんなら大丈夫じゃないかなぁ」
オスカーに言われ、ウェンディはうーんと唸る。ロイドの兄、ガイはクロスベル警察の捜査官だ。
「兄貴は……」
ロイドは思わず口をつぐむ。ガイの所属するチームは激務で有名らしく、深夜に帰宅することもしょっちゅうだった。

ロイドはよく、ソファーで着の身着のままで寝ている兄の姿を見ていた。ベッドに倒れ込む余裕すらないほど働き通しなのだ。
「兄貴は……忙しいから」
そう言ってロイドはその案を却下したが、本心は別のところにあった。それは、セシルのことである。
ガイとロイドの共通の知り合いで、ガイより少し年下のセシルに、ロイドは密かな恋心を抱きつつあった。ただ、ロイド自身はそのことにまだ気づいてはいなかったが、ガイとセシルがふたりで笑いあっているのを見たりすると、なにやら不思議な対抗心が燃えてきて、その気持ちに戸惑う、といった風だった。
もし、自分がこの銃弾に関する秘密を見つけ出し、ガイも舌を巻くような活躍をしたら。そうしたら、セシル姉は自分のことを認めてくれるだろうか。
「やっぱり、私たちでこの銃弾の秘密を探るべきよ！」
ウェンディが盛り上がる。
「うん、俺もそうする方がいい気がしてきた。面白そうだし」
オスカーも同意した。
そしてふたりはロイドを見る。ここでロイドが首を横に振ったら、彼らはこの危険な調査をすることはないはずだ。いくらそれが楽しくてやりたいことでも、三人の同意がなければいけない。それが、彼らの間での暗黙の了解だった。
「……やってみようか」
ロイドの言葉に、ウェンディとオスカーは笑顔で返した。
仮に何か危ないことが関わっているとしても、分かった時点ですぐ兄に相談すればいい。そうすれば、兄も無駄な調査をすることはないし、自分たちも危ない目には遭わないはずだ。そうロイドは自分の中で結論づけた。
「それじゃ明日から、調査開始よ！」
ウェンディの言葉に、おー、とオスカーが声をあげる。それにロイドは、ああ、とうなずいた。
足取りも軽く家路に向かう三人。その影は長く伸び、道の上に踊っていた。

ロイドの章（前編）　了

田沢　大典
Illustration 松竜

ロイドたちは、銃弾がどこからやってきたかの調査を開始した。
　といっても、当てずっぽうに探していては埒があかない。そこで、この銃弾を持ってきた猫に着目した。
　ロイドがミーと呼ぶ、グレーの毛並みがだいぶくたびれたこの猫は、街のあちこちに出没していた。その行動範囲が分かれば、銃弾を拾った場所が自ずと特定できるのではないか、と考えたのだ。
　このことを、クロスベルの地図を広げながら、ロイドはウェンディとオスカーに説明した。ふたりの意見は「他に方法も思いつかないし、とりあえずやってみよう」というものだった。
　ロイドたちは地道にフィールドワークを進めた。
　猫たちを見かけたかどうかの聞き込みは、主にオスカーが担当した。あまり物怖じせず、気さくで話しかけやすい人柄のオスカーは、この手の調査にはぴったりだった。オスカーは老若男女を問わず聞き込みをし、大抵の人がオスカーの聞き込みに応じてくれ、情報はスムースに集まった。
　特に歓楽街で働く女性たちにとって、オスカーのような少年は母性本能を含めさまざまなところをくすぐるようで、わざわざ職場の仲間などにも尋ねたりして、情報を集めてきてくれる人もいた。
　唯一難航したのは、旧市街。不良のたまり場として有名なこの場所は、さすがのオスカーでも聞き込みを躊躇した。幸い、旧市街の方の情報は歓楽街に住む女性たちから手に入っ

た。彼女たちの住居の多くは、旧市街かその周辺だったからだ。
　オスカーとウェンディから集めた情報を元に、ロイドは地図上を色分けしていった。猫が多く見かけられたところは濃い色を、出没頻度が減るごとに色を薄くしていった。
　最初はまだらに見えたこの色分けはしかし、あるひとつのルートを見いだすにいたった。
　ロイドたちが住む西通りを抜け、中央広場を迂回するように進み、最後に港湾区へと向かうルートだった。
「多分……港湾区の倉庫街だ」
　ウェンディの家にある祖父の工房の中。広げた地図を見つめ、ロイドはそう言った。
　その言葉に、ウェンディとオスカーもうなずく。
「どうする？　今日にでも見に行くか!?」
　いくぶん興奮した様子でオスカーが語る。
「とはいえだいぶ暗いし、導力灯とかいるわね。頭につけるタイプのやつ、3つもあったかな……」
　ウェンディもだいぶ乗り気だ。そんなふたりを見て、ロイドが慌てる。
「今日はもう遅いよ。こんな暗くちゃ、導力灯の明かりだけで小さな銃弾を見つけるのは難しいし、なにより危ないんじゃないかな」
　慎重派のロイドの意見に、ウェンディもオスカーも不満をぶつけるかと思ったが、あっさりと引き下がった。
「ん〜、ま、それもそうか」
「なにより、お楽しみは取っておかないとね！」
　ふたりにとっては、どうやら今回の出来事はピクニックか宝探しでもやっているかのようなノリだった。
　ウェンディとオスカーは明日の持ち物を何にしようか、と話し合っている。その様子を見て苦笑しつつも、ロイド自身も高鳴りを押さえきれなかった。
　クロスベルの街並に帳が下りて、すこし後。
　ロイドの自宅の台所では、ふたりの明るい声が響いていた。
「にんじんはカレーに入っているから、サラダは葉物だけでいいわね」
　そう言いながら、ロイドにレタスを手渡しているのは、彼より少し年上の女性だ。明るく美しいライトブラウンの髪は軽くウェーブし、肩までかかっている。ゆったりとしたワンピースに身を包んでいるが、胸元はかなりのボリュームがあることがうかがい知れた。
「いい？　レタスをちぎるだけだからって、手を抜いちゃだめ。塩こしょうひとつするときも、食べてくれる人の笑顔を

警察に引き渡せ、と言ってくるかもしれない。だから、なんとしても隠さなくてはいけなかった。

「ごめん、邪魔だったよね」

「いや。クロスベルの地図なんて色分けしてどうするんだ？　日曜学校の課題か？　にしては、変わったところばっかりに色が塗られてたが……」

　ガイが地図を見ていたのはほんのわずかのはずだったが、そこまで見ていたのか、とロイドはガイの観察力に内心驚いていた。と同時に、動揺がにじみ出そうとするのをなんとか押さえつける。

「日曜学校の課題だよ。ゴミがたくさんあるところと、そうじゃないところを色分けしようって」

「ふーん、変わった課題だな。それに、中央広場って人通りの多いエリアだし、ゴミも出やすいんじゃないか？　それなのに色が塗ってなかったし」

　しまった、と顔に出かかるのを、なんとかごまかす。

　ガイはぽん、と手を打った。

「あ、そうか。しばらく前、シスターたちがボランティアで中央広場のゴミ拾いしてたな。それの次の候補地探しってわけか」

「そ、そうそう！　そんな感じ」

　ガイの提案に全面的に乗っかるロイドは、力強く何度もうなずく。それに対しガイは、ふーん、と気のないあいづちを打った。

「ロイドー、カレー皿を出してご飯をよそってちょうだい」

「ごめんセシル姉、その前にちょっとこれ片づけてくるから！」

　ロイドは地図を抱え、自分の部屋へと向かった。そして、すぐに戻ってきて、棚からカレー皿を取り出す。ロイドとセシルがカレーをよそう様を見て、ガイはひとり、目を細めていた。

　翌朝の十時が、ロイドたちの集合時間だった。

「ごめんごめーん！」

　遅れて最後にやってきたオスカーが、待っていたロイドたちに手をふってやってくる。

「遅い！」

「悪い悪い。荷造りに手間取っちゃって」

　一番乗りだったウェンディは、かれこれ二十分ほど待たされていた。その怒りは頂点に達しそうだった。そんなウェンディの手のひらの上に、オスカーはポン、と紙包みを置く。

「ほい、これ」

「なによ？」

　そう言いながら開けたウェンディの顔がいっきにほころぶ。

　覗き込んだロイドも軽く喜びの声をあげた。

「うわぁ……！」

　紙包みの中には、様々なパンが詰め込まれていた。デニッシュにクロワッサン。サンドイッチもある。

「出かける前に、西通りのモルジュでサンドイッチでも、って寄ったんだ。そしたら『ピクニックにでもいくのか？　これもオマケに持ってけ』って店のおやじさんがくれたのさ」

　どうやらあまりにウキウキしすぎてて、本当にピクニックだと勘違いされてしまったらしい。

「ま、もらえるものはありがたくってね」

　そう言いながら、オスカーは小さくカットされたミニミルクパンをひょいと口に入れた。

「ちょっとー、ひとりだけズルい！」

　ウェンディが不満の声をあげる。そして、袋の中に手を入れ、ガサガサと漁りだした。その様子を見て、ロイドがややあきれた表情でふたりをたしなめた。

「ほら、食べながらでもいいから、とりあえず行こう」

　おう！　と元気な返事をするオスカーとウェンディ。ふたりはパンをもぐもぐとほおばりながら、港湾区へと向けて歩きだした。やれやれ、と肩をすくめながら、ロイドもその後ろに続く。

　そんな彼らを、ひとりの男が見つめていた。年齢は二十代後半だろうか。スラリとした体躯をチノパンにタートルネックのシャツというラフな出で立ちで包んでいる。

　そして、隙の無い身のこなし。ある程度武術の心得がある者が見たら、相当の手練れだとすぐに分かっただろう。

　もっとも特徴的なのは、腰まで伸びた髪だ。髪は女性もかくやというほど美しいキューティクルを持ち、男の持つ雰囲気をより神秘的にしていた。

　彼は眼光するどくロイドたちを見つめていたが、ぽつりとつぶやいた。

「……あれは、確か」

　そこまで言うと彼は踵を返し、人混みの中に紛れて消えていった。

　港湾区は、近年急激な再開発が進んでいる。

　前は倉庫しかなかった寂れた場所だったが、街の方から徐々に建物が浸食するように立てられており、近年では巨大なタワーの建設も噂されている。

　しかし、その影響も海の方へ近づけば近づくほどなくなっていき、埠頭近くには昔と変わらない倉庫が建ち並んでいた。

　ロイドたちはそのあたりを、下を見ながら歩き続けていた。

「なぁロイドー、見つかんないぞ？」

思い浮かべながらするの。料理は愛情、よ」

「分かってるよ。もう耳にタコができるほど聞いたよ、セシル姉」

そう言いながらもロイドは笑顔だ。この女性は、セシル・ノイエス。ロイドの住むアパルトメント《ベルハイム》のお隣さんで、彼にとっては姉代わりとも言えるほど親しい人だった。

彼女はこうして、ちょくちょくロイドの家に来ては料理を作る。最初は食べさせてもらうだけのロイドだったが、次第に手伝うようになり、今では立派にセシルの助手を務められるほどにまでなった。

「ところで、ガイさんはちゃんとご飯食べてる？　残したりしてない？」

「あの兄貴が残すわけないだろ？　むしろ、足りないってわめいてるぐらいだよ」

「あら、食べ過ぎは良くないわ。栄養学の見地から言っても、食事というのは適切な量が大事なんだから」

セシルは看護学校に通っていて、看護師を目指している。最近では、会話の端々にこのような話題が出るようになった。

「……でも、そう。残さず食べてくれてるのね」

そう言って優しく、柔らかく微笑むセシル。その頬にはわずかに朱がかかっている。もともと整った顔立ちだが、その笑顔と瑞々しい若さが、彼女の美しさをより一層引き立てていた。それにも増して、恋する乙女は美しい、ということだろうか。

そんなまぶしい笑顔を見て、しかしロイドは、言い得ぬわだかまりを心に感じた。実のところ、セシルのガイへの想いは、一方通行だった。セシルがガイの話をし、自分には向けない笑顔を見せる度。ガイがセシルの想いに気づかず、的外れな受け答えをする度、彼の心には、割り切れない思いが少しずつ溜まっていくようだった。

だからロイドは、そんな気持ちを押し殺すように、もくもくとレタスをちぎった。

「あら？　ねぇロイド、サラダボウルをしまう場所、変えた？」

セシルが流しの上にある食器棚を開けて覗き込んでいる。

「あぁ、最近使ってなかったから、上の段に……」

そこでロイドは黙ってしまった。セシルは棚の上を覗き込もうとして、ぴょこぴょこと小さなジャンプをしている。その度に、彼女の豊満な胸が揺れるのだ。そして、少年であるロイドの身長からすると、その胸は眼前にあることになる。

「っ!?」

ロイドはとっさに目をそらした。その顔は耳まで真っ赤だ。

その時、がちゃり、と扉が開く音がした。

「お、晩飯はカレーか！　早く帰れた日がカレーなんて、今

日はラッキーデイだな！」

聞き慣れたその声を聞き、ロイドは軽く驚く。その声の主は、ガイだった。ガイがこんなに早く帰ってくることは、めったにないことだった。

「あら、お帰りなさい、ガイさん」

「おっ、来てたのかセシル！　ただいま」

台所を覗いたガイは、セシルを見つけると、よっと軽く手を上げた。

「兄貴、こんな早くにどうしたんだよ？」

「おいおい、疲れて帰ってきた兄貴に対して、その言い方はないだろう？　まずは『おかえりなさい』」

ガイはわざとしかめっ面を作り、ロイドに挨拶をうながした。

「おかえり、兄貴」

その声を聞き、破顔一笑する。

「おう、ただいま。今日はウチの班長がお偉いさんが集まる会議に出るとかで、早じまいだ」

まるでお店のように話しているが、もちろんガイの仕事は捜査官である。しかも、特別に編成されたチームの。

ジャケットを使い込まれたイスにかけ、そのままどっかと座り込む。

セシルはロイドにサラダボウルを手渡して言った。

「ちぎったレタスを盛りつけて。それから、缶詰を開けてツナを上にかけてちょうだい。あ、ツナの油は捨てないとダメよ」

そして手慣れた感じでコンロに火をつけ、カレーが入った鍋を、おたまでかきまわしはじめた。

「いやぁ、セシルのカレーは最高だからなぁ。ほら、今度新しくできたデパート！　あそこに入った、帝国のどっかの一流シェフが作ったとかいうカレーも食ったんだけど、もうぜんぜん」

「もう、褒めてもなにもでませんよー」

そう言いながらも、まんざらでもない表情のセシル。

「いやいや、ホントだって！」

そう言って、ニコニコとセシルがカレーの鍋と向かい合っている様を眺めていたガイだが、ふとテーブルに視線を落とした。

「ロイド、これ……」

しまった、とロイドは思った。セシルがやってくる前、テーブルに例の地図を広げていたのだ。ウェンディとオスカーはロイドの推理に太鼓判を押してくれたが、念のために最後の検証作業をしていたところに、セシルがやってきたのだった。

ロイドはかけより、地図をバタバタとしまう。本当のことがバレたら、兄はその銃弾について興味を持つだろう。最悪、

「……また探し始めて一時間も経ってないじゃないか」

だが、オスカーの忍耐力はすでに限界を超えていた。もともと、このような作業は彼の得意とするところではなかったからだ。一方のウェンディは、地道な作業に関しては才能をいかんなく発揮していた。ただ一点、地面を探すのに夢中になりすぎて、積まれている木箱や倉庫の壁に激突するのが問題だった。

（こっちのほうじゃないのかな……）

猫が姿を見せていたのは、確かにこのあたりのはずである。埠頭にはわずかではあるが漁業も行われており、猫たちはそこで捨てられる雑魚目当てに集まっていて、帰り道にあの弾薬を拾ったのでは……と、ロイドは予想していた。しかし、それも推論を重ねた結果でしかない。

いったん休憩を挟んで地図を見直してみようか、とロイドが考え出したその時。

「……ねぇ、これ見てこれ！」

ウェンディが、引き裂かれた紙きれを持ってロイドとオスカーの元に駆け寄った。よく資材を梱包するときに使われる、質の悪い紙のようだ。

「これがどうかしたの？」

オスカーの問いかけに、ウェンディはオスカーの鼻先に紙を持ってくる。

「匂いをかいで」

露骨に嫌そうな顔をするオスカー。ロイドも嫌そうな表情を浮かべたが、ウェンディの真剣な表情を見て、おそるおそる鼻を近づけた。

「……！　これ！」

「火薬の匂い、よ。近いと思う」

その切れ端からは、きな臭い匂いがしていた。

オスカーは思わず唾をごくり、と飲み込んだ。ロイドが真剣な表情で尋ねる。

「ウェンディ、これを拾ったのは？」

あそこ、とウェンディは指差す。倉庫街でも端っこの、かなりボロい建物だった。

「……行ってみる、か？」

オスカーのおずおずとした問いに、ウェンディが答える。

「もちろん！　そのためにここまで来たんでしょう!?」

そう言って、ウェンディは歩き出す。

「ちょっと待って、ウェンディ……！」

ロイドが止めるのも聞かず、ウェンディはずんずんと歩いて行く。そのまま、倉庫の裏口にある扉の前まで来てしまった。

「ウェンディ、待ってくれ！」

「なによ！　まさか、ふたりとも今さら怖じ気づいたわけじゃ

ないでしょうね!?」

ウェンディは、眼前に自分の興味の対象があると、こういう風に暴走してしまう。つきあいが長いから分かっていたが、この状況では非常にやっかいだ、とロイドは思った。

「中に誰かいるかもしれない。僕たちは、勝手に入り込むことになるんだぞ？」

「でも、今まで誰も見なかったじゃない」

ウェンディがあっけらかんとした口調で答える。

「それは、そうだけどさ……」

ロイドの言葉から勢いが無くなる。オスカーは、わざとらしく扉に耳をあてていた。

「……中からは、なんも聞こえないぜ？」

よし、と言った風で、ウェンディがドアノブに手をかける。ここまで来ては止められない、ロイドはそう観念した。

「……仕方ない。ただし、中で何かマズいものを見たり聞いたりしたら、すぐにこの場を離れよう。いい？」

わかった、とウェンディとオスカーは真剣な顔でうなずく。そのままウェンディは、極力音を立てないようにドアノブを回し、扉を開けた。

倉庫の中は、ほとんどまっ暗に近かった。ところどころにある窓から、わずかに光が差し込む。そのわずかな光を頼りに倉庫の中を見回して見たが、人影はなく、荷物もほとんどなかった。

「本当に、ここ？」

オスカーが小声で囁き、知らないわよ、とウェンディが返す。

そんな状況で、ロイドはひとり、手にいやな汗をかいていた。ここは何かが違う。空気が重い。鼻につく匂いも気になる。なにより、ここは暗すぎる。まるで闇から、今にも何者かが這い出てきそうだ。

ロイドが引き返そうかと悩んでいる間に、ウェンディは手近な木箱のひとつに近づき、フタを開けようとしていた。思わず声をあげそうになり、あわてて駆け寄る。

「なにしてるのさ!?」

「なにって、開けて確認するに決まってるじゃない」

「ウェンディ、そっち持って」

ウェンディとオスカーが、木箱の蓋をもってゆっくりと開ける。ロイドが止める間もなく、そのフタは一気に開かれた。

「……なに、これ……」

最初は、ただの黒い鉄の塊だと思った。だが、わずかな光の中で鈍く光るそれは、とても細身で、禍々しい形をしており――

と、次の瞬間、ロイドの頭に激痛が走った。平衡感覚が無くなり、自分が倒れていることに一瞬遅れてようやく気づく。

寝転がったまま、オスカーとウェンディが、黒い服を着た男たちに羽交い締めにされているのを見た。

気づくとロイドたちは、倉庫の中でひとつところにまとめられ、後ろ手で縛られていた。口には猿ぐつわをかまされ、ろくにしゃべることもできない。

強制的に口を開けさせられていると、顎が疲労し、力が入らなくなる。ロイドはなんとか脱出をしようと試みたが、あっという間にそんな気力はなくなっていた。

「どうします?」

さっきロイドたちを打ち倒した黒服の男たち。その中のひとりが、ロイドたちを見るとはなしに見ながら、別の男に声をかける。どうやら彼が、この集団のボスらしかった。

「――消せ」

ボスらしき男は、底冷えのする声で言った。

しかし、と反論しようとする相手をギロリとにらみつけ、黙らせる。その瞳は仄暗く光り、得物を狙うハ虫類を思わせた。そのままふらりと動き、ロイドたちの元へやってくる。しゃがみ、ロイドの顔へ自分の顔をグッと近づけた。

「遊び場を間違えたな」

なんの感情も持っていないトーンでしゃべる。

この男は、ロイドたちをいたいけな少年少女としても、ひとりの人間としても見ておらず、ただ自分の障害物としか捉えていない。歩くときに邪魔な障害物をどかすように、自分たちを『処分』するのだ。そうロイドは感じた。ぞっとした悪寒が、全身を包む。

その時、鈍い音と共に、男の悲鳴が聞こえた。

「ぎゃっ! ぐあっ! だはっ!」

そして、ロイドたちのすぐ近くに、いきなり男が吹っ飛ばされてきた。格好からすると、黒服たちの仲間のようだった。

ロイドたちは何が起きたのか把握できなかったが、男たちはとっさに姿勢を低くしつつ、銃を構えた。

「――そこまでだ!」

大きな声が、倉庫の隅にある暗闇から響く。

まるで影のカーテンをくぐるように、ひとりの男性が姿を現した。

(兄貴……!)

それは、ガイだった。見慣れたはずの兄。しかし、その表情は今までロイドが一度も見たことがないものだった。いつも優しいまなざしを向けてくる瞳は、相手を射貫くような鋭さを持ち、微笑みを称えていた口元はキッと引き締まっている。

そして、手にはいつも腰に下げられていた、愛用のトンファーが構えられていた。

「ま、今回はいろいろ非常事態だったんでな。まったく、ちょこちょこ動き回ってくれちゃって」

そう言いながら、気絶しているロイドたちの近くにしゃがみこみ、彼らの顔を見つめる。先程の銃声で、ロイドだけでなく、オスカーとウェンディも気絶してしまっていた。

「シズクちゃんは、こんなおてんばしないように、しっかりと育てないとな」

最愛の娘の名前を出されて、アリオスがわずかに表情を変える。

「……娘はまだ二歳だ」

「もう二歳、だろ。ちょっとしたらあちこち走り回るぞ？　気をつけないとな」

そうかもしれないな、とアリオスがつぶやき、真剣に考え出す。それを見てガイは、ククッと笑う。最近、こうやってアリオスをいじるのが、彼のお気に入りのひとつだった。

「それにしても……まさかあの地図を使ってこの場所にたどり着いちまうとはな」

ガイはそう言って、ロイドの髪を優しく撫でた。

ロイドが目覚めると、見慣れない天井が目に飛び込んだ。ぼんやりとした頭で、ここはどこだろう……と思い出す。

「ッ！　みんなッ！」

記憶が繋がったロイドが飛び起きる。と、すぐにここがさっきまで自分がいた倉庫の中ではないことに気づいた。どこかの建物の応接室だろうか、多少くたびれた雰囲気はあるものの、豪奢な調度品が並んでいる。そして、自分はソファーに寝かされていたようだ。

「ん……うぅ、ロイ……ド……？」

「うーん………ここは……？」

ロイドが飛び起きたのに続いて、ウェンディとオスカーが目を覚ます。彼らはロイドほど頭がしゃっきりしていないのか、まだどこか夢うつつ、といった様子だ。

その時、扉が開いた。

「おっ、目覚めたなチビスケども！」

目覚めには少々響く声を出して部屋に入ってきたのは、ガイだった。その手にはお盆があり、オレンジジュースが入ったコップが置かれている。それをあぶなっかしい手つきで、ロイドたちが寝ていたソファーの前にあるテーブルに置く。

何がどうなっているのか、と口を開きかけたロイドに、ガイは持ってきたジュースを手渡した。

「ここはクロスベル警察の応接室。無理言って開けさせた。あの黒服どもは、俺たちが全員捕まえたから、もう安心しろ」

ガイとアリオスが捕まえた男たちは、そのまま留置所へと護送された。街を騒がせるルバーチェ、しかも銃器の密輸入

現場を押さえたということで、普段役立たずの烙印を押されているクロスベル警察にとっては、かなりのお手柄となった。今回の件を期に、ガイとアリオス、そしてセルゲイのチームはさらなる名声を得た。しかし、ガイはそれらのことを語ろうとはしなかった。彼らには、それよりももっと大事なことがあったからだ。

彼らが落ち着き、オレンジジュースを飲み干すのを待ってから、ガイはロイドたちに尋ねた。

「……で、今回の〝宝探し〟の言い出しっぺは誰だ？」

何気ない口調だったが、ロイドたちは震え上がった。これだけの騒ぎを起こしてしまったのだ。酷く怒られるに決まっているからだ。

三人はお互いの表情を見つめた。オスカーは今にも逃げ出したい、という顔をしていた。ウェンディは、本気で今にも泣きだしそうだ。ロイドはというと、何かを諦めたような、そんな表情をしていた。

「……俺が言い出したんだ、兄貴」

ロイドが伏し目がちに手を上げる。すぐさま、ウェンディが続いた。

「ちっ、違う！　もともとあの銃弾を見つけたのは私！　だから……」

「それなら、俺だって！　……その、探そうぜってふたりに言っちゃったし……」

ウェンディとオスカーの語尾は尻すぼみになっていく。その様子をガイはじっと見つめながら、次の問いを切り出した。

「よし、言い出しっぺは全員ってわけだな。それじゃ……リーダーは誰だ？」

三人は再び目配せをし合う。今度はロイドが強くうなずいた。

「俺だよ」

今度は、ちゃんと目を見て言えた。誰が言い出したか、という点は曖昧だが、リーダーなら明確だ。状況に流されつつも、いつも大事なことは自分が決めていた。ロイドには、その自覚があった。

ガイは、そうか、とつぶやき、次の瞬間。

ロイドを平手打ちした。

さっきの銃声を耳元で聞いた時よりも、衝撃があった。一瞬何が起きたか分からず、次の瞬間には自分が床に倒れているのに気づく。打たれた頬が、ジンジンと熱い。

倒れこんだロイドを見て、オスカーは思わず身を引いた。ウェンディの目からは涙があふれている。そんなロイドを見て、ガイは部屋の外まで響き渡るような声で怒鳴った。

「リーダーなら！　仲間の安全を第一に考えろッ!!　仲間の命を危険にさらすような奴は、リーダー失格だッ!!」

「門番がなかなか通してくれなくてね」

そう言って、吹っ飛ばされてきた男をチラリと見る。どうやらガイが、彼をやっつけてしまったらしい。普段の温厚で陽気な見からは考えられない苛烈さに、ロイドは驚く。

しかし黒服の男たちは、ガイが単身乗り込んで来たと分かると余裕の笑みを浮かべた。

「へっ！　警官風情がなんの用だ」

「下っ端かぁ？　ここいらは俺らのシマで、警察も手出しはしない。そう話はついている」

そう言って下卑た笑い声を出す。

「その話は先代までだったはずだがな、ルバーチェの下っ端さんたちよ」

ガイの挑発するような口調に、男たちの表情から笑みが消えた。

「こっちはこっちで、話はついているんでね」

その言葉を聞いて、黒服の男たちは気づいた。自分たちが売られたことに。

彼らは新しくやってきたボスのマルコーニになじめずにいたあぶれ者だ。マルコーニは、今までクロスベルでシノギをしていた彼らを使わず、自分が州外から引き入れた手駒を重用した。

しかも、若頭に据えられたのは、元猟兵団［イェーガー］だと言う。力でねじ伏せようにも、相手が悪すぎた。

そこで彼らは密かに銃をかき集め、内部抗争を始めようとしていたのだ。

それをマルコーニ一派と、この捜査官はかぎつけた。しかも、その取り締まりに関しては話がついているという。つまり、いままでのように、警察に捕まっても即時釈放、などということは決して起きないことを意味していた。

男たちの顔に、鬼気迫るものが含まれていく。それに反するように、ガイは不敵な笑みを浮かべた。

「ようやく気づいたか。じゃあ後は、おとなしく手錠をかけさせ……」

男のひとりが素早く動き、ロイドの頭に銃を突きつけた。

「こっちに人質がいるのを忘れたか、警察官［ネズミ］」

頭にゴリゴリと銃を突きつけられ、痛いはずだったが、ロイドは不思議と痛みを感じていなかった。

恐怖で痛みを忘れているのではない。ガイから眼が離せなかったからだ。

この絶体絶命な状況の中で、それでもガイは、眼で語りかけ続けていた。

――大丈夫だロイド。お前たちを絶対に助ける、と。

「聞いてンのかオラァ！」

男がいらついた声をあげ、撃鉄に指をかける。撃鉄を起こす音も、ロイドはどこか遠くの世界の出来事のように感じていた。

「やっちまえ。ひとりぐらい見せしめにしないと、分からねぇバカみたいだしな」

別の男の声がして、ロイドに銃をつきつけている男が引き金に指をかけた。

大音量の銃声が耳元で鳴り響いたショックで、ロイドは意識を失った。

「……なっ⁉」

ロイドを撃ったはずの男は、抜けた声をあげて手に持った銃を見つめた。

導力銃は、本来の半分以下の長さとなっていた。銃身が途中ですっぱりと無くなっていたのだ。

そして、彼の目の前には、細身で反り返った刀を構えた男がいつの間にか立っていた。先程、ロイドたちを監視するような眼で見ていた、あの男である。その手に持った刀と、全身からあふれ出るオーラが、その男がただ者ではないことを雄弁に語っていた。

男は刀を構えたまま、刀を持ち替えて刀身を反転させた。峰打ちの構えだ。

「――二の型、疾風（はやて）！」

男がつぶやいた次の瞬間には、彼の周りに居た三人の男たちが全員銃を取り落とし、みぞおちを押さえうずくまっていた。

何が起きたのか分からず呆然とする残りの男たち。彼らの前には、いつの間にか距離をつめたガイがいた。そのまま彼らの前で、ひらり、と身体を一回転させる。

「ぐあっ！」

「ぎゃっ！」

「どぅあっ！」

遠心力を使い、トンファーを次々にたたき込む。あっという間に残り三人の男たちをのしてしまった。そのままトンファーをくるくると器用にまわし、腰に吊す。

刀を持った男の方も、刀をひと振りして、腰に吊した鞘に収めた。

「よ、お疲れさん、相棒」

ガイに相棒と呼ばれた男は、わずかに顔をしかめた。

「まさか、身内を危険にさらすような手を使うとはな……」

「お前がいるから、大丈夫だと思ってな」

ガイの言葉に、やれやれと首を振ったこの男は、ガイの相棒にしてクロスベル警察特別チームのメンバーのひとり、アリオス・マクレインである。

「理解できん」

打たれた頬も痛かったが、それ以上にガイの言葉はロイドに突き刺さった。

本当はどこかで分かっていたのだ。あの銃弾は、とてもやっかいで、仄暗い何かを運んでくることを。だが、自分の力で何とかできるのではないかと勘違いしてしまった。あの銃弾は、文字通り人を傷つけ、死をもたらす。例えそれが銃身にこめられていないとしても。

やはりあの時引き返すべきだったのだ。倉庫に入る前に。ウェンディとオスカーが、木箱のフタを開ける前に。しかしそのことに気づいたのは、男たちに捕まって、すべてが手遅れになった後からだった。

ガイを出し抜き、手柄を立てて褒められたい、認められたいと願っていたはずなのに。結局今回も、守られるだけの存在でしかなかった。

自分は、弱い。

その事実を突きつけられ、ロイドの胸は涙であふれそうだった。

ガイが一歩ロイドに近づく。また叩かれるのだろうか。だが、それでもいい。今はただ叩かれ、無力さをかみしめ、打ちのめされたい気分だった。

ロイドがギュッと目をつぶった瞬間、ふわり、と大きなものが覆い被さった。

「え……」

ガイが、ロイドを抱きしめていた。

「……あんまり心配かけさせるな。……お前が死んじまったら、父さんと母さんに……俺、なんて言えばいいんだよ」

ガイはそう言って、鼻をすすった。

包み込んでくれる兄の身体は大きく、暖かくて。

ロイドは悔しさとはまた違う理由で、涙があふれて。

「兄貴……ごめん……ごめん……ッ！」

ただ謝り続けながら、ガイの胸で泣いた。

ガイはロイドの背中をポンポンと叩き、そのままオスカーとウェンディもまとめて抱きかかえる。

「ううっ……うわあぁぁぁぁっ！」

「こわかった……こわかったよぉぉ！」

泣きじゃくる三人の子供たちを力一杯抱きしめ、ガイが微笑む。

その瞳にわずかに光るものがあったが。それを見ている者は、空の女神以外に誰もいなかった。

ロイドの章（後編）了

田沢　大典
Illustration　松竜

ティオの章（前編）

なんでこんなことになってるんだよ。

ヨナ・セイクリッドは思わずそうつぶやいていた。

ここはエプスタイン財団の研究所にある、導力ネットワークのサーバー管理室である。綺麗に整頓された室内には、少し低めのテーブルの上に最新鋭の端末が並んでいる。その価値を知るものならば速攻で卒倒しかねないほどのお金と設備だ。ここで、研究所の中にある導力ネットワークを管理している。

ネットワーク研究者にとっては天国のような場所なのだが、ヨナにとってはここは牢屋と変わりがなかった。

「なんでこんなことになってんだよ……」

まったく同じセリフを再度つぶやき、ため息をつく。うなだれたヨナを、近くの席にいた研究者が見ていた。盛大にサボっているヨナの姿に一瞬眉根を寄せたが、そのまま無視して自分の仕事に戻っていった。

そもそも、なんでこうなったんだっけ？

ヨナはそう思い、記憶の糸をたぐり寄せはじめた。

クロスベルを襲った大事件『D∴G教団事件』。その解決後、ティオの所属するクロスベル警察特務支援課は一時解散となった。この期にティオは、魔導杖（オーバルスタッフ）の性能報告をしようと、エプスタイン財団のロバーツ主任に、財団研究所への一時帰還を申し出る。

ここまではヨナにとっては関係のない話だったが、その話の流れでティオが、

「ヨナも連行しましょう」

と、思いついてしまった。

事件のどさくさにまぎれ、IBC社のラボにもバックドアプログラムをしかけて楽しく遊んでいたヨナだったが、ティオがジオフロント内にあったヨナの隠れ家に突撃。同意しない場合は隠れ家の場所を警察へ通報すると言い、嫌がる彼を強引に連れ出し、財団研究所へ同行させた。

こうしてティオ、ヨナ、ロバーツの3人はクロスベルを出発し、レマン自治州にある財団研究所へと戻ってきた。ティオは本来の目的である魔導杖の性能報告作業に、ロバーツは主任なので主任業務に戻った。ヨナはというと、いったんは財団を脱走した立場であり、そもそも居場所がない。そこで上層部は、彼を行き詰まってる難題プロジェクトに参加させることにした。ヨナ自身もプロジェクトの難しさを聞き、逆にやる気をかき立てられ、熱心に仕事に打ち込んだ。

ヨナは天才的な頭脳を持ち、閃きでプログラムを作成するタイプだ。彼にかかれば、行き詰ったプロジェクトが抱える難題も、『なんでこんな簡単なことが気づかないんだ？』と思えるほどたやすいことだった。彼は瞬時に脳内で新しいプログラムの骨子を組みあげてしまった。その点で、彼はまさに《天才》だった。

しかし、ここで別の問題が発生した。ヨナはプログラムを閃きで作ってしまうが故に、論理的に、かつチームで作っていく研究所の方法とは相性が悪かった。ヨナは脳内で組み上げたプログラムを、口頭で説明してすぐさま作成に取り掛かろうとした。しかし、他の研究員はヨナほどの天才ではない。みな、導力ネットワークの専門家であったし、秀才と呼ばれるような人材ではあった。だが、ヨナほどの《天才》ではなかった。ヨナの口頭の説明だけでは、プログラムの全容を把握しきれなかったのだ。

とはいえ、彼らも遊びでエプスタイン財団に勤めているわけではないし、秀才と呼ばれてきたプライドもある。そこで、自分たちが理解するための時間を稼ぐため、ヨナに仕様書を作ってはどうか、と提案してきた。

しかしヨナにとっては、脳内で一度組み上げたプログラムである。それを仕様書などという形に起こすこと自体に意味を感じなかった。仕様書にする時間があるぐらいなら、最初から組み上げてしまえばいい。できたプログラムに不満があるなら、瞬時に修正すればいい。実際彼はそれができるのだ。

ヨナはそのことを正直に言った。しかも彼ならではの口調で、思っていることをまったくオブラートにくるむことなく。

『仕様書は時間のムダ』『ボクひとりで十分』『あんたらは好きなことしてればいい』『修正もひとりでやれる』『いいからとっととプログラム組んじゃおうぜ』

ヨナのこの言動は、他の研究員たちのプライドを大いに傷

つけ、彼は大変な反感を買うことになってしまった。

こうして、諸手を挙げて歓迎された天才プログラマは、今やプロジェクトチームの中で好き勝手をする問題児、という扱いになっていて、ヨナも急速にやる気を失っていった。

そうなってしまうと、この仕事は『退屈』だった。常に刺激を求め、導力ネットの海をさまよっていたヨナにとって、『退屈』はなによりも恐ろしく、また忌み嫌っていたものだった。

だから今日も彼はつぶやいていた。

「あー、ダリィ」

今日何回目かの愚痴をこぼし、ヨナはイスにもたれかかり、天井を見上げた。

そんな様子を、廊下側にある窓から見ていたのは、ティオである。

「ヨナ、大人しく仕事をしていますね」

そう言ってから、最後につけ加えた。

「……今のところは」

放っておくと、いつまた逃げ出すとも限らない。そうティオは考えていた。とはいえ、今の彼女にとって大事なことは、ヨナのことではない。自分が抱えている仕事のことに頭を切り換えつつ、廊下を歩き出した。

今日のティオは、普段のダークブルーをベースとした服の上に、白衣を羽織っている。以前から研究員は白衣着用がある程度推奨されていたが、ティオにあうサイズがなかったため、彼女は着てこなかった。

それがこの度、晴れてティオにあうサイズ——というより、彼女専用のサイズ——が支給されることとなったのだ。ちなみに、手配を進めたのはロバーツ主任であり、はじめて着たときに満面の笑みを浮かべていた。その場でティオは白衣を脱ぎ捨てようとしたが、ロバーツの懇願により押しとどまったのだ。

実際着だすと、服の汚れなどを気にする必要もなく、ポケットも多いので便利だということに気づき、白衣を着ることへの抵抗感はなくなっていった。

研究所を白衣をはためかせて歩くティオ。彼女が向かった先は、研究所内の共用スペースである。建物の中だが、ガラス張りの壁面と高めの天井で開放感があり、外に植えられた緑が日に鮮やかだ。スペースにはイスとテーブルがそなえつけられ、少し離れたところには自由に飲めるお茶のセットなどもある。昼食時ともなると、ここにパンやお弁当を持ち込んで食事をする研究者が多くいる。

今は午前中なので人影もまばらだ。ひとり静かに考え事をするのには持ってこいの時間である。

ティオはイスに腰掛け、持ってきたレポート用紙を広げ、ペンを握った。レポート用紙の一番上に、ペンを走らせる。

『魔導杖の実戦運用における問題点と対処法について』

年相応のやや丸みを帯びたかわいらしい字だが、書いている内容はそれと反して硬い。そして、次の行にペン先は向かった。

『サブウェポンとしての魔導杖の可能性』

ここまで一気に書いて、ティオはレポート用紙を見つめた。とんとん、とレポート用紙をペン先でつつき、サラサラとメモをする。

『パターンで考える』

『テストケースで具体的に』

『ロイドさん、エリィさん、ランディさん』

思いついたことをメモし、ペンを走らせていた手を止めて眺める。いけそう、と小さくつぶやいた。

ティオの今の仕事は魔導杖の運用試験の結果を報告することである。とはいえ、具体的な数字は、ロバーツの手を経由して、すでに魔導杖開発チームには渡っていた。今すべきことは、もっと大ざっぱな話、いわばグランドデザインのところだ。

ティオは魔導杖一本で魔獣などと戦ってきた。特務支援課で積んできた経験からいうと、この方法には可能性と同時に限界を感じていた。魔導杖は確かに詠唱を必要としない点が魔法(アーツ)と異なり、また通常の剣や銃などと同じ、タイムラグなく隙が少ない攻撃を可能にしている。

とはいえ、大きな括りでいえば、ただの武器である。あらゆる武器には長所と短所があり、また得意とする人と不得手とする人がいる。それを明らかにすることで、魔導杖の新たな開発の方向性を見いだせないか、と考えていたのだ。

ティオは考えながら、メモを続けた。新たな開発の方向性、のところを四角く線で囲んで強調する。

ちなみに、ティオは導力ネットワーク端末を使って文書を作ることは可能である。むしろそちらの方がキーを叩くだけでいいので楽ではある。だが、こういう風に考えをまとめる際には、紙とペンを使った方が効率的であると、ロイドに教わったのだ。いろいろな要素を検討し、つなぎ合わせ、まとめていく作業においては、紙とペンがもっとも効率的である、とロイドは語っていた。彼が事件の際、ホワイトボードに関係者の相関図などを分かりやすくまとめていくのを見ていたので、その言葉には説得力を感じていた。

「……では、はじめましょう」

そうつぶやいて、まずティオはランディのことを想像してみた。ランディなら魔導杖を使って、どのように戦うか、と考えていく。

ティオの想像の中のランディを、魔獣と対峙させる。ランディは魔導杖を持ってしげしげとそれを眺めていたが、すぐに魔獣と距離を取った。魔導杖は中距離での攻撃を得意とする武器なので、セオリー通りである。戦闘のプロであるランディらしい判断だった。

だが、何発か魔導杖で攻撃するものの、有効打を与えるに至らない。しかも、魔獣の攻撃を杖で受けることになってしまい、ランディは戸惑いを隠せないようだった。

すると、杖を捨てて、素手による格闘戦スタイルに持ち込んでしまった。あふれる腕力を使い、魔獣を素手で倒したランディを見てティオは

「……ダメですね」

はあ、とため息をつく。そもそも格闘戦を得意とするランディは、もっとも魔導杖と相性が悪いのだ。とはいえ、この思考実験がまったく無駄だったわけではない。

ティオはレポート用紙にペンを走らせた。

『魔導杖自体の強度強化』

『実戦では不意打ちに対応するために組み合うことも』

実際、ティオ自身も敵との遭遇時、不意を打たれて魔導杖で攻撃を受け流したことが何度かある。その度に、壊れはしないかと冷や汗をかいた。魔導杖自体が丈夫になれば、このような状況にも多少は対応できるはずだ。

「いけそうです……」

自分の方法論に手応えを感じ、つぶやくティオ。今度はエリィが魔導杖を持った姿を想像する。魔導杖を手にしたエリィの姿は、銃を持っている時よりお嬢様っぽく見えるな、などとティオは考えた。それに、以前絵本で見た魔女のようだ、とも。そのままとんがり帽子にローブを羽織ったエリィの姿を想像する。想像の中のエリィはノリノリで、持っていた魔導杖をくるくるとステッキのように振り回し、ポーズを取った。

「……くっ」

ティオはひとりで肩を揺らして笑ってしまう。いけない、今は仕事の最中、と思い直し、魔女の恰好からエリィの普段着に姿を戻す。

魔獣と対峙したエリィは、杖を振るい攻撃をしかける。杖のひと振りで放射状にアーツによる攻撃が広がると、驚きの表情を見せた。

エリィが普段使う導力銃は、単体のターゲットをピンポイントに狙うものである。対して魔導杖の攻撃は、放射状に広がる、いわば面攻撃である。

さらに、攻撃後、敵の反撃をかわすために取った間合いも、魔導杖の射程から外れてしまうものだった。導力銃に比べて、魔導杖の射程は短い。次の攻撃時に、射程が足りずに再度間

合いをつめるという無駄な動きを取ってしまうエリィ。
そこで想像を止めて、ティオはペンを走らせた。
『点攻撃と面攻撃、その特性の違いを持ち手にレクチャーする必要あり』
エリィの普段の戦い方は、導力銃による遠距離攻撃と、アーツによる攻撃および援護、というものだ。銃というものの特徴を存分に生かした方法だが、現状の魔導杖とは異なる。魔導杖が導入される場合には、選択肢として導力銃と並べられるだろう。その際、それぞれの特徴を理解して選んでもらう方がいい。
ここまで一気に書き上げ、ティオは一度ペンを置いた。そのままイスから立ち上がり、お茶のセットが置いてあるところでお水をカップに汲み、戻ってきてテーブルに置いた。
再度イスに腰掛け、水を口に含む。冷やされた水が、身体に心地よい。気分を一新したティオは、さっきの作業の続きに取りかかった。
最後はロイドである。しかしティオは、魔導杖を持っているロイドがあまり想像がつかなかった。とりあえず、彼女の想像の中にあるロイドを引っ張り出してくる。
『ティオ』
いつもの服を着た、いつものロイドだ。
『元気でやってるか？　風邪とかひいてない？』
自分の頭の中で想像したロイドもひどく心配性なので、思わずティオは苦笑してしまう。
大丈夫です、主任もヨナも、元気でやっています。
そう返答すると、ロイドはよかった、と言ってはにかんだ笑顔を見せた。その笑顔を思い出し、そういえば、顔を合わせなくなってまだ一ヶ月も経っていないけれど、随分と長いこと会っていないような感覚だな、と気づく。
『仕方ないさ。特務課ができてから俺たち、ずっと一緒だったから』
ずっと、一緒。
その言葉に、少しティオの胸が熱くなる。研究所で魔導杖の開発をしていたころは、誰かと一緒だという感覚はほとんどなかった。研究員は仕事上だけのつきあいだったし、ロバーツはティオのことを気遣って──というより、嫌われることを恐れて──あまりペタペタはしてこなかった。幼い頃、悲しい事件に巻き込まれたティオにとって、特務支援課での日々は、ほぼはじめてに近い『他者と過ごす時間』だったのだ。
『ティオはどう？　寂しくない？』
寂しい……？
考えたこともなかった。今まで他人と濃密な時間を過ごすことがなかったティオにとって、『寂しい』という感覚はあまり意識してこなかったからだ。そのまま、自分の心に問いかける。
……寂しい、です。会えないのが。
『えっ？』
驚くロイドに向かって、ティオは答えた。
キーア分が、とっても不足しています。
『あははっ！』
想像の中のロイドが破顔一笑する。その笑顔につられて微笑んだその時。
「プラトーさん？」
いきなり外界からの刺激を受けて、ずっと内に向いていたティオの意識が急激に外に向く。ほんのわずかのタイムラグを置いて外界を認識すると、自分の目の前に何度か見かけた顔があった
「ああ、よかった」
そう言ってその青年ははにかむ。他の研究員と同じように白衣を着ているが、その下に着ているシャツは帝国の一流ブランドのものだ。スラリとした身で見事に着こなしている。
顔立ちも整っている。ブロンドとブラウンの間、といった色合いの髪の毛は短めにまとめられ、整髪料によってラフにまとめられている。マスクは甘く、女性にもてそうな顔だな、とティオは自分のことを差し置いて考えていた。
「あの……何かご用でしょうか？　エメルトさん」
ティオが記憶のふちから名前を引っ張り出して問いかける。彼の名前はマルセル・エメルト。帝国出身で、ティオが戻ってくる数ヶ月前からこの研究所に入った若手研究者だ。
「いえ、なんだかひとりで座って……」
そこまで言って、マルセルは楽しそうに微笑んだ。
「しばらく難しい顔をしているかと思ったら、肩を揺らせて笑ったり、切なそうな顔をしたり、急に微笑んだり。いったい何をしているのかな、と思いまして」
想像の中でロイドたちと話していた時に、いろいろ顔に出ていたらしい。ティオは恥ずかしくなったが、それ以上に黙って見ている相手の趣味の悪さにイラッと来た。
「……いつから見ていたんですか？」
「ついさっき」
嘘だ。この笑顔はかなり前から見ていたに違いない。ティオはいつものジト目で、マルセルをにらみつける。
「……少し、考え事をしていただけです」
「ああ、いやいや。気分を害されたのなら謝ります。あなたのされている研究は、弊社にとってもとても大事なものなのですからね」
わざとらしく謝るが、そこに誠意の一切を感じず、ティオはまたもイラッとしていた。
彼の言う『弊社』とは、ラインフォルト社のことである。

ラインフォルト社は財団に多額の資金援助を行い、この研究所に研究室を開設した。そこでは、セプチウムを使った魔導関連の新規アイテムの開発が行われている。マルセルは、若くしてこの研究室の室長を務めていた。

「新しい魔導杖のあるべき形……魔導杖のスペシャリストであるプラトーさんと開発できるとは、光栄です。ともに協力しあい、次世代の魔導杖開発を成功させましょう」

マルセルの研究室が作ろうとしているのは、ティオの持つ魔導杖、その量産型ともいうべきものだった。精巧なパーツを使い、卓越した術者によって運用される現状の魔導杖は確かに強力な武器ではあるが、運用が難しすぎる嫌いがある。

そこで、もっと量産ができ、安価で、容易に扱える。そんな魔導杖を作りたいとラインフォルト社は考えた。

ティオははじめてこの話を聞いた時に、

「いかにも武器屋さんが考えそうなことです」

とひと言で切って捨てた。

戦闘のスペシャリストであるランディとの雑談の中で、兵器というものはどう生まれ、どう普遍化され、そしてどう災禍をまき散らしたのか、という話を聞いていたからだ。ランディの言を借りるならば、魔導杖はテスト段階が終わり、実用段階に入ったことになる。これからはより多くの人が魔導杖を持つことになるだろう。

ティオのように体格に恵まれず、体術なども会得していない者がそれでも武器を持たなくてはいけない時、魔導杖は導力銃などと並ぶ『力』となるだろう。それによって救われる命もあるはずだ。

だが、同時に大量生産されれば、それは戦争の道具ともなり得る。それもまた、導力銃と同じだ。特にラインフォルト社は、導力銃をはじめ、さまざまな種類の武器を作っている会社だ。その多くが、帝国軍に納品されている。そこが目をつけたということは、魔導杖を本格的に軍の中で運用するつもりなのだろう。正直、あまり気分のいいものではない。

とはいえ、ティオは子どものように次世代魔導杖の開発を拒否することはしなかった。そんなことをしても、自分の代わりの人間が開発にたずさわり、世の中に量産型の魔導杖が出ることは明白だったからだ。

それならば、せめて自分の目の届くところで、よりよいものを作りたかった。例えば行商人が、街から街への街道を歩く時に、万が一魔獣に襲撃されてもなんとか身を守れるように。それによって助かる命があると信じて。ティオが自分なりに答えを出した『自分にできること』だった。

とはいえ、マルセルの言動は、ティオの癇にいちいち障った。やっぱり彼女の中で、次世代魔導杖の開発と、それにたずさわるラインフォルト社の人間は、好かないものだったの

だ。そんなティオの気持ちを知ってか知らずか、マルセルがわざとらしく会釈をする。

「それでは、私も仕事に戻ります。そうだ、今度研究室に遊びに来てください。プラトーさんなら、大歓迎ですよ」

その言葉にティオは沈黙で答えた。ティオのジト目に見送られ、マルセルが立ち去る。彼が立ち去った後、ティオはひとつため息をつき、レポート用紙とペンを小脇に抱えて、空のカップを手に持ち立ち上がった。そして、ぽつりとつぶやく。

「…………変な顔、してたんでしょうか」

またも顔を赤らめ、足早にその場を立ち去った。

ネットワーク管理室でダルそうにイスに座っていたヨナは、いきなりすっくと立ち上がった。

「トイレトイレ〜っと」

パーカーのポケットに手を突っ込んで、わざと他の研究者に聞こえるようにしながら廊下に出る。管理室からトイレはすぐそこだったが、ヨナはトイレに目もくれず廊下をそのまま先に進んだ。

「マジメにやってられっかよ」

そう言って、ペロリと舌を出す。ヨナはこうして、仕事中にも関わらずプラプラと出歩くクセがついていた。

ヨナが居た頃に比べ、この研究所も拡張がされていて、見知らぬ場所がいくつもある。中には極秘の研究がなされているらしき部屋もあり、この前は警備員にあやうく見つかりかけたりもした。それでもヨナがこの探索をやめない理由はただひとつ、『面白そうだから』である。

今日も気の向くまま、白くて無機質な廊下を歩いていると、ひとつだけドアが開け放たれた研究室を見つけた。スパイにでもなった気分で、ヨナは足音をしのばせ近づく。ドアの横にあるプレートには、

「ラインフォルト社・次世代魔導技術開発チーム・エプスタイン財団研究所分室」

と、長くて仰々しい名前が掲げられていた。

「ラインフォルト社か……」

導力ネットでも、ラインフォルト社の名前は有名だった。帝国軍の多くの武器を納入している大企業。そこの分室がここだ。ヨナも男の子である。何かしらの新兵器の開発をしているのではないか、という好奇心がムクムクと頭をもたげてきていた。

「ま、開けっ放しで不用心なのが悪いってことで」

誰に言うともなくそうつぶやき、身をかがめてスルッと研究室の中に入った。

部屋の中は薄暗くなっており、導力ネットワーク端末の画

面の灯りだけが、部屋をほのかに照らしている。どうやら室内に人はいないらしく、人気はない。そんな中、部屋の中央、やや奥まった場所に、多数のケーブルに繋がれた錫杖のようなものが、透明なケースの中に格納されていた。

そこまで身をかがめながら歩いて行き、ヨナは下からそのケースを見上げた。

「これ……ティオが使ってる、アレだよな？」

アレ、とは魔導杖のことだった。ティオが持つものとシルエットは近しいが、さまざまなディティールが異なる。パーツが多く、いかにも機械という雰囲気を持つティオのそれとは異なり、あまり出っ張りなどはなく、いくつかのブロックに簡単に分けられるような構造になっているようだった。

ここにあるものは、次世代魔導杖、そのテスト機だった。

「……なるほど、それで」

ヨナも情報としてラインフォルト社が研究室をここに持っていること、ティオが魔導杖についてあれこれとレポートをまとめていることは知っていたので、すぐにこれがなんなのか察したようだった。しかし、これはヨナの知的好奇心を満たすようなものではなかったらしい。

「つまんねぇの。もっとこう、導力銃の最新型とかさ、すんげービームみたいなのが出るやつとかならいいのに」

そう言って、部屋を出ようと踵を返したその瞬間。

部屋中に耳をつんざくようなアラート音が響いた。それと同時に、部屋中の導力ネットワークの端末画面が赤と黄色の点滅をはじめる。

「ななっ、なんだ⁉」

驚いたヨナは、チカチカと点滅を繰り返す端末画面を覗き込んだ。その表情が、一瞬で険しいものに変わる。

「……なんで、こんなもんがあるんだ？」

このまま放っておくとマズい、と直感で判断する。しかし、自分がここに忍び込んだことがバレてしまうのはもっとマズい。どうすれば……とヨナが逡巡していると。

「——おい、そこに誰かいるのか！」

マズい、とヨナが思った瞬間には、声をかけてきた人物がけたたましい足音とともに部屋に踏み込んできた。

ティオの章（前編）了